川柳塔

平成六年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻八一一号

白川協加盟

No. 811

十二月号

新刊

句集

甲吉川柳

工藤甲吉著

西尾　栞・東野大八・橋高薫風序文
B6判・240頁・クロス装上製本
定価3000円（〒380円）

柳歴六十余年　甲吉川柳の集大成

折あらば玉子こわれてやるつもり
追憶をたどれば長く長くなる
レントゲン我が酒ガメの偉なるかな
荒武者に似る鱈の貌北の貌
人生はよいしょこらしょにどっこいしょ

発行所　川柳塔社

気高町制施行四十周年記念　誌上川柳大会

課題と選者（各題2句）

「気」橋高　薫風「湯」小林由多香
「高い」天根　夢草「白い」林　荒介
「郷」柏原幻四郎「風」江原とみお
「萌える」小出　智子「光」土橋　螢
「遥か」神平　狂虎「翔ぶ」小谷美ッ千

投句料　1500円（現金書留または定額小為替）
締切　平成7年4月20日（当日消印有効）
表彰　平成7年7月（本人あて通知）

入選1句1点方式で総合成績上位10名に当地で気高町長賞ほか贈呈

投句方法　400字詰原稿用紙に作品と住所・氏名（柳号）・所属柳社を明記して左記へ

投句先　〒689-03　鳥取県気高郡気高町飯里84－4
鈴木公弘方「誌上川柳大会」事務局
（☎0857－84－2886）

主催　気高町文化協会　**主管**　くろぼこ川柳会
後援　気高町　気高町議会　気高町教育委員会
気高町社会福祉協議会　気高町観光協会
気高町商工会　鳥取県川柳作家協会ほか

退任ごあいさつ

西尾　栞

本年一月の八〇〇号記念式典の節、この花道に乗って、退任の弁を申し上げた処、同人総会によって決定するまで待てとのことで、十ヶ月待ってやっと審議していただき、先月号の世代交替の巻頭言のとおり、同人総会劇を報告しましたが、未だ私の退任のごあいさつをしていないことを指摘されたので、茲に謹んで、ご挨拶を申し上げます。

顧みますると、昭和五十七年十月三日の同人総会で、正式に理事長（主幹）に就任挨拶して以来、十二年の長きに亘って、皆様の同人吟の玉句を選句させて戴き、洵に有難うございました。折角の佳句を見のがしたことや、色々と失敗のことも多々あったと思いますが、高年齢の脳細胞の不足と思召してお許し下さい。何分、毎月十五日締切の同人五〇〇人の玉稿十句を短時日の間で選句するのだから、目をすることもあったと思います。しかるにお叱りもなく、長い間、お付合い下さいまして、本当に有難うございました。改めて御礼申し上げます。

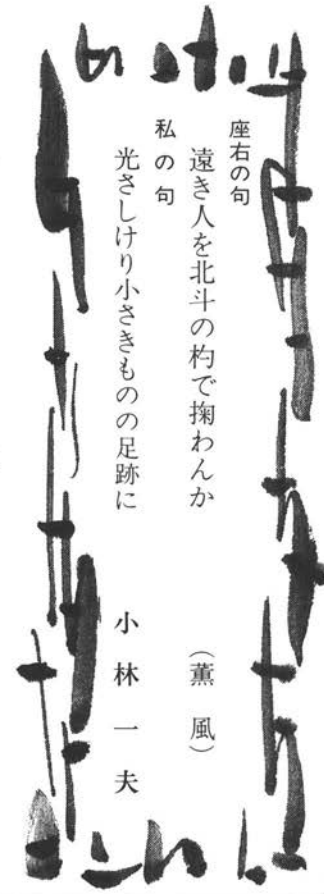
次に他柳社には、長年に亘って、塔社主幹として、公私共にお付合い下さいまして、有難うございました。茲に謹んで篤く御礼申し上げると共に、今後とものご風交をお願い申し上げます。

さてこの度、名誉主幹というポストを与えられ、悠々自適で遊んでいては、年寄りに毒だとて、引き続き巻頭言を書くよう仰せつかりました。例によって例の如き拙文を原稿用紙三枚に書く仕事ですが、又々皆様のお目を汚すことと存じます。何卒よろしくお願い致します。

先月号に、新主幹並びに新理事長の心強い新任挨拶を読みまして、川柳塔社の洋々たる前途と希望に感激している次第でございます。何卒、旧に倍しましてご支援ご指導の程、お願い申し上げます。

終りになりましたが、他社柳人各位、塔社同人、誌友の皆々様に永い間お付合い下さいました御礼を申し上げると共に、後来共のお付合いの程、お願い申し上げます。

茲に謹んで退任のご挨拶を申し上げます。有難うございました。



座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか　（薫風）

私の句

光さしけり小さきものの足跡に　小林一夫

川柳塔　十二月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　退任ごあいさつ……西尾栞……（1）
霧の中……田中薫……（2）
川柳塔（同人吟）……西尾栞選……（4）
大空のこころ(48)……橘高薫風……（41）
自選集……（42）
川柳の群像　久門薩城……東野大八……（46）
■古川柳　柳籠裏二篇研究（二十四丁）……（48）
水煙抄……黒川紫香選……（52）
秀句鑑賞「同人吟……林瑞枝……（50）
　　「水煙抄……福井桂香……（74）
新選者のことば……高杉鬼遊・小出智子・西出楓楽……（75）
銀河系……河内天笑選……（76）
茴香の花……八木千代選……（80）

霧の中

田中薫

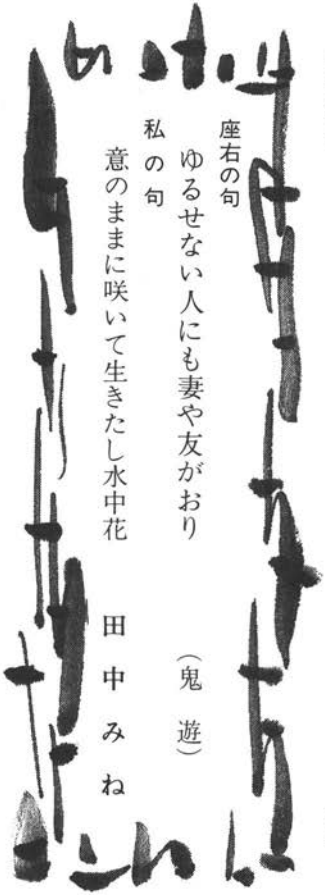
ぼくが現代川柳を勉強しようと思い立ってたちまち困惑したのは、文献、資料の寥々たる風景に出会ったことであった。

大阪、尼崎、神戸、明石の図書館に足を伸ばし、短詩型の蔵書目録のコピーをいくつか手に入れてみても、書誌、年表を、尾藤三柳編『川柳総合事典』の労作に頼る状況では、霧の中で進むべき道を探すようなものだ。

いきおい、若いころから好きな古本屋まわりに拍車がかかった。妻との旅程に時間を作り、雨の神田の古書街を四時間歩いた収穫が一九五七年、孔版刷り『人民川柳』六冊、『桂信子全句集』『渡邊白泉全句集』のみだったということもある。『人民川柳』では、大村沙華氏連載「古川柳天皇史」が興味深かった。

神戸西元町の古本屋で見付けた、一叩人編『新興川柳選集』には、田中五呂八―森田一二の論争が収録されていて、ぼくは繰り返して読み、ぼくの川柳観の基礎ともなったし、五呂八―一二の論争から、現代の川柳を眺めると、批評の欠如を痛感する。文学に、真の批評は不可欠であり、クリエイティブな批評

「鐘」……佐々木鳳笙選……(82)
一路集「派手」……桜井千秀選……(82)
「つかむ」……木村あきら選……(83)
初歩教室「山」……吉岡美房……(84)
各地柳壇（佳句地十選／亀岡哲子）……(86)
■エッセー「恩師」……牛尾緑良……(99)
十一月本社句会……(100)
■川柳こぼれ話「川柳とリズム」……田中正坊……(104)
甲吉川柳記念句会参加みちのくの旅……瀬戸まさよ・茨木修……(105)
NHK川柳教室　富山吟行の旅……黒田能子……(106)
国民文化祭川柳大会に参加して……西浦小鹿……(107)
柳界展望……(108)
浜本義美氏さんを悼む……仁部四郎……(110)
十二月各地句会案内……(111)
■編集後記……(112)



座右の句

ゆるせない人にも妻や友がおり　（鬼遊）

私の句

意のままに咲いて生きたし水中花　田中みね

が不毛な世界に文学は育たない。

山村祐氏から頂いた『現代の川柳』、墨作二郎氏復刻『自由律川柳合同句集1』などが並んでいるぼくの書棚に、敬愛する先輩が、『中村富二・千句集』を加えて下さったのは、今年の春浅い、風の強い日であった。

旬日、ぼくは忘我のうちに、富二の世界に遊んだ。朱色に金文字、フランス装の句集を終日手放さないぼくは、「いい人が出来たみたいね」と、家人に冷やかされたりした。

本が好きな人にはおわかりであろうが、憧れの書物を手にしたよろこびは、恋人の微笑にも比すべきものである。

私の影よ　そんなに夢中で鰯を喰ふなよ
轢死者の下駄が歩こうとする
みんな死なないで、便所へばかり行き
降りてゆく階段に底がない
では私のシッポを振ってごらんにいれる
帽子を脱ぐ　目と鼻が　はらはら落ち

富二の作品はメタファーの世界である。

文学は抒情であるが、抒情は、常に抒情を克服しようとする。抒情が抜けようとする方向に詩があり、詩の核はメタファーにほかならない。ぼくは、川柳が文学であるためにはメタファーのメチエを手に入れなければならないと考えている。そのとき、川柳は、川柳という名称を離れて、一行詩と呼ばれるべきかも知れない。

川柳塔

西尾栞選

米子市　新　正子

木枯らしに私の影を整える
去年までは味方であったコンパクト
引き出しの恋をときどき出して見る
しあわせな今を冷凍しておこう
死ぬ時はひとりと思う二十五時
まごころを包む昨日の新聞で

高槻市　川島　諷云児

針箱の中に眠っている火種
世渡りの武器にはしたくない涙
立て板に水の蛇口が締まらない
頂点の風は下から吹き上がる
行きずりの女と怖い夢を見る
極楽へ一歩近づく除夜の鐘

米子市　政岡　日枝子

老残の色は醜いものなのか
病み続く中にも人としての色
首筋の錆が一番厄介だ
筋書きは無いけど母が書く手紙
上品なグループ　少し疲れます
毒らしき物ばかり有る台所

唐津市　久保　正剣

雑兵の皿　枝豆はみんな殻
止り木の客の視線にドアが開く
相討ちの決闘待ってる奴が居る
失意いまいっ気に落ちる砂時計
絶やすまい賞味期限のない笑顔
拝復の愛が尻込みばかりする

米子市　青戸田　鶴

大根がおいしくなった秋の膳
絵画展やっぱり秋は落着ける
大方の事は忘れて生きている
手抜きする事が出来ない友もいて
うしろから見れば貴女も淋しそう

遠くから他人の顔で見ていよう

松原市　小池　しげお

曼珠沙華いつしか母の齢を越え
菊花展　昔の父の声がする
子に残す樹だけ真っすぐ植えておく
仕合せなことで一枚きりの舌
逃げ道を開けて謝りやすくする
古時計だんだんずるくなって来る

藤井寺市　吉岡　美房

もう師走この短さは何だろう
この歳で遊びなはれと言われても
年金も貰わず死んだ友のこと
込み入った話羊羹食べはぐれ
豊作を雀に言ったのは案山子
らしくない顔の詐欺師にしてやられ

豊中市　田中　正坊

流れにはもうさからわぬ余命表
好きなのは人間嫌いなのも人間
動く歩道セカセカセカと日本人
人ごみのゴミのひとつが私です
病名が四つに増えていたカルテ
セーターは大き目がよし衣替え

竹原市　小島　蘭幸

一つ覚えの台詞でいつも幕が開く
順調に肥えていますと医者が言う
節水の癖が続いている秋よ
まっすぐをつらぬく私の美学
涙一粒　真珠に見えたこともある
「こけちゃいました」いい台詞だと思うなり

西宮市　奥田　みつ子

することの何もなくなる日が怖い
干支の土鈴並べ好運つかまえる
傷み抱いて真珠ひときわ艶を増す
灯台に孤高の父をダブらせる
くやしいけど忘れたことにしてあげる
えらそうに生きて知らないことばかり

松江市　舟木　与根一

若者を送り老い込む道祖神
町捨てる子らをせっせと塾へやり
後継者居ない農家だパンを焼く
差別語が残る敷居の高い家
山並みもお色直しか鰯雲
少し目線下げると孫にしてやられ

米子市　林　荒介

同居して筋をいろいろ組み変える
仏さまに見てもらう色々なお花
鐘の音　花屋に返すものがある
珈琲にこだわりがあり負けられぬ
傘立てにある返したはずの傘
全身で返そうとする借りがある

大阪市　西出楓楽

女坂うぬぼれ鏡拭きながら
口喧嘩しながら戻るフルムーン
ホルマリンにまだ初恋は漬けたまま
修正液と消しゴム持っている強み
腹立ちへ大根おろしすぐ出来る
みちのく訛りみな善人にちがいない

笠岡市　松本忠三

宝くじ下一ケタが物を言う
おじいちゃん犬の散歩が手頃です
婆ちゃんが親子三代アンカーで
雨乞いも時代錯誤の甚だし
わたくしの頑固を妻が聞いてくる

豊中市　安藤寿美子

秋晴れにそっと心を干してみる
手の中に記憶をにぎりしめて秋
心経はまだ途中まで忌が明ける
どんな歌うたってみても挽歌めく
あの人が居たら居たらと言い過ぎか

鳥取県　新家完司

島へ行く青年医師に幸あれよ
台風をものともせずに飲みに行く
久しぶりに点滴受けて小休止
大将のわたしは南向きの部屋
憎しみで汚れた枕裏返す

島根県　堀江正朗

見えた日を箸語りだす栗ごはん
戦盲の世間知らずに苦労かけ
絶ち難き想い割り切ってる戦盲
髪梳いて乳液つけてくれる妻
闇から闇に移る四季にも動く勘

島根県　堀江芳子

もやもやの捨て場妻いて夫といて
翔び立てぬ訳慰める白い杖
天高し僅かの預金してはずむ
戦盲のおでこ打つとこ決まってる
子ごころに戻すと光る胸の中

鳥取県　土橋螢

長月の陰に隠れた恋ひとつ
虚を実に繕いながら日記書く
舌出したことが一生涯の不覚
実印を渡すとろくな事はない
来年も生きる作戦立てている

島根県　小砂白汀

酔うたから言うではないがと酔うている
ある時は酒仙となって膝を借り
人肌のぬくもり慕う秋の蠅
秋深しハゼには沙魚の夢があり
気まじめな目覚まし憎しありがたし

堺市　楊井二南

すねに疵持つと呂律が回らない
白内障ぐらいと看護軽んじる
場所柄をわきまえている雨宿り
過信した薬の量を間違える
年寄りの薬　気休めだけらしい

堺市　高橋千万子

あと味の悪さに大きなアクビする
六法は知らず女の道を説く
あの時がよかった頃をだれも持つ
この耳でたしかめますと受話器とる
生きのびた分の苦労と娘が笑う

加古川市　吐田公一

ハロー・ハワユーそれから後が続かない（アメリカ生活）
ハウマッチ使えば日本語返って来
イエス・ノーだけで入国審査受け
タックスとチップで結構高うつき
横断歩道つい右側を見てしまい

寝屋川市　江口度

はっきりせいとどなりたくなる曇り空
上司に叱られボトルの栓がゆるみだす
藁をやく匂へ埴輪目をさます
雀からリベート貰っている案山子
鶏頭が咲きつづけてる忠魂碑

尼崎市　春城武庫坊

秋晴れに妻の視力がもどらない
下駄履きで武者行列を待っている
賞味期限に近くも一度燃えてみる
逆転のゴールは風に支えられ
事の本音をすっかり聞いた三次会

尼崎市　春城年代

雨降れば氾濫となる神の国
わが身さえままにならぬか老ゆるとは
加速する老いに逃げ足とろくなる
風邪ごときに気弱になって二三日
主婦業のすべてに他愛ないことよ

松江市　柳楽鶴丸

宍道湖の夕陽　西湖を思い出す
妻の笑顔を見ていると平和だな
健康な君の素顔は綺麗だよ
誰よりも怖い女が一人いる
何を食べてもおいしい味覚音痴かも

熊本市　永田俊子

一日一善わたしの袋満たしゆく
風船孤独あなたの風を待っている
放物線かいて届かぬ夢ひとつ
何もつかめなかった運命線を見る
平凡な橋を渡ってパンを焼く

横浜市　菱田満秋

ブレーキの音に真夜中引き裂かれ
ツルやカメ長寿の名簿にも並び
名月の周りきらめく星がない
スリットの深さへ視線追いつけず
美女の靴ばかり見ていたエレベーター

甘日市市　林野甦光

ポイントを外す器用をわきまえる
雀達帰る童話の森があり
脱ぎ捨てたシャツに伏せ字が置いてある
炊事場の唄　朗らかに何かある
地価の高いとこには住まぬ石地蔵

今治市　矢野佳雲

夜祭りを観光客が昼にする
銀行強盗必ず盗った車で来
ガラス細工のような人には手を触れぬ
木から落ちた猿に学んだことがある
別れる気でいるがお米を研いでいる

東大阪市　森下愛論

夏の胃へ流れの早い冷ソーメン
憂さ晴らす酒と知ってか勧めに来
理で詰めて酒でおだてて返事待つ
シクラメンきれいな嘘を連れて来る
酒瓶が空になるまで嘘をつく

島根県　西村早苗

年齢に勝てぬがとぼとぼとは歩くまい
つぶやきがまだ聞えてるそば枕
ペンダント見つめて雨へどうしょうか
あなただけ知ってる笑いもっている
十二月ひとり男の拗ねた顔

京都市　都倉求芽

今日の正解が明日はジョークかも
もしかして一番強いのは鳩か
人まえで薬は服まぬ若づくり
好き嫌い正反対で親友で
紅がらに温習会を報す秋

下関市　石川侃流洞

ちちろ虫鳴くな淋しい酒になる
出迎えのない鍵穴の得手勝手
味付けが亡母に似て来て妻も歳
先手必勝　隣の布団もう鼾
行雲流水の夢　年金があがらない

柳井市　弘津柳慶

皆無言引揚船によりそって
失業の僕を故郷が呼んでいる
退職金妻からちくり釘さされ
姑に嫁ゆとりを持って応対し
応援歌学生帽を握りしめ

奈良市　天正千梢

特別機あやまるだけの外交で
八月十五日　二児の母たり背をのばし
穂すすきに語りかけてる孤独かな
梅干の匂一〇〇点あげておく
何なやみあるらん青い栗が落ち

松原市　玉置重人

涼しい顔で他人さんの汗のぞく
事なかれ主義が歯痒い河内弁
意気ごんで掛けたら留守でございます
事務所開きみんな味方と限らない
負けそうになって保護色考える

奈良市　宮口笛生

肩書の重さまだまだ惚けられぬ
古狸肩書だけで化けられぬ
シルバーシート何の意味ない満員車
キャッツフードもらって猫の肥満体
よく舌が回る女のドレミファソ

羽曳野市　榎本吐来

倖せらしい音沙汰のない新世帯
年金の布施奥さまに任せとく
酒の功徳どぼら雑言気にならず
還らない島の地震に縋られる
パントマイムは超一級の夫婦箸

松山市　白石春嶺

まだ出直しが利く人生のパスボール
北風に乗るチャルメラが路地を抜け
後ろにも目がある母の立ち回り
のど元で押えた意地が胃に溜まる
大器晩成　運命線を信じよう

米子市　林瑞枝

ちちに似る鏡の底に恩返し
舞い上がったらいかんと叫ぶ影法師
リンゴ追分ほろほろ響き寝つかれぬ
戸惑いのままに改札出て行った
風通しの欲しいひとりの金庫番

富山市　舟渡杏花

人間賛歌　情けに厚い握りめし
こだわりはよそう　焼のり裏表
帝王学のあい間あい間によむマンガ
休んだらもっとしんどい折り返し
矢印の嫌いな靴とたそがれる

八尾市　宮西弥生

何事もええ話にかえる秋
こだわりがつづく負けたなと思う
他人の輪の中でお返しまだ出来ず
視野の中ですこしばかりの手話をもつ
他人さまのお役に立てた今日の手話

奈良県　田中紀美代

階段のまん中あたりで好かれても
正論をのみこみ夫をなだめる日
下ごころあって挨拶うますぎる
責任感強くてビールにも強い
タイマーをかけて充実した昼寝

大阪市　津守柳伸

めぐり逢い嵯峨野に偲ぶ竹の春
ギッチラコ水郷めぐりへ脅し銃
諏訪太鼓三百人を黙らせる
分相応年相応のスケジュール
充電を待つひと言の思いやり

寝屋川市　稲葉冬葉

順順に咲いてくれます高砂や
処女作に触れてうつろになる手酌
麦めしを食す文化のひとかけら
点滴のカルピス色が気にかかる
足音は婦長と分かる月日かな

今治市　野村京子

こぼれ萩少し気疲れしたようだ
長風呂を孫がのぞきに来てくれる
言い訳がとても上手な酔芙蓉
嫁った娘の相談ごとは金がいり
仏飯を礼儀正しく食べている

名古屋市　越村枯梢

ああしんど　八十年は長かった
青二歳の殻脱け切らずして傘寿
耳の裏に蟬が鳴いてる　春夏秋冬
平静を装っている当りくじ
俺は俺お前はお前　寒の月

寝屋川市　柴田英壬子

プレッシャーに負けぬ漢方処方薬
雪の白さがすこし濁って来た憂い
焼きむすび反芻しつつ食む夜長
約束が反古になりそう紅葉燃え
楽天家の処世を嗤う時雨かな

今治市　越智一水

手についた土温かいものと知る
まだ知らぬ人と文通続いてる
ママさんコーラス太い手　細い手　日焼けの手
白いこころとなって大師が抱いてくれ
歳月は慈悲　そんな湯に浸る

弘前市　蒔苗果林

一人の日　人の好意に目が覚める
男女同権ますます妻が美しい
りんご食べた直後の顔のマリア様
紅くなるりんご小春が好き好き好き
落ちてても頬だけりんご紅を刷き

弘前市　佐治千加子

見事なる変身遂げて人去りぬ
ひいふうみい　はずんだ毬は亡母の手へ
ひとり旅　野菊　野の風　草だんご
金精さま偉大な物を持ち給う
水車小屋　昔　昔の水の音

弘前市　小寺花峯

外は雪　炬燵の前に酒がある
飲まない日続いた酒の二日酔
自社連立の変化で回る地動説
ライバルの影を踏んでる月明かり
悲しくも車で行った通夜の席

弘前市　村田善保

一握の砂に自問を繰り返す
鶏頭花　五百羅漢の貌に映え
楯にする何物も無く妥協する
向かい風受けて男が登る坂
年輪を刻むと愛も深くなる

弘前市　岡本花匠

フルムーン妻が舵取り無上楽
浅はかに髭をのばして縁起負け
柿食めばはは星われの非を諭す
発心の読経清し報恩講
何もかも中途半端で師走風

弘前市　中山雅城

人情を見抜いて育つツバメの巣
年輪を数えて行けば亀に会う
握手して手応えを読む選挙戦
きらきらと光って見える他所の星
釣堀の隣の竿が煩さ過ぎ

弘前市　一戸ツネ

遠花火　夏の名残りの寂を聞く
さんげさんげ諸行無常の虫が鳴く
振り出しに戻る迷路の鳥瞰図
虚心坦懐　弥陀に引かれる旅衣
楢山も趣味に生きれば桃源郷

五所川原市　斉藤劦

軽音楽たっぷり聴いたりんご嚙む
コスモスの万花が揺れて浮く妻よ
シャガールの白馬見てきて乗った夢
都市計画　出土してきた土偶たち
遠吠えの牛が見ている試食席

黒石市　相馬一花

旬の無いオカズに舌が馬鹿になる
レントゲン美女も野獣も骨だらけ
過労死の生き証人の棒グラフ
婆ちゃんに千円あげる給料日
喉越しの旨さ知らない酒審査

黒石市　千葉風樹

泣き終えてピエロにもどる幕が開く
妻の居る音さがしてる紙おむつ
荒海や骨箱揺すってみたくなる
どんぶらこどんぶらこ空缶になれなくて
波紋たどれば犬掻きの父に逢う

十和田市　阿部進

邪魔すればするほど燃える恋心
暑いので熱いの食べる祖母元気
さりげなく見せる仕草が女らし
無責任な亡霊さまよう永田町
手抜きした工事にでかいツケがくる

十和田市　小笠原敏人

無位無冠　敵がないから幸せそう
野暮用も義理のうちだと義理を欠き
入院でさまざま人生教えられ
看護婦の笑顔に一人相撲する
装具とれ思わず万歳してしまう

米子市　石垣花子

臍の緒が取れた頃から学資積む
ご先祖に負けないように積木積む
つるバラも垣根伝いに浮気する
女のようでも男はやはり男風呂
隣から三毛は帰ろうともしない

米子市　田中亜弥

暗示にかかるまいお腹に力入れ
マンションの隣は鬼の住いかも
つぶてを積んで神の指図を待つばかり
ドロ舟に乗せると急に弱くなる
図書館で神話の裏をたしかめる

米子市　野坂なみ

仁王さん　夜は胡坐をかくだろう
日の丸神話　私に生きて最敬礼
今は只売り地に茂るあわだち草
足裏の我慢はだれも気がつかぬ
ひびくもの残して幕を降ろしたい

米子市　菅井とも子

佗住い垣根をとって丸く老い
秋の櫛　亡母の白髪をなつかしむ
蓑虫も庭師さんにはかなわない
もう一つの顔で世間を渡っている
いよいよの時には印も押しましょう

米子市　寺沢みど里

帽子まぶかに顔への当りやわらげる
産衣縫う膝が日毎に丸くなる
ぐり石の我慢で屋根を支えてる
雨垂れの音をタクトに生きてきた
身の程をこころ得ている庭の樹々

米子市　澤田千春

嬉しい縄悲しい縄を今日もなう
簡単にかたづけられぬ一人の死
さっぱりと水にながせと人は言う
老人手帳もらって何と複雑だ
からたちの垣が終ると海に出る

米子市　金山夕子

夏からのビールで秋へチャッチャッチャッ
無理をしてよいしょをしたらくたびれた
人　人　人　幼く見てて人嫌い
目覚めたら隣の寝息たしかめる
友だちの畠に土を積んできた

米子市　中井ゆき

羅針盤少しこの頃トチリだす
懸命に生きたことなどもう言わぬ
句読点打って初秋を歩きだす
秋風に遠い絆がひびき合う
彼岸花　金木犀に母がいる

出雲市　尼れいじ

夢捨てた女が刻む腹時計
自分史を飾る写真がまだ撮れぬ
山一つ越すに邪魔する石がある
ライバルの言葉を糧にした誤算
ススキにはなりたくないと曼珠沙華

出雲市　板垣草丘

送る順　一番先の米届く
頷くと娘のように見える女
四眠起き蚕の如く菜を害す
引き際に雌に食われてゆく虫も
刺す糸が赤なら千人針ですね

出雲市　吉岡きみえ

天気晴朗　無口な夫よくしゃべる
二人三脚よくぞここまで辿りつき
陽が沈むやがて私も沈むだろ
美しい花を他人の手で折られ
負け犬になってストレス溜めている

出雲市　園山多賀子

詩人でも食事は二階から降りる
てのひらで握り潰せぬ罪一つ
六十年親切ごっこ黄昏る
少々は惚けたくらいが愛される
夫よりもひと日後れて逝くも愛

島根県　松本文子

ほろにがい思い落葉を踏みながら
山がそこにあるが登ったことはない
炎暑もう忘れて群れる赤トンボ
コスモスの所でみんな写真撮り
病母のこと知らず栗の実がこぼれ

出雲市　竹治　ちかし

散らかった机で僕が僕になる
まだ喧嘩するから夫婦かも知れぬ
休み明け律儀に始業ベルが鳴る
三分の祝辞　数日考える
みんな良い顔して松陰神社出る

出雲市　久谷　まこと

今日もまた朱に交じわる彼岸花
目測の距離で友情計られる
大切にしていた方が馬鹿を見る
道草も許しておくれ一人旅
いさかいの昨日も今日も塩辛い

出雲市　石倉　芙佐子

火と水の扇の橋にやどる乱
明日へと続くドラマを観ています
人まねこまね私も銀のネックレス
赤蜻蛉　終着駅の空に舞い
何時までも名残りを惜しむ花芒

出雲市　伊藤　寿美

暗夜行路まだ父の背が越えられず
チマチョゴリまだ流されぬ杭がある
アラジンのランプよジョーク出て来ない
父に似た子で火中の栗拾う
衣替え失せ物ひょっこり顔を出す

出雲市　島　祥庵

道草を知らぬ母さんの花柩
人の世の裏を覗いた日のめまい
十指みなそれなりの多情夏が逝く
触れないで下さい決心鈍りそう
日本晴　立派に糊が効いている

島根県　佐々木　鳳笙

訳もなく頬伝うもの大茜
萩の花零して眠る石の母
踏み込んで女のいくさ見てしまい
畳む傘今日の内緒を知っている
幻想を日の出が生んだ霧の海

出雲市　岸　桂子

受話器から噂話を聞かされる
あの時もだまって見ていた月見草
写経する心に計算などはない
彼岸花おまえもやがて土に還る
仲人の根気に負けて捨てた恋

出雲市　板垣　夢酔

自由言う嫁としきたり言う母と
うまいもの食べて貧乏しています
円高で諭吉も皺がふえはじめ
向こうにもやる気があってまた負ける
元水兵おぼれそうだがおぼれない

出雲市　小玉満江

目で食べて口で納得京料理
寡婦となり幾度めぐる衣替え
気くばりが少し足りない回転寿し
お墓には不義理重ねて秋彼岸
私もそうだったらと貰い泣き

出雲市　富田蘭水

嫁姑一つの壁をうまく使い
どの駅も思い出ばかり持っている
暗唱のハイネも風化させず老い
露天風呂どうかストレス流させて
まだ逢えそう風があと押す街の角

島根県　石飛水煙

軌道にはもどらぬ嘘が行きづまり
母親にだけは娘隠さない
浮き沈み人生にあるから面白い
幸せを母にかえそう甘えた日を
落葉かぶり孫戯れる秋日和

和歌山市　堀端三男

哀しみのわかる女と止り木へ
栄転を断わる事情だってある
客観的に見れば自分は怠け者
日替りランチ美味しい店を知っている
スポーツ着でひと日が暮れる秋日和

和歌山市　牛尾緑良

老人病棟　捨てられたのでない笑顔
老人病棟　かつて妻たり夫たり
老人病棟　不意に鳴りだす古時計
老人病棟　昨日が崩れだす時間
老人病棟　命の重さ軽さなど

和歌山市　福本英子

ユーモアの解らぬ夫と差し向い
本音しか言えぬ貴方とよく揉める
目のウロコと一緒に落ちたコンタクト
土なめる父にまだまだ追いつけぬ
猛暑戻り金魚のお腹裏返す

和歌山市　木本朱夏

散骨の視野いちめんの曼珠沙華
返り花　恋には遠きひとと居て
文学はやりたし明日の米が無い
ふりむいて鬼の欠伸を見てしまう
十二月ヒトもクルマも湧いてくる

和歌山市　桜井千秀

しょっちゅうのドジもネアカではぐらかし
サボってるひと案外に受けがいい
釣銭を数える癖が直らない
無断使用禁止わたしのギャグだから
軋んでる方へ油を注しにゆく

海南市　三宅保州

エジプトへ来た実感のピラミッド
物売りの子に構うなと言うガイド
英会話下手なあなたも日本人
海外旅行パントマイムを押し通す
エアメール帰国してから着きました

和歌山市　福井桂香

朧夜の君はいよいよ美しい
よく弾むこころの毬を投げかえし
スキャンダル斬るには甘いペンの芯
攻めるから閉じる他なし貝の蓋
デリカシー欠いた話題へお茶が冷え

和歌山市　細川稚代

ペアウォッチ事なく朝を告げてくれ
音信が絶えて久しいはぐれ雲
自己主張少し甘えていませんか
島一つ抱いて月光冴え渡る
ユーモアに長けた男の女癖

有田市　松井かなめ

夫病む朝は機嫌を聞いている
退化して行く夫の病見て居れず
世話ばかりやかせて夫婦の先が見え
見限られたか神の影すら見当らぬ
混浴に六十路女についてけず

和歌山市　玉井豊太

道草に一寸と思うアルコール
人妻と意識ができる確かです
賑やかに食べては行ける給与取り
妻以外せけんの美女に切りがない
交際の範囲せばめて差額でる

和歌山市　宮口克子

つくづくと諺生きている失意
自殺した男の美学抱いていた
御縁かも知れぬが虫の好かん人
聴く耳を持てと上司は喋らせぬ
建前と本音　野望も抱き宴

和歌山市　青枝鉄治

キナ臭い誘いの来ない無位無冠
重箱の隅をつついて平のまま
ロボットに辞令を貰う日も近い
この辺で妥協するのも生きる知恵
相槌を打つから調子づく男

和歌山市　山田高夫

傷口の縫い目我慢のように見せ
つき上げる吐気に母となる予感
定年後しばらく誤差のない時計
あやふやな思い切手を斜に貼る
老人の仲間入りする誕生日

和歌山市　田中輝子

びっくり箱を全開にして去った人
雲海をみた倖せの絶頂期
無為無策そんなわたしを嗤う雲
火力調節しながら越える幾山河
時にもろい絆を繋ぐ合言葉

和歌山県　小倉アサ

ばあちゃんと言われて赤が好きになる
窓開けてからの化粧は控え目に
専業の主婦の絵軽く言わないで
汗を拭く時があるのか厚化粧
今がある明日もあると言うワルツ

和歌山市　池永正雄

果物屋いつでも旬の顔をする
方言で飯場の朝が動き出す
そんなにいい薬があれば医者が飲む
元気です靴底の泥笑うてる
月見団子やはり兎は居てほしい

和歌山市　岩本美智子

病夫一口残飯整理ばかりです
鬱の薬のめば埋まるか胸の穴
保険満期もう入れない年になり
癌告知　頭の中で火が燃える
仏壇に供える水は澄んでいる

岸和田市　福浦勝晴

惚けた惚けたとほざいて生きている
天高く物価も高く安い株
歩かせるつもりのポチに引き摺られ
共通の方言飲み屋でウマが合い
ひとごとのようにショックと苦笑する

岸和田市　芳地狸村

美しい星に見えてる港の灯（さんふらあにて）
吊り橋の夜の飾りが虹になる
あのあたり松山沖か灯が浮ぶ
瀬戸内の夜景に酔っているデッキ
血の色が銭になりますお湯の店（血の池地獄）

岸和田市　島崎冨志子

祭り好き孫もやっぱり祭り好き
日記帳　今日の喜び書ききれず
猛暑にも体重計の変りなし
ゲートボール凝りだし帽子ばかり買う
自己嫌悪メモった紙を置き忘れ

岸和田市　原さよ子

あっさりと受けたが心重くなり
心配の重さ寝言になって出る
久しぶり友の語調も初老めき
まだ弾む心を老いの宝とす
流行もセンスも鈍い私です

岸和田市　古野ひで

喜寿過ぎてなすことすべてにぶくなり
たった一度の餌を野良猫忘れない
秋風にコスモス優しく話しかけ
タイミングよく出たお茶に気がほぐれ
風鈴とすだれは老いによく似合い

岸和田市　高須賀金太

生きざまを記すノートに朱を入れる
私をわたくしが見る揺れている
マンネリよ浅瀬を甘くみたようだ
満月や妻に勝とうと思わねど
明日からは君のいう通りにしよう

岸和田市　岩佐ダン吉

履歴書にファイトありと書いている
涙金で五%のめと言うてきた
弱いから負けたと後は重い口
大阪に四つ角があるタコ焼屋
標準語　大阪弁でいいのでは

岸和田市　田中文時

資源無い国の割にはゴミの量
雑炊をすすってた頃医者知らず
自販機の方が必ず礼を言う
演歌では大和撫子ばかりなり
方便と言ってもうそはうそである

岸和田市　寺田甚一

判決の出る頃事件忘れられ
良薬は口に苦いという漢方
押入れの肥やしバザーで生き返る
余談ですがとそれから話長くなる
平凡に過ぎて今年ももう師走

八尾市　宮崎シマ子

遠足の子が撫でてゆく彼岸花
もう少し言えばよかったでしょうか月よ
寺繁昌あやめの頃も紅葉にも
金木犀　野点の席に風少し
夕焼小焼　西の浄土に母が住む

八尾市　山下美津留

カラフルな擬似餌釣宿にぎやかな
ライバルが罪な名刺をひけらかす
内気だと思う埴輪と眼で話す
スーパーが混んでる台風くるらしい
陸橋で見る名月は揺れて見え

八尾市　吉村一風

治ったら飲ましてやるといい気なもん
シャボン玉の虹を追ってるいつまでも
釘さしたとこからやはり漏れたらし
またお世辞ひとつ見舞で置いてくる
喫煙者に明日はないとおどかされ

大阪府　籾山　隆

禁断の実には触手がよくうごく
バッカスの神にお叱り頂きぬ
屯田の土の開拓にも銃が
枯山水の石は心の字に読める
自衛隊　内弁慶のままがよい

八尾市　片上英一

このところマッチを貰ろたことがない
好きだからしばらく逢わぬことにする
爪の色変えて南国ひとり旅
入門書ばかり積んどくクセがある
名はいらぬやっぱり金はいるけれど

大和高田市　岸本豊平次

米櫃とダムの底見た去年今年
田植から水不足のまま稲稔り
猛暑すぎ町の電器屋旅に出た
神様の手抜き整形外科へ行き
野仏を赤く包んだ彼岸花

西宮市　門谷たず子

短い秋をせめてせめてと汽車に乗る
痩せてきたカレンダーにもある愁い
夫婦で泳ぐこの一ときをたいせつに
何れ地に還るいのちと向き合うて
山一つ越えて夫婦の貌になる

姫路市　人見翠記

夜来の雷雨　今朝の青い青い空
風鈴片付けて秋を待つこころ
茜色明日の日和に鎌を研ぐ
日本列島　臍のとこにも水たまり
皇后様　今年のお誕生日はお健やか

箕面市　坪田紅葉

旅に出るくすり袋を第一に
診察三分くすりもらって三時間（病院）
やっと涼風ほっとしたら風邪を引き
敬老日　今日だけ上手に乗せられて
クラス会　食後はそれぞれくすり出し

大阪市　大塚節子

ここまでよ手が添えられて水薬
医薬分業まだ程遠い薬待ち
薬やがなちょっと注いでと亡父の酒
東奔西走　年齢考えてしなはれや
祖母真似て炬燵の火入れ亥の子さん

高石市　浅野房子

たまさかの逢う瀬を濡らす酸性雨
燃えるだけもえて枯れます曼珠沙華
台風一過　松ぼっくりと残される
イメージで人にレッテル貼る勿れ
圧力をかけられるほど大物でない

寝屋川市　岸野あやめ

一行の詩　魂の拠る処
洋品屋　店主も客もお婆さん
立てどしゃがめど同じ体重
中流の意識へ師走巡り来る
十二月せめて掃除に精を出し

宝塚市　丸山よし津

遠雷と雨の私語聞く午前二時
海を埋め地球整形されて行く
何時の間にかぼくの女神が鬼になる
いくつ読めるすし屋の湯呑み魚偏
最期まで軽い喜劇を演じ切る

唐津市　田口虹汀

病気じゃないが無性に柿が食べたくて
鯛汁も三日続くと賞でぬなり
障子洗う妻の背中に覗く秋
寅さんに会えず戻った題経寺
颯爽と彼は大白牛車に乗り（悼同人義美氏の死）

唐津市　仁部四郎

大声で忘れましたと言うも芸
政治屋の書いた本なら買わぬ主義
寺の道教えた方が手を合わせ
仏壇の小銭盗んだ胸の傷
大晦日揃えてみてる貯金帳

唐津市　山口高明

放課後の話題は煙管したはなし
昇進の早さへ髷が従いてけず
家の嫁だけど野良には出ないひと
放火魔も百円ライター使い捨て
反論の文句　鏡に聞かせてる

唐津市　筒井朴竜

一丁乃決断自衛機関銃
二度童再三食事御催促
三猿乃土鈴庚申様土産
六地蔵百万遍似耳於貸
七福寺巡里七難厄払為

唐津市　浜本ちよ

付き添いの方が過労で点滴し
握り拳　握りつぶして平は堪え
水面に小波を立てて出方見る
外反母趾てん足めきて細く履き
一人寝に抜け穴掘ろうかなと思う

竹原市　時広一路

石段を数える足のまだ確か
気は心　笑顔がふっと湧いてくる
誰がどう言おうと煙草　日に五本
中性脂肪元気な僕に薬とは
ようしよし娘の婿は飲める口

呉市　槇田英詩

自我滅す激しい雨に濡れながら
仏さまのお呼び焦らず待つつもり
頷いてばかり難聴仏さま
イヤリングの片方がない目を皿に
倦怠期その笑顔さえ癪のたね

広島県　藤解静風

たそがれた胸でも波紋ぐらい描く
この期に及んで愛してるなど言えるかい
半生はシンバル叩く猿だった
葉も枝も切って満場一致にし
こころまで涸らすなと着くボトル水

竹原市　岡本清水

知る事も知らぬも是非のこの世なり
夏去れば冬より夏がよいと言う
野生動物稔りへ大挙攻めて来る
炎天下自然に叛き山の火事
要る金の出る所なき秋の宵

竹原市　岩本笑子

稲の穂の喜怒哀楽の雨の音
コスモスの哀しからずや風の中
ああ朝だ付き添いベッドの一人言
闇が溶けてゆく　そう病院の朝さえも
外は秋　帰る所があるカラス

竹原市　石原淑子

秋風にまかすコスモス処世かな
日捲りに追いかけられる四十路坂
記念日に誓う心の余裕なり
あなたにも有ったおんなじ泣き黒子
疲れ気味　菊々きくの菊花展

岡山市　川端柳子

こよみ剝ぐ秋の見立てた彩を着て
お久しぶり老いたでしょうと問いまわり
アイラブユー父娘であれば美しい
次々と心配ごとのお客さま
淋しくて今日もムシャムシャ食べてます

岡山市　井上柳五郎

敏捷な秋蚊　残暑のまだ消えず
おにぎりの一粒頬にコマーシャル
身に覚えあることだから口出さず
流されぬ過去の疵ありまた疼き
お裾分けときにはいらぬ物もくれ

岡山県　荻野鮫虎狼

地下足袋が妻の好意を見失い
又一つ団地に幸の灯がともり
十三仏誰かが俺の顔に似る
破産した会社にほしい土竜みち
静寂も楽しき想い秋の酒

岡山県　矢内　寿恵子

天地有情　祭日和は神のもの
献体の話になって皆無口
寺の街　まんじに少し気を許す
平和とは佗しモラルが消えていく
苦労ばかりかけてくれるのも愛だろう

倉敷市　田辺　灸六

金婚の旅は無理せぬように組み
遠方の友に逢いたし老いの旅
きっと来る倖せ信じたい老後
世話好きの夫の袖を妻が引き
言い勝ったあとの負担が背に重い

岡山県　山本　玉恵

ひとひらの呪文となって蝶は舞う
でこぼこの道のりばかり嫁姑
ふところに愛のページをたたみ込む
母と妻と女を果たす二十五時
さんげまだ終らず雨も降りやまず

岡山市　花田　たけ志

スタミナの過信で険し老いの坂
柄にない齢で舞台に立つ励み
良い方に勘が当ってすまし顔
負ける気へ追い風ばかり吹いて来る
安全へ方向指示は妻がする

岡山県　池田　半仙

ビール缶　大中小と選れる量
受け売りが賢いような振りをする
握り箸その食欲が頼母しい
尺八の名手の父の跡継げず
秋晴れに真一文字のジェット雲

倉敷市　井上　富子

オゾン層の穴かも知れぬ手を翳す
いじめと言うさそりが咬んだランドセル
新しい工夫を咲かす詩の道
皇室のニュースが好きな楽隠居
説教が延びてうどんが伸びている

鳥取県　松下　たつみ

蝶々の機嫌しばらく花の中にいる
手のとどくとこに柿あり無人寺
虫の声とぼしい詩情かきたてる
ぎざぎざの心　他山の石拾う
トンボ一匹街の俗化を消すごとく

鳥取県　林　露杖

大旱耐えた今年の甘い梨
人を恋い人を避けるも老いのエゴ
老いぬれば喜怒哀楽も薄味に
無為無策　三度の飯は欠かさない
早飯は兵の日からの癖でして

鳥取県　土橋　はるお

宝くじ買ったぐらいで騒ぐなよ
座布団も乗り出し話聞いている
半額の眼鏡で本を読んでいる
午後の部に飲み放題があるそうな
繕った見舞い言葉だなと思う

鳥取県　江原　とみお

鮮やかに咲きたかろうに吾亦紅
脛の疵　守勢になると貌をだす
破り捨てたページのなかにいたおんな
間違いを承知でわたる橋がある
借りてきた傘の雫がもつれだす

鳥取県　羽津川　公乃

耐えること忘れた骨がもろくなる
心経は覚束ないが真面目です
始発駅うさぎも亀も乗っている
家出した犬に自由と飢えが待つ
箸箱の鞭で治した握り箸

鳥取市　小谷　美ッ千

一念の極まりて散る薔薇なりや
ほうようや木陰　花陰　闇の中
コスモス満開　昨日抱かれしことのほか
ほろほろとこぼして萩の通い婚
何事もなかったようにくちづけを

鳥取市　西原　艶子

泣きべそは見せぬ男の皺の数
頬杖をついても刻がたつばかり
嫁入りのときのタンスと共に老い
鏡台が狭いと思う化粧びん
ボタンひとつ欠けて存在価値を知る

鳥取県　さえき　やえ

お父さん子どもに背中みせなさい
台風よ稲架の強さがわかったかい
貧乏を「へ」とも思わぬ妻といる
金山寺つくる講師にひき出され
年金でくらす命へ灯をともす

鳥取県　乾　隆風

上野駅に田舎訛りを撒いてやろう
アダムとイブの現代版が売ってある
婆さんの口に従う婿養子
やせがまんせずにたなぼた頂くか
懇々とさとすは亡父の喉ぼとけ

鳥取県　上田　俊路

太陽を心に抱いて子が巣立つ
アリバイの土産が重いひとり旅
線香花火ほどにはかない物語
それぞれにおとこおんなが抱く花火
ダイレクトメール女に秋着せる

鳥取県　谷口次男

私も宇宙に生きる一個体
偏屈は入院中も嫌われる
石頭　赤ちょうちんで軟化する
寄生虫　事故のたけしをヨイショする
チョーさんを提灯記事がホメ殺す

鳥取市　美田旋風

踏んばった足跡自分史に残す
稲妻が涼しくさせた夏の居間
欲ばった幸せ手からみな落ちる
遅咲きの花へ眠れぬ日が続く
聞き役にされてしょんぼりして帰る

鳥取市　武田帆雀

学歴の仕業か世間知らな過ぎ
インスタントの粥戴いて医者通い
悪知恵に乗らぬ育ちが美しい
スポーツに政治はいらぬ大会旗
松茸は失せて値段は生きている

鳥取県　西川和子

ご自慢の鉢を並べる軒がある
繕い物姑にまかせて定期券
父母の軒は広くて温かい
倒れてもコスモス天を向いて咲き
とぼとぼと老化に困る事ばかり

鳥取県　石尾かつ乃

名月に古里恋し萩すすき
喜怒哀楽　人生行路　雪月花
晴耕雨読　夫と二人のにぎりめし
自信作　子です孫です夢を追う
幸せを追うからドラマ味も出る

鳥取県　田村きみ子

健康はありがたいなと夫婦ばなし
旬のもの食べて血管笑いだす
ありがとう素直に言える嫁姑
娘との電話たっぷり一時間
葉牡丹もきれいだ妻もきれいだよ

鳥取県　石谷美恵子

澄んだ空どこにも嘘が隠せない
上達へ遠く筆の穂が痩せる
もう一度食べたい釜底の握り飯
ガラクタに埋まり明治の母と居る
表面を繕いながら積木つむ

鳥取県　黒田くに子

喪のぜんに豆がつや良く盛ってある
ちぎり絵の指はわたしの無の心
はげまされ涙もろさをかくせない
ユーモアを少しはさんだ語がぬくい
夕焼けのブランコ　ママが帰らない

姫路市　大原葉香

うそ許り落ちてる白い浜の砂
都市に住み段々人は汚染され
指に唾　物かげでお札読む女
七難を見事かくして嫁ぎゆく
灯台がともれば海もほっとする

広島県　田村新造

帰りなんいざ興安嶺の峰越える（興安嶺逃亡記）
戦友捨てる山は夕焼けまだ暮れぬ
戦友捨てて興安嶺になみだ雨
小休止したら朝まで寝た不覚
数珠つなぎはぐれた戦友の射殺体

大阪市　河井庸佑

根回しへ上司の知恵を利用する
不平しか言えぬ男の不幸せ
曖昧な返事相手を困らせる
ていねいな言葉遣いできつい指示
知っている積り案外知っていず

大阪市　本間満津子

目覚め爽やか手足勝手に動き出す
道草をしてはおられぬ秋の道
潔く兜を脱いだ眉すずし
どこまでゆくか怖い科学と人の欲
きっぱりと厳しい顔で断ろう

大阪市　神夏磯典子

暗中模索わたしを救う詩がある
栗ごはんすべて忘れることにする
まだ出来るそんな暗示がほしい今
真っ白い頭に仏の声がする
欲捨てて迷いがとれたちぎれ雲

大阪市　北勝美

怒らせた事に気付かぬ楽天家
投げ出してそれから道は開かれる
マニアにはサボテンの棘美しい
熱湯を浴びたトマトの皮素直
追い詰めて相手の顔を見る余裕

大阪市　小林トメ子

台風もテレビうるさく方位かえ
台風に負けじと地震武者ぶるい
家風でも変えられますと社会党
老いの身に使用説明うとましい
言訳に薬持参で妻も連れ

大阪市　上田柳影

幸せな夢か時時笑う孫
妻の留守朝寝朝酒して空し
過労死が恐くて保険またかける
季節外れの暑さに負ける老いの皺
言い勝って出たが重たい朝の靴

大阪市　藤田頂留子

十二月ケーキ食べたら餅をこね
歳末をもりあげている抽籤機
韓国のあかすり政治家にどうぞ
開けたなら母の声する桐箪笥
読書の秋に喝采ノーベル賞

大阪市　桝本蕗児

彼岸花　路郎先生散歩中
恋一つ氷点貯蔵したまんま
自叙伝はいい子いい子のしすぎです
煮っころがし確かに妻の顔がある
時々は逆立ちをして血を回す

大阪市　寺井東雲

海外へうれしさ浮かべ予定組む
アルバムのその一枚に傷多い
占いは何時までやっても切りがない
バカと言う言葉覚えてこぶし上げ
放送局一人おるので眠れない

大阪市　井上白峰

のんびりと行こう人生長丁場
反骨の昔をしのぶ固い椅子
輪の中で温められた多数決
売り言葉はずみで買って風を呼ぶ
口止めの酒がペラペラ喋りだす

大阪市　板東倫子

人間が好きで泣いたり笑ったり
ソツのない女で後妻と言う噂
見え透いた殺し文句で親欺す
血の色でまんじゅしゃげ咲く無縁墓
たわいない話で修羅場切り抜ける

大阪市　稲本凡子

掌中の珠を落としてから無口（孫二十二歳で死亡）
忘れたい記憶悲しいまで鮮明に
泣きに来た海に夕陽の奇麗すぎ
結局は捨てる冷凍庫の食べ余り
やすらぎの森に鳥の声が消え

東大阪市　崎山美子

情にふれ心に小さい花が咲く
志半ばで資金の底がつき
方言で話せば心あたたまる
旧家の門ビルの谷間で自己主張
お弁当　妻のエールがこぼれそう

東大阪市　安永暁子

万葉の古都　連なりて秋の風
秋桜の飛鳥路　百舌鳥けたたまし
酔芙蓉なごりの白さ二面石
秋空にウクレレにのせ万葉歌
いも掘りの重いリュックに重い足

香川県　木村　あきら

ダブルベッド枕一つで黄昏る
睡蓮の鉢にも月が浮いている
歳老いて枕カバーを派手にする
浜風に逢うと勇気が湧いてくる
星の夜はお伽噺がよく似合う

香川県　工藤　吟笑

金比羅の歌舞伎サヌキ路盛り上がる
濁り水飲んでもやはり故郷はよい
酔い一寸回った所で本音出す
子育てが終って軽く紅を引く
鐘の音に浮かれて踊る夫婦獅子

香川県　成重　放任

何気なく使った水の恩を知り
奔走の苦労も一夜で水の泡
熟す柿待っている間にさらわれた
三人の旅人一人離れ駒
待ち人が来たらず夢が正夢に

香川県　川崎　ひかり

チチロ鳴くお前もひとりで淋しいか
星くずの街で拾った国なまり
ライバルに渡してしまった柿の種
元の絵に戻らぬ恋の万華鏡
背のびしてみても所詮はかすみ草

香川県　池内　かおり

外でゴミ家では鍋が焦げている
名水と書いたボトルに羽がはえ
胸痛むシーンは見せぬ老ホーム
ゴールインするまできっとゆれるだろ
真剣に怒ってくれる人が居る

香川県　新川　マサヱ

敬老会化けて踊りの輪に入る
水油つけて母さん身だしなみ
今日生きる蛇口をひねる命綱
鼻薬きかせて顎が上を向く
脇道にそれて野菊と逢うて来る

生駒市　北山　悟郎

嗚呼九月俺一人残し全滅す
般若寺コスモス秋を賛歌する
銀杏並木ネオンを浴びる街の彩
戦傷と癌　生死の境二度彷徨
猿山で人間百態演じてる

美禰市　安平次　弘道

潮どきを忘れて傷が深くなる
泣きぼくろ問わず語りが長くなる
日日好日錆びぬ程度に本も読み
是是非非の非非に世間の風当たり
小金持って嫁に渡さぬサーブ権

砂川市　大橋政良

酒を飲むたった独りの長い夜
ほんとうの孤独ラッシュの中にいる
手のひらを見せてやさしい風になる
四角でも丸でも達者ならばいい
自由がほしいベンチで聞いた雲のうた

仙台市　川村映輝

健康は猛暑の夏をエンジョイす
老い二人金魚も植木も家族にし
新米に古米をブレンドして出荷
脳細胞減るバロメーターは物忘れ
老人に有難きかな敬老パス

富田林市　片岡智恵子

均等法　女のマナー迷い出す
「私はダメ」宣言をして楽になり
鮮明な記憶　炎の彩愛のいろ
魔性だナ美しく老う花結び
人許す小さな嘘を口ごもり

富田林市　池森子

点線を渡る秘密は漏らさずに
同意語を探して秋をうろうろと
選び抜かれて花野になった秋桜
水洗で流されて行くほどの過去
端数から見ればエリートはピエロ

高知県　赤川菊野

人並と言う一線をどこへ引く
一人にも慣れて夕日が美しい
夫婦茶碗残った方もひびが入り
も一人の私はとても甘えん坊
湯布院の霧の中より湧くロマン

高知市　小澤幸泉

酒の嵐止んで静けさ取り戻す
沈黙の青春なおつづく秋の部屋
結局は何処に着くや神の道
生かされる日々に不満が残り過ぎ
ふりむけば足跡消えて五十坂

高知市　北川竹萌

置き書きに慌て構える一人膳
自家菜園早蒔き大根褒められる
里言葉　秋の祭り日和みあう
紅葉狩り誘いの手紙読み返す
秋野菜そろい間引きの楽しい日

北九州市　梅田宣司

一服の味は知ってるけど吸わぬ
久々の出会いに少しはしゃぎ過ぎ
拡大鏡に映る老いから目をそらす
百万都市が俺を置いてきぼりにする
夾竹桃　鷗外も見し旧居跡

奈良県　長谷川　春蘭

捕虫網一本夏の子に終る
蜩にせかれて余生過ぎ行くか
日の暮れのやや早くなり秋祭
咲き疲れたか朝顔の小ささよ
忘れ得ぬこと多かりし遠花火

富士宮市　渥美　弧秀

落ち切って長電話待つ砂時計
富士が庭の夫婦を友に羨まれ
今日も無事　茜の富士へ合掌す
日めくりも痩せて夫婦の十二月
もえさしの心が和む詩とピアノ

羽曳野市　田中　透太

神様の見えるところで掌を合わす
泥かぶることを覚えた知恵袋
たっぷりと土の匂のする踵
男には男の話　酒が要る
後日譚ばかりしているあかんたれ

宇部市　平田　実男

またしても一生一度の願いごと
目的がないのも急ぐ十二月
女賢しゅうて離婚の数が増え
共白髪　別れ話もありました
金メダルの日の丸　右派も左派もない

吹田市　山本　希久子

怠けごころに秋の日は昏れやすし
てのひらの愛をたっぷり握り飯
会話弾んでタイムスリップする私
聞き上手　話し上手がいる円座
とっておきの話　車中を眠らせず

尼崎市　田中　薫

寓話転げてどこまで続く曼珠沙華
ひと恋いの耳に九月が降りてくる
いわし雲いくつ見送るストライク
芋粥の一途に母の熱さなる
歯の弱い鬼だ　まわりに本積んで

羽曳野市　吉川　寿美

人許すなんと勇気のいることよ
誠心が肋に響かぬスリガラス
愛と憎抱いて女の相剋や
つまずいた石に世間を教えられ
世の裏を覗いた眼鏡の失語症

静岡県　薗田　獏沓

入道雲　今日は静かに里の秋
内緒話しようポケットベルが鳴る
散歩道　鳥も女もよう喋る
坊さんが一人紅葉の奥に消ゆ
激安で安い要らない物を買う

富山市　酒井　輝

警察で空巣の手口聴かされる
補聴器の修理休暇の貌で居る
筆無精一筆箋に救われる
限りなく揺れる日本の地震計
年寄りを避けて分けてる街のビラ

西条市　片上明水

貰い水大きなバケツばかり提げ
足腰に障りながらも菊づくり
土性骨　農具磨いたような艶
また聞きへまんまと枝と葉をつける
おみやげを二重に包むお人柄

町田市　竹内紫錆

音声を変える装置で唄いたい
冗談を言うひまもなくバーコード
血圧と薄着の元気認められ
水質を告げるむかしの唱歌かな
杖の要る身ですお悔み書き慣れる

神戸市　山口美穂

釣瓶落し今年も少しというあせり
還暦を素直にすなおに喜ぼう
患者さんにいたわられてる風邪の声
屁理屈の老母の主張に負けている
独りごと言うて返事を待っている

倉吉市　野中御前

酔ってますだから結果は本音です
ふたありでおもろい研究しています
友達がつぎつぎ渡る向う岸
長寿飴ぽっくり寺の前で売れ
無言電話　心当たりはないけれど

西宮市　西口いわる

一息に飲んで何かを言わんとす
人目には水と油というふたり
幸運よ汝は羽根をもっている
宴果ててほっとしている壺の花
モナリザに山高帽子などいかが

七尾市　松高秀峰

見せかけの笑顔段々曇って来
透析で肝炎恐いニュース見る
人脈も金脈もなく汗を積む
駅前で笑顔で付ける赤い羽根
娘のために頭を下げた鬼の父

静岡市　安本晃授

年金の暮らしをかばう秋野菜
古里の紅葉は母を眠らせる
ポケットにまだ持っている軍歴書
老いてなお寝物語の夫婦愛
回顧録の中にまだある好奇心

姫路市　丁坪サワ子

千人千彩　老いのドラマの泣き笑い
駒一頭狂って崩れる家の中
心まで貧しくなるな負けた日も
食傷をするまで松茸食べた夢
終着は片道切符無人駅

奈良市　米田恭昌

待つだけの母の人生黄昏る
駆けっこの僕より速いママが好き
母が逝き駆け込み寺を見失う
六月に生れて純と言う名の子
光栄と言うプレッシャーにつぶされる

豊中市　吉田あずき

一呼吸おけば自分が見えてくる
迷いの中に翻弄されていたい夢
落日へ逢えば淋しさなおつのる
手袋を脱げばこんなに風がある
手ざわりに心がなごむ歳となる

豊中市　辻川慶子

太陽も肌もやさしくなって秋
道草の遊びごころを大切に
うっかりも度重なると気にかかり
湯どうふが恋しくなってくる嵯峨野
補聴器の調子よい時悪い時

豊中市　江口明光

親よりも大きい足で気が弱い
半世紀未だ戦後が終らない
道徳と言う一線の立ちくらみ
段落の無い説教はあきられる
芸のない僕に回ってきたチャンス

豊中市　井上直次

賞罰のない人生も恥多し
人生の節目節目の古名刺
人生の午後のネクタイ少し赤
人生の残りは妻の言うがまま
茶柱が今日のドラマの幕上げる

豊中市　三宅つえ子

思うこと少しも言えず髪洗う
学校がまた一つ消え冬の風
錯覚を追う美しい顔がある
死人花咲いて対話のない夕餉
野次馬のうしろから見る車椅子

堺市　黒田真砂

六歳は六歳なりの知恵袋
つまずいた石に腹立て秋桜
金婚まで後六年の岩清水
空缶にビー玉満たし子の宝
さわやかな秋の陽をあび芙蓉咲く

堺市　中野欅子

言わずとも残り火いとし旅仲間
献上の名につられて買った旅土産
エンジェルフィッシュ水槽だけの晴舞台
落葉とてラストを飾る紅の彩
あの頑固　長所短所の貌を持つ

河内長野市　井上喜酔

貧乏くじ引いて我慢の喉仏
重い尻ばかりで足を引っぱられ
日記帳ちょっと淋しい妻の留守
予定など持たず自由な朝が好き
てれくさい第二の職場妻も居る

河内長野市　植村喜代

山もまたがんばっている今日の照り
秋の風　秋の心にして誘う
秋の夜をガチャガチャ横に邪魔が入り
どの面も旅行案内のる平和
名月や月逃げだした水溜り

川西市　氏林洋敏

人妻を好きになるのはいつも秋
人見知りしてます猫も私も
印鑑を押せば相手が強くでる
温泉へ行くと決まって元気でる
みやげ物買うと裏道教えられ

和泉市　西岡洛酔

水割りの向うで冷めた恋もある
まる印　謎秘めたまま暦繰る
道草が好き各停に乗ると決め
忍び寄る秋へ主婦業いそがしい
ロマンスグレー少し善人ぶって見る

藤井寺市　中島志洋

長電話無口な父の咳ばらい
紫の似合う家元京ことば
ボーナスの季節年金寒い暮れ
年賀状書いた後から喪の葉書
中座見てついたこ梅に足が向き

堺市　柿花紀美女

赤いバラ部屋いっぱいに妻の乱
雨の日のシャープペンシル落ち着かず
人間に生まれ辛さと楽しさと
亡母法事　兄も妹も年を食い
春夏秋冬きっちり節をつけて老い

宝塚市　吉田笑女

留守番の孫がよろこぶだまし舟
びしょぬれで無心に遊ぶ水たまり
まん中に生れて何時も損な役
恵みの雨　花も生気をとり戻す
手紙なら書ける言葉に行きづまり

芦屋市　黒田能子

本当の齢より若く見てくれる
水琴窟澄んだ空気と聞いている
薬よりましと嫌いなものを食べ
秋風に傷の痛みを分かち合う
終章は二人の虹で飾りたい

寝屋川市　平松かすみ

台風接近　夫婦で囲むお蠟燭（一畑薬師）
おみくじを結び絵になる場所に立ち
原画には父と子がいる影法師
追憶に亡父の上手な吊し柿
マイカーへ感謝二泊三日の出雲

西宮市　秋元てる

ペット並み大事にされて生きている
国産に拘泥る老いがいて困る
玄関の打ち水心祝いなり
それとなくボケの話を嫁にする
行き帰り手ぶらの旅で落ち着かぬ

羽咋市　三宅ろ亭

早起きの二時間思索の城に住む
久闊を叙してか余白のない便り
強引が過ぎて引く手を忘れた日
コスモスの乱舞へほほ笑みをもらす
片袖を濡らして定刻を守る

守口市　森川まさお

無常迅速　深夜も自動車列をなす
曼珠沙華さびしいことは口にせず
花つけぬ朝顔　屋根へよじのぼる
達観をしてるやもりは動かない
赤い帽子　外人墓地で立ちつくす

守口市　結城君子

木津川に人なし葛の思うまま
フルコース大阪城を見下ろして
国道の萩　塵埃の中で咲き
夕せまるいよいよ白き蕎麦の花
いっせいに粟ぜんざいに決まるなり

福岡県　横地正好

飾られるよりは馬には人蔘賞
大国が兵器で儲けて平和主義
口達者横から妻は城守る
直感の妻はポケットから荒れる
妻も老い注ぐコップの湯がこぼれ

寝屋川市　堀江光子

情けなど持たぬ手紙が長くなる
今日からは名前を持った犬となり
飼犬の通勤めいた散歩道
やっと出た答が迷うもとになり
褒賞は支えてくれた妻のもの

茨木市　藤井正雄

経験をした相槌は強く打つ
のり茶漬けさらさらさらと音の味
妻の風邪長女が急に大人ぶる
誘われる旅に年金背伸びする
すぐばれる嘘つく夫だから好き

枚方市　海老池洋

きっちりと飲んで薬のなお余り
厳然と人生　おしめよりおしめ
早ばやと準備にかかる祭り好き
道楽が仕事にかわり叙勲もの
一番機　結婚式もやって着き

伊丹市　山崎君子

ざくろの実わたしも同じ待つ身です
両刀使いの仏に酒と彼岸餅
イヤリング昔の人のささやきが
寝莫産にも礼を言います衣替え
嫁自慢　友もだんだん丸くなる

東京都　山口新子

へぼきゅうりそれでもきゅうり私の子
温湿布の形のままに夜が明ける
立秋や保湿クリーム塗りまくる
沈丁花香る屋敷の外に立つ
決算へ繰り越す愛を明記する

西宮市　亀岡哲子

シャネルの香仄に迷い来た小犬
水くぐりくぐり優しい秋の足袋
ボランティアの腕章つけてゴミ拾う
空中ブランコ中継点にいる男
フラスコの煙　博士の不老薬

西宮市　菊池トミエ

忘れ物駅で気が付く時間切れ
伝書鳩　律義に帰り目を丸め
布引の水は外貨を良くかせぐ
捨てきれぬものにふる里彼岸花
ナツメロで匿した年がバレました

箕面市　岩津ようじ

雨もよし酒よし女よし演歌
つまらなさ非の打ちどころない男
見えすいたお世辞に乗った若づくり
断水も洪水もあり西東
ビール待つ喉を待たせるご挨拶

岡山県　二宗吟平

置き手紙置いて出たのをつい忘れ
人間が人間である尾骶骨
花さげて花嫁さんが墓参り
うっかりがっかり仏を鬼にした
留守居役ほっと一息ごろ寝ぐせ

貝塚市　行天千代

入退院繰返しつつ日が過ぎる
弱ってる身体を検査ばかりする
病院食どうも私は食べられぬ
もう九月やっと帰れた敬老日

岡山県　岩道博友

嫌われる場所で見て来た運動会
ダイエットする気でないが鍬を振る
口元に返事の刺が見え隠れ
言い過ぎた一言　妻と娘が倍返す

岡山県　江口有一朗

六文銭の命度胸の腰据える
お互いの傷には触れぬお付き合い
老いの足ちとぎこちない回れ右
自分一人で生きてみたいと子の自立

米子市　光井玲子

雑魚なりに胡坐をかいている平和
石頭の亡父の教えが生きつづけ
通いなれた道にもあった落し穴
木の温み抱いて老化のマイホーム

米子市　白根ふみ

さるすべり蝶の胡坐を拒まない
回想の行きつく先に亡母のひざ
胡坐かく　女も視野が広くなる
だまし舟納得してる幼稚園

米子市　茂理高代

家計簿をつけると糖が高くなる
誘われて秋の尾花と響き合う
下積みのある木はきっと根を降ろす
聞えますか私が鳴らす鐘の音が

米子市　木村富美子

大根を切る包丁を磨いでいる
野に捨てた小説　風が噂する
とっときの顔を時々見せて置く
仲直りしようみそ汁冷えぬまに

大阪市　渡部さと美

菊仕立て命着ている菊人形
空の芸術　今日の雲明日の雲
稜線のむこうにあこがれ冬を越す
良い御縁　他人にはあった年も暮れ

大阪市　松尾柳右子

早朝の活気は港に大漁船
港から町へ活気が流れ出し
折さげて罪ほろぼしの父帰り
ウェディングベルに憧れまだ嫁けず

東大阪市　指宿千枝子

秋空に恥じないように鏡拭く
手鏡が姿見よりも好きな老母
ライバルがサイドミラーに映ってる
土産もの褒美のように配る母

大阪市　清水利武

急病へ忍耐我慢夜が過ぎ
冷水を飲んだお返し秋に来る
十五夜が二人の歩くほうへくる
水道の制限とれて山に雪

大阪市　清水絹子

愚痴きいていてもナースの注射針
波がしら詮ないことの愚痴愚問
お早うが大きく返り仲直り
失礼にならぬ目線の瓶ビール

大阪府　八十田洞庵

台風に還らぬ島を望むうつ（台風二十四号知床）
雑兵は一飯だけで命捨て
姪と会う後ろ姿はもうおんな
もう消せぬ炎二人にある覚悟

大阪市　川端一歩

文化の日憲法くずしに泣いている
政局に愛想つかして去ぬつばめ
四面句碑読みこなせずに清水坂
新名人　道はなかばと歳に似ず

堺市　一瀬福一

よい妻になるはずだった娘の離婚
妻の愚痴聞き流すのも飼育法
前例がないので困るのが役所
パチンコのそれ玉に似た恋終る

鳥取県　津村八重子

宝物のように松茸店に座す
金木犀咲いてたしかな秋を知る
平和な世見せたい散ったあの義兄に
洗い髪まとめ鏡と対話する

鳥取県　乾喜与志

闇市へ掘り出し物を持って出る
自分史に花のページは散りにけり
曽孫との将棋勝とうか負けようか
遺影の妻は丸髷を結ったまま

鳥取市　春木圭一郎

半額になった社党に魅力なし
半額にしてもしっかり元は取る
虫の音も澄んで読書に夜が更ける
宴席に調子外れがいて和む

鳥取市　岩原喬水

半額になるまで待って売れていた
良妻も時々恐い鬼になる
火消壺寝言で恋をまだしてる
熟れ過ぎの皺を鏡は嘘言わぬ

鳥取県　西浦小鹿

哀しみが暦のなかに溶けてゆく
船底の汗をみんなに見せてやる
サイコロをころがしている十二月
どうしても解けない問いを持ち続け

鳥取市　西村默光

文句言う相手がおって張りがある
台風が逃げたと銚子足してくれ
喜怒哀楽とても素直な日本海
雲低く砂丘も素顔取り戻す

鳥取県　太田幸枝

日の丸が軒で律義な顔を出す
繕うた絆の糸がもつれ出す
南向きの部屋に暖房完備する
ふる里の山が団地に化けている

鳥取県　鈴木公弘

天高し大ぼら吹いてみたくなる
お隣と仲良くしたい松手入れ
薄もみじ街へ出てゆく子がひとり
振り向いて影確かめる秋の坂

鳥取県　土橋睦子

沈黙を守る男が光りだす
外米をおいしく食べる講習会
観光の絣が似合う縄のれん
以心伝心　重なりあって四十年

鳥取県　幸家単車

駅弁を旅の土産に持ち帰る
妻の愚痴チクリ私を刺激する
草を焼く煙　国道じゃまをする
騒ぐ事ないぞ勝負は決まってる

鳥取市　前田一枝

立話まっさかりなり道それる
不況風　金のないのが好きらしい
翔びすぎて立てた矢印目に止めず
ワープロは正直すぎてごまかせぬ

倉吉市　米田幸子

告げ口をしてから愛にひびが入り
朝の靴に発破をかけて送り出す
残念な事だ蕾のままで枯れ
気くばりが過ぎて妻から疎まれる

倉吉市　野口節子

じいちゃんのバイクがうわさ積んで来る
意地もねじもみんな緩んで好々爺
肩パット取れてのんびりしています
頭数揃えて通す横車

倉吉市　最上和枝

売れ残るリンゴ一個が病んでいる
靴下の繕い知らぬ人で満ち
秋風がこぼれ話を持ってくる
潮風が吹いて軒先船だまり

和歌山市　玉置当代

住み慣れた家と別れるのも辛し
エアメールもらって胸に抱いている
蟻達の小言を聞いたことがない
来た道を残しでんでん虫歩む

松茸のはなしに沸いた日向ぼこ　和歌山県　西口忠雄

三割の嘘も入って肩を揉む
痛くても階段のぼる愛のムチ
用便が長うてろくなことはない　和歌山市　榎原公子

琴線を鳴らす　女である限り
補修して家も私も若返る
認知劇　はずみで芽吹くから怖い
白壁のしみに旧家の顔がある　和歌山市　田中みね

自己暗示　年よりずっと若いわよ
歳の差に遠和感のない趣味仲間
一点を見つめて父の無位無冠
ここいらでひと花咲かす種を蒔く　和歌山市　山口三千子

人生観誤り土俵際に立つ
惚けるのは恐いが悲しみは消える
十人十色の友と共通点を持ち
単細胞だから暗示にかけられる　和歌山市　堀畑靖子

突然にぽかっと家を出たくなる
金運は不調とずばり当てられる
中年の今も母恋う次郎柿
栄光の過去など持たぬ身の軽さ

ご無体も拒否出来ぬ理事ならお止め　和泉市　岡井やすお

外援に歩調合わせる消費税
分秒の速度を競うＪＲ
十二月良いも悪いも総ざらい　吹田市　栗谷春子

詩人とはもののあわれを食べるもの
待ちかねた秋はやっぱり秋だった
ああ昔めしだめしだと喜べり
四季が好き色に嫌いのないように　吹田市　井上照子

病葉の散りなんとする風吹くな
検査から思わぬ手術覚悟する
おたぬきさん撫でる真顔の私です
翔ぶはずが病魔の神に遊ばれる　吹田市　茂見よ志子

秋さなかドビッシィー聞く刻豊か
旅名所　妻のほほんと従いて行く
これきりでお仕舞いだろう畳替え
ふるさとの会いたい身内皆故人　吹田市　瀬戸まさよ

故郷の港　母なる乳房もつ
父母の齢きょうだい皆が越えました
病得て運にまかせるコツ会得
思案するピンとキリまであるメロン

茨木市　堀　良江

引かねばよかった大吉のみくじ
菊人形眠り足りないような目で
お互いに気を遣うてはすれ違い
長男を結びつけてる床柱

出雲市　小白金　房子

ちいさな瓶わたしの好きな秋をさす
収穫期　小判のように芋を掘る
台風もそれる神話の里に住む
福耳を持って心を病んでいる

川西市　松本　ただし

疑えばきりなし種のない葡萄
間延びした平和を告げる鳩時計
秀才も着せ替え人形の披露宴
人生をおいしく暮す好奇心

大和郡山市　坊農　柳弘

柊の花見ぬままに恋終る
燗冷めを下味にする母元気
不意打ちの天地の怒り北の国
はしご酒　胃腸元気か達者なか

藤井寺市　福元　みのる

胃カメラで医者への不信見透かされ
野良犬が身構え俺も身構える
夢さえも思い出せない齢となり
飢える民思う豪華なペット食

池田市　岡本　吉太郎

うぬぼれてあの人よりはで生きてます
いじわるで見て見ぬふりしさびし我
ライバルのうぬぼれ待って反撃す
平和にて祈り忘れて生きてます

箕面市　椎江　清芳

顔馴染み素通り出来ぬ赤い羽根
養殖の鮎ふるさとはみな琵琶湖
子沢山苦労女のほつれ髪
故郷の民話が消えるダムの底

香川県　山地　マツヱ

妻の鼻も少し低い方がいい
五十年時効にならぬ弾の傷
太陽に背いてひまわり反抗期
納骨をすませ予定の京めぐり

札幌市　瀬尾　六郎太

ガンに効くβグルカン本しめじ
イオーだぞ漁民総出で地引網
欠点列挙　発想転換　丸四角
価格破壊　平価切り下げあるかもね

豊中市　滝北　博史

人生に冬が来たよと喜寿の友
米寿でも女性に冬は無いみたい
プロポーズ　ラストチャンスだクリスマス
ほとんどが長男長女　新世紀

長寿法問えば答える八分目
ひたすらに守り続けた寡婦の城
無駄遣いだったと悔いる特価品
胃に溜る憂さは溶けない消化剤

姫路市　中塚遊峰

金策へ夫婦で駆けるサクラサク
カメさんが好きで童話の中で生き
雲に乗る勇気を持たぬ負け犬で
蜜柑熟れ若者不在過疎の島

竹原市　古谷節夫

くどくどと念押す妻に老いを知る
土地神話消え値下がりが続いてる
聞き役に回って敵をつくらない
寒風にめっきり減った万歩計

岸和田市　三輪通彦

早口へ納得したと聞きながす
時として鈍い言葉の友をもつ
敬老会参加料だすおとしより
高熱の寝言に出会う新米ママ

岸和田市　藪野けい子

とろとろとゆるい峠を越えて秋
うれしさはぶらりと秋に酔うてくる
冬まえの蓮田の景色やわらかい
ピオーネよ君も真珠と変りなし

広島市　森田文

ときたまに誰もが好きな色話
葬式を終えてお天気みんな褒め
ボロボロの心かあさんがあたためる
思いやりお金で買えるものでない

八戸市　島田昭治

火を吸えば夢がふくらむ熱気球
雑草のような植木の庭いじり
終戦と言う字で飾る敗戦日
駄馬なりの歩みで古稀へ歩を刻む

交野市　福崎しげお

嫁ぐ日に父はやっぱり泣くのかな
柳友の誘い休肝日とも言えず
一日のリズム狂わす酒だった
良い本に出逢えて秋の夜がふける

羽曳野市　森松まつお

禍も福も因果応報　天ぞ知る
愛犬も時に私を誤解する
ユーモアと駄じゃれの落差ピンとキリ
頭数だけの政治屋症候群

宝塚市　中田純次

赤い靴　履いてしまったように生き
舞扇納めし母の桐箪笥
石室に入りてわが息ひそめけり
宮人の唇あかき壁画あり

堺市　近藤豊子

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこころ (48)

橘高薫風

前号の文章の筆者河盛純子さんは、河盛家の一人娘の葭乃先生が嫁がれたため、養女となって後を継がれた。文章は葭乃先生の手も入っている気配はするが、女学生として実に堂々としている。両親の血を沸沸と感じる。

この年の路郎先生の句は、先に五・一五事件の「待ったなしの歩にさされたる犬養毅」を紹介したが他には次のような収穫があった。

雑　詠

新町与太呂にて

河豚だ酒だ男ざかりのうれしけれ
女十八アダリンの夢
むっとしたが子どもの頭撫でておく
操など考えていず脂ぎり

一子を儲けた久流美氏に

原稿紙へ平二とこそは書かれたり

悼　五葉

薬湯の隅にひとりの君なりし

二男アート危篤

汝の父はロック氏液をささげ立つ

題　詠

とりまきをいっそ淋しいものに見る
家出と追手道頓堀で別に呑み
許嫁女に見える頃になり
いつしかに母とおんなじ美顔水
思いきり惚れて毒婦と知らず死に
思い出し思い出し弾く母の三味
爪弾の晋作油断せぬ構え
爪弾に明日は仇討とも見えず
幻の中に時計が鳴っている
無くなると知ってもさらの傘を貸し

路郎の句は雑詠も題詠も渾然としてその区別をつけかねるように感じられる。そして、前書のある句が実に佳い。

「待ったなしの歩にさされたる犬養毅」の句にも「首相逝く」の前書がある。安川久流美氏への祝吟も、浅井五葉氏への悼句も、その特徴と個色を深く把握する。二男アート危篤の句の父親の心情は、誠に切々、読む者をしてその場にある思いをさせる絶唱だ。

芭蕉にしろ虚子にしろ、前書のある句は堂に入っている。私は以前、奥の細道の美しい文章は長い前書だと、何処かに書いたことがある。そして究極の一句を据える。前書のある句のてだれは、この道の名人に多い。

葭乃先生の主な雑詠

鶏も猫も来よ来よ子等の膳の下
うどん屋の酒は足から醒めそうな
夜ふかしも朝寝も父にまけじとす
苺は毒婦処女の桜ン坊
金の奴隷の奴隷となって御寮人

主観と客観、抒情と批判、その両面をこなして感性の高さを示す。

十二月号には翌昭和八年に迎える『川柳雑誌』創刊十周年の記念事業の予告を掲載する。

○記念特集号の発行
○祝賀川柳大会—新春の佳日を選んで華々しく開催の予定
○記念出版物刊行
①川柳雑誌第一句集
②川柳パイロット　初心者の指針となる座右必須の参考書
③路郎雑筆　川柳に関する評論、雑筆随想をレヴューしたもの

かくて百号を発行し、朝日会館を埋めるイベント「川柳の夕べ」を開催した年は暮れ、路郎先生をはじめとする社の関係者と同人は充実感を抱いて創刊十年の新春を迎える。

自選集

黒川紫香

涼しいと言えばとなりでくしゃみする
夜中しかかけぬ電話が長くなる
好き嫌い変わって来ても肥えている
たこ焼屋も競馬のことは乗ってくる
万札をこまかく折って持っている

月原宵明

カズの名は覚えサッカーわからない
一病と仲よくカラーの薬飲む
断水に水の重さが身にこたえ
あばら家が名画となった月明り
死んだかと言われたくない顔を出す

野村太茂津

周波数合わぬ人脈気に入らぬ
線細く尖りふところ浅い人
目障りで煙たいらしいので怨す
気を衒う現実離れ居て困る
底抜けに明るくみんな怨せそう

工藤甲吉

自分でも大事にしてる笑い皺
某月某日　目刺に酒をなつかしむ
王将を一人ぽっちにして負ける
時流には染まる気がない天邪鬼
老残に登り切れない坂一つ

児島与呂志

どたん場はNOと言う気でいる女
不意を衝く単身赴任の電話ベル
幸せは今朝も隣の笑い声
根来寺　二人参れる凍てた坂
帳尻を合わせて今年　暮れる老い

辻白渓子

商談へつなぐもてなしだと思う
披露宴の祝辞　本から覚えてき
夢で見たようにパチンコ這入らない
美しい月に気付いた左遷の地
肩書が集まりすぎてまとまらず

相談ごとを提げて渚に立っている
海に出る道で整理券を貰う
問いかけると沖も白波騒がせて
鏡の中の海　荒れている荒れている
満ち潮の音ひびかせて老いるなり

八木千代

立候補の時は透明だった人
挨拶にコラムのような具も入れて
ライバル意識負けてる方が強く持つ
やってみたい事体力と妥協する
自分に鞭打っても効果知れている

金井文秋

女には強い方だとうわさ立ち
便り来る予感雪道あけて待ち
人間も惜しまれて死ぬ人になれ
シベリヤの俺を生かした妻の文
うっかりとまた甘言に引っかかり

奥谷弘朗

健康のために魚の料理法
都会の空気は作られている匂
補聴器をはずしつけたり電話口
しみじみと老いを意識する八十路
手紙の情緒聞かせても長電話

藤井明朗

ゴールドタウンで無策の腕を組みなおす
正論を破れ太鼓の穴で聞く
一蓮托生いつまで壺の鬼と棲む
いくさ火へ神の裁きが二つ出た
悲しみも愚痴も煮つめるおでん鍋

小西雄々

弁当を開けて比べて勝負なし
拭き直す涙へ語る花芙蓉
ねばり気がなくて切腹ばかりする
脇目せぬ誇りのままでけつまずき
すぐ怒る笑う一杯酌いでくれ

水粉千翁

ねばるだけねばる気窓際族でいる
溜息を残して住宅展を出る
手さぐりで向う岸まで着いた運
三年目　妻という字が重くなり
停年が近く父の背丸くなり

有働芳仙

落葉吹雪　鬱から燥になれそうで
こだわりを捨てると夢に逢えますか
鳳仙花癒しきれないことがある
パンドラの箱を開いて幸せか
メトロノーム聞くと耳から眠くなり

波多野五楽庵

五節の舞十二単の裾さばき（平安建都千二百年　二句）
玉すだれ雅にゆれて五節舞
九条が怪しくなって来た政治
もう翔べぬ今宵の月が美しい
自問自答　石庭に問う禅の意義

松川杜的

捌け口の井戸の代りになってやる
古希過ぎた手足で高所恐怖症
職人気質まだ生きていた屋根瓦
老いすすみ頑なになる人嫌い
母の背の温みを知らぬ紙オムツ

恒松町紅

諦めに替ってしまう古い鏡
忘れついでにわすれている誕生日
わたくしの後ろ姿が気に入らぬ
辛いものがこびりついてる土踏まず
突き詰めたところに水が湧いている

小出智子

溝埋める笑顔が今日も出て来ない
ブランデーちびちび旅をふり返る
寝過ごした母へ出勤せかされる
左遷地で澄んだ空気と水に合う
ひとり旅　行きつくとこへ酒があり

小林由多香

夏草の中へわすれて来た話
お元気そうで安心しましたと電話きれ
秋桜この土地の名を風にのせ
金婚はすみましたと元気に友も老い
ごまどうふ旅のお寺の話する

正本水客

弥陀の掌にすがると短気とけてくる
湯豆腐の湯気もいとしや秋深む
なんべんも念押されてるきのこ汁
家事社交　お疲れさまに笑み返る
獣医師にペットあずけて長の旅

久家代仕男

古希みんな大先輩に見えて古希
日に一度愛の一声抱いて寝る
ストレスや口の尖った弁を聞き
国民の皆様　私の知らぬこと
娘等の小声　喪服のない話

大矢十郎

聞く耳が出来て昔にさからわぬ
マスコミが砲列を敷く高い塀
年寄りも強しホイとは従いて来ぬ
すばらしい未知　君の星　僕の星
法則のとおり家計簿の赤字

遠山可住

ラッシュアワーみな働いているんだな
五日制　塾は休みにしてくれぬ
生きてゆく雑魚は雑魚なり負けられぬ
やわらかい方へ傾く急停車
遠い日を追うのはよそう今日のめし

高杉鬼遊

名実ともに老人となる六十五
成り行きで仲介の労とらされる
お茶お花詩吟に扇舞妻多忙
あれやこれや言い付けて妻旅に出る
入院すればしたで多くの友ができ

野田素身郎

回り続けて少し疲れた母の独楽
灰皿はあふれ交渉まだもめる
故郷の芒の私語は今盛り
放言にやすらぎがある花いちもんめ
焼栗の匂　夜店の秋深む

藤村〆女

いつのほど背のびの背丈わが背丈
秋深し位牌に秋の一字あり
酒の甕　以後水ばかり入れられる
金米糖　孫あげるなりもらうなり
方舟の用意そろそろ社会党

橘高薫風

川柳カレンダー・予約受け付け中

『川柳カレンダー』は、日本伝統美保存会・芳文館出版が企画・編集し制作したのが……、

わが国で最初でただ一つの『川柳カレンダー』

です。平成元年より発行。いまや川柳作家はもとより、教育医療、文化、文芸、政界、財界関係の事務所や応接室、休息所などなどに使用され、好評を得ています。

内容概略 ＊第六回全国川柳大会・入選句と入選作家名の発表掲載。
＊現代川柳界で活躍中の有名作家十二名の、直筆色紙を別刷りしハリ込みにした特別カレンダー。お申し込みをお待ちしています。
＊大きさ61×27センチ〔定価〕950円（消費税・送料は別）代金は後払い。ハガキでお申し込みください……
〒195東京都町田市金井4－1－16
日本伝統美保存会・川柳カレンダー係へ

川柳太平記（199）

川柳の群像

久門薩城

東野大八

久門薩城といっても、今は知る人も少ない。この人物は、大陸生えぬきの、古典的川柳人といってもよい。

本名久門久女之助。愛媛県東予市河之内町で、明治29年（一八九六）3月14日山内鷹太郎の三男として出生。すぐ上の兄、山内令三郎が、同盟通信記者として中国の京津地区で活躍中であるのを伝手に、旧制中学校（西条中学校）を卒業と同時に十九歳で渡華、老都天津の総領事館の給仕となった。

21歳の適齢期で天津で徴兵検査を受け、甲種合格、朝鮮歩兵19連隊に入隊（大正五年兵）したが、猛訓練のため胸部疾患となり、京城陸軍病院に六十日入院。伍長勤務上等兵で、現役免除で郷里へ帰り、一年後、再び天津へ戻り、天津総領事館書記で終戦までがんばった。この間、山内家から久門家へ養子に入った。

さてこれからが柳歴となるのだが、往時の天津居留民会の在留邦人たちの趣味面について、昭和3年刊の柳誌『蒙古風』三周年記念号誌上で、堀天津郎が「天津柳界沿革史」に詳しいので、長文だが要約して再録する。

「日清戦争の戦雲ようやくおさまりし頃、天津居留民はわずか50余名に過ぎなかったが、この在留邦人達は〝俳楽会〟という俳句吟社で月一回の句会を楽しんだ。

北津事変（一八九九明治32年）により本国へ避難のため、俳楽会も一時中絶したが、事変鎮定後は、渡来者が潮の如く殺到、忽ち在留邦人は二千余を数えた。このため、俳楽会も会員増加し、明治35年には機関誌『鴫』を出し、川柳欄も活気づいた。しかし、その川柳は、狂調陳腐に堕し、臭気鼻をおおう有様。

折しも大倉組にありし、正統川柳の重鎮川上三太郎氏は、天津時報社員内山唐変木氏らと狂調川柳反対のノロシをあげ、五、六人の同志を語らい、〝川柳研究会〟を作った。

大正6年、天津地区白河氾らんの大出水に見舞われたため休刊となる。あけて七年、大連より淺海麦村氏が来津し、地元雑誌に「天津の川柳界」の一文を草し、その無気力ぶりを叱汰したので、大正10年小林一考、山口米花氏らに麦村氏を加えて〝天津川柳会〟を設立し、機関誌『ホコリ』を発刊した。これは大連の川柳人磯貝意想郎（天津日報工務課長）の参加に力を得たものであった。

三太郎氏らの川柳研究会は、このとき有名無実、一顧だに与えるものなし。一方、『ホコリ』には和田黙然人、堀天津の有力同人も加わり、三か年間よく踏張ったが、大正13年、黒川黒法子の呼びかけで、黙然人、天津郎らも参加し、『蒙古風』が生れた。

この新柳誌に、小林一考氏らが山崎石舟・筒井白州らと組み、川柳研究会と号し、『長城』を出し『弗（ドル）』を出版したが、いずれも一号で中止となった。

これに反し『蒙古風』は、大陸の飛将軍中

沼若蛙をはじめ、小林茗八、湯本白庵のベテラン各氏のそろう大連川柳会（関東州）と友誼吟社となり、毅然として大陸支那の京津地区に君臨した」（以下略）

昭和40年発足した大陸川柳作家同窓会は、年一回の会合を19年続けて解散したが、薩城はこの会の長老顧問格で、全集会に出席した。この会合の折、幾度も大陸川柳界の草分けで、柳誌第一号を記録した創世記の天津柳界の回顧録をよく聴いたものだ。

大正7年、北京の実兄令三郎は、同盟通信記者から地元の華北政務委員会に入り、既に羽振りもよかったので、この兄の口ききで、再度天津総領事館書記生見習で返り咲いた。

ところがその二年後、登場したのが石原秋朗である。背丈は並だが、イノシシ武者といった感じの、肩をゆすって傲然と歩く独得の足どりは、二歳齢下と知れたものの、並の身体の薩城は対面するなり圧倒された。

「おれの母校は拓大だが、その拓大寮歌はおれが作った」というのが自慢で、船津辰一郎総領事に随行しての総領事館入りだった。

この石原秋朗は、俳号を血涙堂とつけ、なかなかの国粋派で、天津排日団体主催の、山東鉄道回収デモ大会に、紋つき羽織姿で単身乗り込み、大いに日本青年の誠意をヒレキしたというのが一世一代の自慢だった。

この石原が俳句の傍ら川柳に注目したのは小林一考と薩城の熱心な勧誘によるものだ。一考は、大きな理髪館の経営者で、薩城が俳句のかたわら川柳をかじっていたのも一考のせいで、三人が顔を合わせた天津の待合でのことだ。

「よし、おれも川柳をやる。柳号は、三国志の盡忠武勇絶倫の関羽が帯びる青竜刀にする」

そもそもこれが非詩派の闘将をもって自他ともに許すことになる石原青竜刀の誕生だったのである。

大正13年秋、船津総領事が退任、後任として登場したのが、のちに白足袋首相で鳴らした吉田茂である。

大正13年（一九二四）天津を退去、免官（当時、吾輩の免官は吉田氏とケンカしたため辞めたのだ、という伝説が横行したが、その真相は行政整理のため）退去に際し、居留民有志と空前絶後の珍妙盛大を極めた送別会開催、翌年、迎妻、大連転居、国際運輸会社入社、大連川柳会の同人となる＝石原青竜刀著〝諷詩竜沙吟・著者要歴〟。

薩城は、快漢青竜刀の天津退去後は、本名の俳号のまま、川柳に全力投球して、内地の『きやり』『番傘』へしきりに投句した。

この頃、地元天津の川柳会は、さしも優勢を誇った『蒙古風』も約四年で休刊、一考ら一派の季刊『長城』と合併した形で、天津川柳社を再編して柳誌『天津』を出した。

この間、地元で活躍したのが和田黙然人で、川柳詩論を掲げ、句と文で地元柳界の重鎮となった。しかし、麻生路郎と岩崎柳路との出会いから、北京眼四井胡同に格好の家を見つけて旅館ナニワホテルの経営に専念のため北京へ転居。天津川柳会は、磯貝意想郎の大連転居もあって『天津』も休刊する。

「昭和初め頃の天津柳界はさびれる一方で、青竜刀も三太郎もとっくに去った天津川柳会はくもの巣が張った。必然、わしは内地の柳誌一辺倒で川柳をやるしかなくなったんだ。寂しかったな」と晩年の薩城はそういって索然とした。

終戦後は、大使館員らといち早く内地に家族とともに引揚げ、消防団や老人会等の役職等に余生を捧げ、昭和63年12月16日老衰のため死去。享年92、法名天真院修徳智照居士。

座談うまし北京官話もまだ達者　薩城
郷愁は高粱の風塔のたつ地平　〃
引揚げの眼に変らぬは花の色　〃

▼次号は「**阪井久良伎**」

柳籠裏三篇研究（二十四丁）

瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人
八木敬一・七久保博・岩田秀行
紀内恒久・西原　亮
鈴木倉之助　故岡田　甫

307　**へのこの珠数を切に行松ケ岡**　露舟

青木＝「珠数を切る」は一事の信念を破棄すること。

芝居の珠数を切りやしたと世帯染み　一五30

主題句の「珠数を切る」は、亭主を見捨てて、という意味であろう。

へのこに暇をくれて行く松ケ岡　末三28

松茸を切るのに嫁は松へ行き　六〇12

八木＝賛。松が岡はお寺だから「珠数」と仏教用語を持って来たところが技巧。

七久保＝賛。

へのこ切れないとこへ逃げて行き　天元義4

「珠数を切る」は改宗すること転じて心を変ずる意味でしょう。

西原＝賛。西鶴も使っていることば。

鈴木＝同。「へのこの珠数を切」は男を断つ意。

岡田＝同。

308　**呉服屋の小便で明ク切おとし**　文集

青木＝「切落し」は、追い込みの最下等芝居席。貸切指定席の桟敷と違って、追い込みの切落しは毎度立錐の余地もないほど混雑するが、正月と盆の藪入の日は、越後屋の丁稚・小僧の団体観劇があり、幕間には、まとまって小便に立ったので、切落しの一角が普段の日と違って珍しく明いたと言うのであろう。

越後屋が出て切落し穴があき　安四智3

切りおとし呉服屋穴を明ケて出る　安九義2

佐藤＝小便という語は契約破棄を意味する。この句の場合は予約席の取り消しであろう。

七久保＝礎稿賛。青木氏引用の句からも素直に小便に立って明いたと考えたい。

岩田＝同。たとえ一間いくらで売ったとしても、それは当日売であって切落しに予約席はあるまい。

鈴木＝同。

岡田＝佐藤氏の新説も一解だが、一マスみんな小便にゆく。この方が自然。

309　**伊左衛門たいこをミると横へきれ**　湖水

青木＝浄瑠璃「夕霧阿波鳴門」の句作。大阪新町扇屋の夕霧は、藤屋伊左衛門と契って一子を挙げる。後、伊佐衛門が勘当されるに及び云々、という筋書き。

句は、伊左衛門が零落した己の姿を幇間に知られるのが嫌で、横にそれたというもの。

伊左が綻び経子屋を呼にやり　一〇四41

八木＝賛。「横に行く」・「横番を切る」は遊里用語で、遊女が客の目を盗んで、間夫と逢うことを言う。「横へきれ」は、この遊里用語をきかせているようだ。

鈴木＝同。八木氏のお説のとおり。

岡田＝同。

310 **あれがさせるかといふやふな三分也** 花菱

青木＝「三分」は「昼三」のことだが、その説明は難しくはっきりしない。

「呼出しの昼三」か「張見世中の三分女郎」の何れかを見て、その美しさに「あれがさせるのか」と思わず心中に感嘆の声を放った素見物の句。美しい女性を見るとこんな気持ちになるのは、昔も今も、吾も他人も変わらぬものらしい。

八木＝句自体は難句でないと思うが、同様「昼三」は調べれば調べるほど難しく、分からない。

岡田＝「昼三」についての確説が出るには、もう少し時間が掛りそう。

311 **すそつぱりめがと有常息キを切り** 蜃江

青木＝「有常」は紀有常で、在原業平が筒井筒の仲であった女の父親。

井戸の側で男の子（業平）と「禁じられた遊び」をしている娘を見付けた父親（有常）が、息急き切って駆け付け、淫らな遊びを叱りつけたであろうとの想像句。平安時代の公卿に「裾っ張りめが」と江戸市井語を使わせたところが味噌。

おちやつぴいとは有常が言初め　明元礼6

岩田＝賛。この「すそっぱり」は、最初わが娘に対しての言であろうと考えていたが、業平に対しての言ととれぬこともない。どちらがよいものであろうか。

鈴木＝一般には淫奔女の異称であるが、稀には男にも用いられる（岡田先生）、というからどちらにもとれる。しかしここは、わが娘を叱る方に賛。

岡田＝小生が「すそつぱり」を男にも用いると言ったことがありましたかねえ。あったとすれば、用例があったからですが。淫女のことと解していたが。

312 **かき餅の有りどをさがす花の留守** 仙雅

青木＝女・子供を花見に出した後、亭主退屈の余り、ゴキブリよろしく台所や茶の間をごそごそかき餅の有り場所を探すという句。

男というものは、普段食べることの支度をしないのが普通だから、女が居ないと大いにまごつく。かき餅は醤油だけでも砂糖醤油でもよく、人それぞれ好みがあろうが、塩味の効いた青海苔やゴマの入っているものなどもあり、何もつけなくても結構はかがいく。

花盛り一日男世帯なり　一四13

花の留守このざまわえとかたずける　九25

鈴木＝賛。礎稿おもしろい。妙文。

岡田＝同。礎稿に「ありど」の説明欠。「有り所」の略語。

川柳塔

（追加）

昔行った古いお寺もさまがわり　西宮市　山本義子

病気された友にやさしいお娘おられ

もう今から顔見世に行く約束し

丹精のコスモス土産うれし秋　宝塚市　小倉藍

笛太鼓　里はほのかな酢の匂

秋風に忘れてならぬ既往症

裁判所今故郷の歴史館

夢入れる積りの小箱少女めき

秀句鑑賞

同人吟林　瑞枝

11月号から

川柳を始めてから早くも三十年、川柳との出逢いが私の生き方を変えました。

お蔭さまで夫婦で作句にいそしんで、「川柳塔きゃらぼく」と言う名称のもとに、とても仲の良い華やいだグループのまとめ役をさせて頂いています。

現代の川柳は、「センス・スタイル・スピリット」だと言われて、詩性川柳なるものが作句されている。一生勉強・一生青春、山川草木・花鳥風月、すべてのものを対象にして詩を詠み、にんげんに置き換えて作句をすればとても愉しいものになります。

人の感性は、磨けば磨くほど光る。いくら躓いても、又起き上がって、あちらこちらの柳友との出逢いを楽しもうではありませんか。

てのひらを開けば歩駒ばかりある

西出　楓楽

とても大切に握ってきたてのひらだけど、開いて見ると、あまり役に立たない歩駒ばかりだった。人間は、案外つまらないものを大事に摑んでいるようだ。いろいろな欲を離れて過去にとらわれず、前を向いて気楽に生きたいものですね。

競う気はないが完走するつもり

田中　正坊

にんげんは誰しも競い合う気持があって、角力に、野球に、鼎頂を持って喜んだり、がっかりしたりで面白いが、さて自分のこととなると大変だから、細く長くマイペースで、自分の足で、自分の道を完走したいと思うわたしです。

鳴っている電話へ髪を撫でて出る

矢野　佳雲

この句は女ごころをキャッチして余すところがない。明治三十年生まれの私の母は、九十二歳で世を去ったが、とても健康そのもので、百二歳の金さん・銀さんまでは大丈夫だと思っていた。日本髪の乱れを気にして、きちんと結うて整えて、愚痴は決してこぼさぬ母でした。

佳雲さんには、まだ一度もお逢いしてないけれど、きっと楽しいお方だと思う。

きのこ採りクマもラジオを聞いている

相馬　一花

ゴルフ場、宅地造成、飛行場等々、森林を切り拓いての人間のエゴに、熊さんも生活を脅かされて、やむなくも広島市内までのそりのそり、熊が出てきたニュース。私の家の近くでは、真夜中に狸が出てきて、ごみ袋を漁っているそうだ。

クマ除けにラジオを提げての茸狩りかも知れませんが、熊にはお気を付け下さいね。

母という演技続けた背が丸い

石垣　花子

ご先祖からのいのちのバトンを受け継いで六人のお子さまに恵まれて良き母親である花子さんの老後の倖せが見えるようですね。そんな母の姿は尊くて、子にとって大切な存在ですね。

ブームに乗ってアルカリ性の水くみに

田中　亜弥

島根県と鳥取県の県境の船通山（せんつうざん）のふもとの雑木林にアルカリ性の水脈があり、沢山の人がその湧き水を汲みに行く。マラソンをしているパパのタイムが上がったそうで、続けて水汲みをやっている。

大都市のコップの水には、レモンの輪切りが添えてある。

この屋根は父だ父だといいきかす

野坂なみ

昭和二十五年頃までは、私の生家は十一人家族で、大屋根の鬼瓦を仰ぎ見るたびに、あれは頼もしい父親像だった。そんな賑わいを見せた家族も一人減り二人減り、巣立って行って、老いた父と母の住む広い家となった。

ほどほどの我慢はクスリかも知れぬ

寺沢みど里

「薬飲むより野菜を食べよう」との記事をこの頃はよく見かけるが、疲れが溜まっているとき、野菜を食べる菜食主義の私です。好き勝手にわがままに暮らすよりも、このほどほどのクスリと言うのは、生き方の薬であろうと存じます。

あぐらの中で父が歌った赤トンボ

澤田千春

九十三歳でお亡くなりになったという千春さんのお父上との想い出かなあ。音楽好きの教師のご一家で、秋のお縁側のなごやかな庭を眺めながらのご家庭のひとこまが浮かんでまいります。

使い残しのいのちに酒を注いでやる

江原とみお

残された大切な余生の時間を愉しんで、酒をたしなんでいらっしゃるとみおさんのそこはかともなく、美しい夕焼けの空が見えるようです。どうか長生きして川柳塔社の発展のために、ご指導をお願いいたします。

気にしてることを気にして他人が問う

竹治ちかし

にんげん誰しも、気にしてることの一つや二つはあるはず。私も美容師さんがシャンプーしながら、「髪がたくさん抜けましたよ」と言われて、少しショックな胸の内で、「少しぐらい抜けたって大丈夫だわよ」と繰り返していました。

ごちそうと涼しい旧家ほめてくれ

越智一水

今年の夏の猛暑は凄かったですね。やはり日本建築は、夏に涼しく、冬は暖かいですね。家は毀して駐車場にしてしまった生家の中庭の辺りを吹く涼しい風を、なつかしく想い出しています。

糸トンボ亡母の使いか墓の道

吉川寿美

蟬は何年も地中に潜り、この世の明るい陽の下を飛び回れるのは一週間ばかり。糸トンボは、細い透けた羽を広げて、すいすい飛び回れるのは何日でしょうか。

ふるさとの盆のお墓参りは、時代とともに道筋が変り、なかなか見出せないものだが、そこへ糸トンボが…。

あれから五十年思えば今は極楽だ

堀端三男

昭和二十年の終戦のどさくさ。家族を失って道に迷う人、闇米を背負うて逃げ惑う人、煙草の吸いがらを拾って歩く子供、進駐軍兵士の彼女になる女等々。

今年の夏、突然のお電話を受け、米子空港のロビーで、五十年前のかつての教え子に出逢った。今では東京で高校の校長先生とか。五十年の歳月は、いっきに吹っ飛んで、暫くぶりの語らいに刻を忘れる思いだった。

群れ薄　亡母を隠していませんか

福井桂香

中秋の名月の下で波打つ芒が原。大山の山麓にも壮大な芒ばかりの原っぱがあるが、ちちははがひょいと現われそうな気配がする。

ゆき昏れた胸でホタルが点滅す

矢内寿恵子

人生のたそがれどきの胸の蛍、まだまだ残り火が燃えて美しい彩をなすのです。

素足から季節ごよみの風に会う

池森子

季節季節で夏には夏の風にふれるし、春には春の風にふれる。四季の移り変りの良さを素足が真っ先に感じとってくれる。

五煙抄

黒川紫香選

今治市　塩路よしみ

萩の花気ままな乱れ許される
思考力失せてぼんやり昼の月
子の夢はポケツの中ではち切れる
病窓の夜景遠くへ来たもんだ
好きだから言葉をにごすスリ硝子

米子市　足立由美子

垣根越し暫く冬の話する
起きて寝てこの頃老後考える
師走にはまだ余白あるカレンダー
自己主張すこし弱気になりだした
計画はとても上手にするノート

名古屋市　藤井高子

ちぎり絵に亡母恋うしじま　冬の灯
取り消した言葉を食うて眠れない
木に登ることでストレス消した猿
いい顔をするから後がややこしい
待っていたわけではないと待っている

宝塚市　永田暁風

別れてくる背筋まっすぐ意識して
集合写真いつも前列に居る男
手囲いの灯を消しに来るのは男
童謡の蟹の鋏も秋の音
淋しさを風に知られてなるものか

広島市　流奈美子

おしるしの雨　宝石のごと受ける
まだ涙もって人間らしく生き
天の神　地の神　人の愚行を愁いおり
人肌を恋うてねむの木目を閉じる
一年をつもごりそばと流し込む

熊本市　宇野照代

いくばくの命ですもの翔んでみる
直球で通した父の怒り肩
コンマ5のチャンスに賭けてみる手術
変心の策を練ってる秋灯下
子のお古だんだん親が派手になる

熊本県　大川幸子

矢印をのぞいてみたい好奇心
又粗品来たよと子供　正直で
有頂天まだ気付かない落し穴
背信もちょっぴりみえる言葉尻
白御飯タラコの赤がよく似合う

富山市　島ひかる

開発に民話の森が消えてゆく
いっぴきの蟻のゆくえを見届ける
やおよろずの神の一人は味方かも
最果てに佇ちて旅びと詩人なり
無事帰る約束をする登山口

富山県　高畠五月

鈍行の音冴え雨が近くなる
熟年の匂袋がよくしゃべる
萩と桔梗に抱かれて眠る無縁墓
逝った子の木登り思う柿たわわ
夕やけがきれいな里に今日も生き

今治市　渡辺南奉

簡単に明日の約束してしまう
飼い猫が僕の機嫌を知っている
美しい言葉優位に立っている
水不足我慢が出来る戦中派
節くれた指を恥じてるうちがよい

西宮市　牧渕富喜子

巻き戻す風は忘れた頃にくる
礼智信　恥も知ってたはずだった
夜が明ける夢の続きを見たいのに
はぐらかす辺りで話題変えてやる
何が好かったのか毎日水をやっている

尼崎市　田辺鹿太

男同士相合傘で飲み歩く
我を通す父の背後に母が居る
望郷の想い夜汽車を走らせる
愛情が渇き転んでばかりいる
信頼のおける男に膝を貸す

尼崎市　野瀬昌子

別人になって日暮れの街にいる
ほどほどの妥協で嫁に行くという
立ち話一人来たので抜けて出る
口開けて雨の降るのを待っている
儲けにはならぬが趣味を生かしてる

尼崎市　長浜澄子

カンナ赤く指切りの人待っている
温もりが欲しやと人の群れたがる
手の鳴る方へ動いた悔いが胸にある
シャンペングラス女も意地を泳がせる
骨埋めるつもりなにわの灯が温い

静岡市　沢田きん

控え目に余生を送るのも気楽
秋風が立てばこの本読むだろう
控え目へ素敵に老いる身だしなみ
ご近所へ荷物が届く十二月
思い出の記念切手を温めてる

神戸市　船津とみ子

さようなら九月静かに爪を切る
デパートへ万年筆の芯替えに
ポケットの硬貨は雨の日のお釣り
野菜デーの日に隣からカツ貰う
生野菜　山盛りに出す包丁研ぐ

豊中市　石川勝

傷かくす独楽は必死に回るだけ
糸切れたマリオネットのすすり泣き
思い過ごしの朝　納豆は糸を引く
羊羹を厚目に切るも愛だろう
正誤表がこわいと老いた編集者

久留米市　鶴久百万両

十二神将の中のほとけに智を貰う
かまきり夫人の熱い想いを聞き流す
長寿会　上には上がいて楽し
ほんのはずみの情事に赤ランプがともる
教育勅語　忘れるほどに惚けてない

熊本県　岩切康子

忘れぬよう復唱している台所
渇水の土にはっている草の意地
お話の返事ハガキでする老化
話し合いためた涙に気がゆらぐ

今治市　野村清美

思慕抱いて仄に匂う月見草
雑踏の流れを逆に子を探す
古セーター解いて夜長に編み直す
見上げると背中がかゆいうろこ雲

摂津市　木下道子

反対の声を消しゆくブルドーザー
今年限りの畑に太るさつまいも
お隣の犬に留守番よく頼む
赤ちゃんのお相手をして若返る

和歌山県　杉山精子

美しい結び目　母の自尊心
どこまでも独りの道を月が追う
野仏が夕日に染まるかくれんぼ
昭和史が寡黙になっていく不安

大阪市　勢理客トミ子

大仕事残して台風去った屋根
菊日和誰にかけても留守電話
ぽとぽとり蛇口ゆるんで夫病む
おはように始まる今日のおつきあい

藤井寺市　高田　美代子

とても素直な夢を見ている木のベッド
もつれ糸いっそ他人になりましょか
人くさいドラマを聞いた町の風呂
ふんふんとやっぱり聞いていなかった

宿毛市　岡村　千鳥

ある詩人真似て渚の蟹と居る
食べるだけは何とかなって生きてます
柳に風そんなあなたが気にいらぬ
夫婦とはいいなしみじみ風邪の床

尼崎市　森安　夢之助

金言を胸に貼りつけ靴をはく
無駄のくり返し人生忙しい
留守番の役得コップ酒がある
ジョークだろうが私には痛い刺

尼崎市　的場　十四郎

うるさいが逃げない妻が居て安堵
夏終る木馬の背なが剝げている
喜寿の坂優雅な日々で飾りたい
秋とんぼ話し相手に追ってくる

香川県　辻上　よしみ

ただ黙り静かに見てる愛もある
もう一度頑張って見よと自己暗示
口八丁手八丁でも嫌がられ
眠ったら元気な亡母にまた逢える

香川県　堤　くに子

秋祭り来たヨと咲いた彼岸花
電線の雀もボスは居るらしい
あの嘘が胸につかえて眠れない
ネクタイをはずすと優し父の顔

尼崎市　尾宮　弘治

髭面の下戸を酒豪と間違える
社長にも法被が似合う夏祭り
部下招く家に娘が二人居る
無駄骨を黙って拾う妻が居る

尼崎市　河津　正治

日帰りの旅情に揺れるイヤリング
色褪せた野良着の父へ蟬時雨
カタカナの絵本に探す句読点
十指みな的を絞って生きて行く

尼崎市　吉永　伊三郎

やっと得たポストの影で手の輪ゴム
折り返しまでは快調というラジオ
てんこ盛りに箸が一本立ててある
柿熟れるまで待てという便り

西宮市　古谷　ひろ子

早々と湯豆腐にする老いの秋
お晩菜の仕上げふっくら京豆腐
行楽客避け野仏といなりずし
連絡船　行楽客も出稼ぎも

和歌山市　古久保　和　子

どないして貼った見上げる千社札
まだ飲める一人暮しのバロメーター
うどん屋の前で三時になる時計
縁日のひよこ壊さぬように持つ

兵庫県　森　脇　和　子

タイミング外すと金魚に逃げられる
成長へビデオが走る運動会
言い訳がしどろもどろで渦の中
木曽節を湯舟に浮かせ秋を喰む

寝屋川市　冨　山　ルイ子

娘の病気　八面六臂の仕事ぶり
ラヴレター渡すチャンスが見つからず
だまされてみようか女ふと揺れる
好きと言って嘘でいいから大好きと

今治市　越　智　青　園

逢いに行く靴とは知らず妻揃え
迷い箸させる立派なおもてなし
散りしきる萩を残して掃除終え
スイッチオン今日一日が動き出す

旭川市　朝　倉　大　柏

いい笑顔火の輪潜って来たんだな
悪人でないけど頼りにはならず
泣く涙あるうち釘を打っておく
若いのが疲れましたとすぐ止める

泉佐野市　稲　葉　　洋

隠れんぼ一人残って居る不安
じゃんけんぽん何か呪文をとなえてる
専用の石で石けりする自信
歳重ね稚児にかえるかよく眠る

佐賀市　古　川　かずのり

一歩二歩後から歩き気楽です
物指しのちがい世間に脆い父
頼られているから少し口がすぎ
泣き笑い夫婦茶碗も四十年

岡山市　中　嶋　千恵子

投げられた謎がとけない曲り角
潮時を待っていたのは膝小僧
試行錯誤ひと息入れる夫婦箸
突然の話で度胸すえて聞く

鳥取県　奥　谷　彩　子

思い出がぽこぽこと湧く里の道
秋桜　風の噂を溜めてゆれ
お世辞だと分かっていても頬ゆるむ
休む歩む歩調もあって二人老い

今治市　村　上　久美子

影法師おまえの背なも曲ったね
本当に苦い涙はこぼれない
愛嬌も泣くのも武器にして女
病床へみぞおち痛む嘘ひとつ

酒田市　永澤裕子

ゴミ置場噂がいつも浮いている
言い負けて相手を許す秋の月
朝に家壊して夕に駐車場
棍棒の無情待ってる鮭溯上

福岡県　井崎ミサ子

言った事良くわかるけどボケた振り
彼岸花咲く畦道を墓まいり
喋らない姑喋らす嫁無口
通り過ぎのぞき一声吠える犬

尼崎市　軸丸勝巳

台風の実況アナに波しぶき
新空港見送りだけの大旅行
不動産買えと私に無駄電話
待合室　半端医学の暇つぶし

尼崎市　岩倉キク子

さぞやさぞ弾いても見たい虹の絃
少年の往きし青空今日も澄む
お稽古日お乳母日傘の行き帰り
言う気はさらに無いが言いたい事はある

高槻市　江原秀夫

舞うようなマダムの指に魔がひそむ
二階からあくびが降りてくる夜長
シャワーの音バックミュージックの電話くる
終章の紅葉が燃える霜の朝

枚方市　前たもつ

不登校これも一つの自己主張
自分のことができて妻からほめられる
ワープロの頭の悪さ見ぬく辞書
塾カバン持てば首から黄昏る

島根県　槻谷仲子

サービスの良い銀行に変えて見る
人様にだまっていれば解らない
雑草のままで小さな花咲かす
医療費が無料になれば病持ち

鳴門市　八木芳水

小骨の多い魚を突つくだんまり屋
屑籠に悲しい音がたむろする
弾むまり自信過剰をたしなめる
まん中を歩くヘルシー妻頼り

尼崎市　湊修水

大拍手　孫とシャンソン師は米寿（紫香先生米寿祝賀会）
秋空の雫宿すか曼珠沙華
暑さ呆け診察待ちの列にいる
用済みの絵馬を喋らす秋の風

尼崎市　萩原しげる

派手さとは裏腹に来た半世紀
時折は鏡の顔をいたわろう
ゆうパックふるさと風で到着す
一人旅乗り換え駅がもう近い

寝屋川市　宮崎菜月

ジーパンを干す位置変える冬の陽よ
欲出して余命を計り忘れたか
おさらいのさよならうまく言えません
割箸も二度と一緒になれぬ仲

倉吉市　山中康子

皿洗うリズムに詩が弾みだす
こんがりと妬いてることに気がつかぬ
早朝の風と語るもはや三月
落ち込みを癒してくれる詩に会う

唐津市　山門タミ

月下美人昨夜咲いたか垂れている
歩いては止まり歩いて長い道
懐かしい方言が待つ里の駅
赤信号飛び出す猫に止まる犬

泉佐野市　内田倫子

口だけはしっかりしている百二歳
老母残し病院を出る重い足
また来ると言っても最後かも知れぬ
引きとればまた鬼になる私です

豊中市　田中道胤

セールスにもう用がない老夫婦
川の字にごろ寝したのも久し振り
息掛けて丁寧に拭く秋の窓
人間を篩にかける〇と×

高知県　百田幸

末席に座して御世話の出来る人
聞かぬふりして聞いている妻の愚痴
少しだけ引込思案の妻で良い

唐津市　山門幸夫

嬉しいね鈴虫が鳴く家に来て
浮雲が二つ並んで流れてる
羽繕い今朝の兄ちゃんルンルンだ

福岡市　森志げる

空っぽの水がめを吹く空っ風
お辞儀する姿に母は耐えている
あれが噂の小指の似合う夢二調

宝塚市　飯西ミサヲ

人相の悪い眼鏡で目を守り
トランプのように繰り出す診察券
種を蒔く明日の保証もないままに

静岡市　大村正雄

難民へ善意届かぬもどかしさ
どの星に変身したか父と母
拍手して義理で聞いてる十八番

大阪市　中橋恵美子

検診するから病人になってゆく
ここだけの話知ってる地獄耳
スケッチを遠足の子に褒められた

兵庫県　円増純子

もう秋を先取りしてる雲の彩
別れ来し手袋の白鮮明に
裸　裸　裸　ほんに男は祭好き

米子市　服部朗子

事の始めには何回も手を洗う
制服を着た青春はもう来ない
地図ひろげ道案内が懇切で

鳥取市　山口しげる

天国の門に続くか曼珠沙華
道具立てばかりで中味見えて来ず
校正の朱筆に傲り滲んでる

松江市　安食友子

犬もまた遠回りしていい月夜
窓越しで投げキッスしたのは昔
お隣の窓がかなりな音立てる

尼崎市　中澤向西

名月や送ってくれた夜の蝶
急に又　貞女となって肩が凝る
風上で烏賊の浜焼きいい匂

相生市　中塚礎石

漬物の石が上がらぬ嫁の腰
振り向けば馬鹿といわれるのも分かる
出る杭は順序を知ってたたかれる

島根県　森茂美

キャンプ村今宵一夜は一戸建て
温室は四季に逆らい花咲かす
台風を待つ静けさよ不気味さよ

伊丹市　樫谷郁子

向いから敬老の日の花届く
秋日和はしゃぐ親子の墓参バス
彼岸花　実る稲穂を祝ってる

宝塚市　嵯峨根保子

秘めやかにドラマ一つをあたためる
聞いてもらえば愚痴もさほどの事でなし
尾骶骨したたか打って進化論

兵庫県　北川とみ子

鍋底を磨いて悔いのない我慢
幸せの真ん中へんに鬼がいる
許せない冗談もある日の孤独

寝屋川市　後藤黎之助

悠々自適なんと格好良い言葉
ガラス越し吾が児を探す顔は父
限られた生命知ってるボールペン

高槻市　芦田静江

愛いくつ句会を泳ぐパンタロン
過信したカルテに拾う無為無策
かいつぶり秋を遊ばす山の池

寝屋川市　森　茜

サービスにネクタイ変えてくる講師
お手玉の中味みたくて端を切り
目の上の瘤ならすっと消えましょう

尼崎市　向井末貞一

節くれた父の拳が懐かしい
テキストでなかなか出ない母の味
母だもん子の誕生日忘れない

新潟県　高野不二

豊作の掛声だけで値が下がり
納まってるか気がかりになる消費税
マニキュアの指では無理な胡瓜もみ

福岡県　本田忠男

開発の驕り山から水が涸れ
深刻と言う深刻な水不足
宣伝の裏に安易なはかりごと

唐津市　江川青琴

病み上がり何よりうまい秋の風
隣人に気の好い人が一人いる
生前の声が聞える通夜の席

今治市　渡邊伊津志

恋人のように寿司米抱いている
母の海がいつも凪とは限らない
商戦の撒き餌に群れる雑魚の数

米子市　鹿島蘭

毒消しはのんだが毒舌は止まぬ
赤い靴はいたら歩幅ひろがった
いつからか猫が遊びにきてくれる

鳥取市　植田一京

晩秋の空にシャンソン口ずさむ
ふれあいの真ん中孫がいてくれる
博学の人と親しくなっておく

鳥取県　高尾京

茗人忌　小さき芽も出る川やなぎ
名も顔も識られぬままに師を偲ぶ
病院に行く時だけの外出着

貝塚市　池田寿美子

渇水に雑草だけは生きている
グレープフルーツのいびつさも良し朝の卓
バリ島に富士そっくりが噴火する

大阪市　藤森小雅子

天然は料亭へゆく旬のもの
親馬鹿が何時まで続く妻の愚痴
向日葵の造花は太陽背にする

枚方市　森本節子

奥の院お膳に添えた初もみじ
浄衣つけ闇のなか数珠にぎりしめ（五日間の行にゆく）
線香の一本あかりが道しるべ　（　〃　）

寝屋川市　井上すみれ

A型で鰻丼やはり並が良い
百円均一　宝探しの気分にし
秋も暮れ担保の家を壊す音

枚方市　濱田良知

顔振れで答の出てるこの会議
特売場で紳士淑女の顔捨てる
脚光を浴びたが消せぬ脛の傷

和歌山県　藤井春子

嫁ぐ娘の甘えきいてる夜の月
肥る要素ばかりを好む秋日和
垣越えてとなりで夕顔すましてる

和歌山市　木村親跡

無精ひげどこも悪くはないのだが
遊ばれて見たい男がひとりいる
校長は寝耳に水と言ういじめ

仙台市　小寺九

秋風に汗ふかせてる運動場
たまに会う妻にうっすら頬の紅
暫くの別れに妻と握手する

鹿児島県　大山舞烏影

魚拓にもなれない雑魚でよく眠る
水不足ダムの底からトイレ跡
第九条はたけば弾がこぼれだす

静岡市　永倉柳華

ボランティア善意の汗は苦にならず
下手くそと言われ興奮して帰り
不揃いの芋にも個性持っている

静岡市　小木久子

ためらってばかり気弱な酔芙蓉
帰らない青春　軍歌　胸の奥
言い難い話から咳などをして

柏市　上鈴木春枝

赤い屋根目印にされ住宅地
ラブゲーム少し待たせてみるも策
微笑んで小さな嘘を軽く言う

松江市　松浦登志子

納得のいくまで洗う白い皿
逆転で奪った人もただの人
魚好き骨までしゃぶり満足し

宇部市　中村三良

わだかまり風呂に流して缶ビール
底辺の怒り分からぬ消費税
アウトセーフまだ人生に借りがある

茨木市　島元ふみ

いつまでも翔んでる母と思ってる
金婚を映す鏡になりました
鏡台に向うとお出かけかと聞かれ

割勘の端数でもめる飲み仲間
お人好し二つ返事でする保証
一張羅がちょっと気になる空模様

河内長野市　大西文次

私の地図がにわかに動き出す
ユーモアの通じぬ人がいて疲れ
ごまかさず生き裕福に遠くいる

和歌山市　森口美羽

長電話切るきっかけがつかめない
父と息子が同じ仕草で飲んでいる
この世では答えはでないものらしい

八尾市　村上剛治

団欒を妻を通して成りたたす
有能とクリーンの同居は難しい
ふと漏らす昔の恋を娘が笑う

大宮市　新井圭二

そしてまたぽろぽろぽろと萩の花
楽しみは一坪ほどの庭いじり
うるさいが無くてはならぬうちのひと

島根県　菅田かつ子

田舎町にも名水売り出され
どの顔もこどもに返った運動会
いい訳が下手なとこだけ褒められる

島根県　松本聖子

丹精をほめられている菊の出来
廃屋の庭に今年も曼珠沙華
来年の夢語り合う娘を中に

島根県　三代朝子

小菊挿す亡母の仕種になっている
嬉しさを体いっぱい御振袖
幼児の握り拳にある未来

岡山県　国米きくゑ

牛乳風呂クレオパトラの気分です
あたしでは通じぬ人が受話器とる
灯がゆれる亡夫が応えてくれている

羽曳野市　芦田絢子

新幹線一級河川の名が読める
こつこつと愛のメニューの腕冴える
楢山にちょっと早いと快気祝

羽曳野市　西村りつえ

倒れたらとつくづく思う金を貯め
サービス最高二度びっくりの請求書
恍惚の叔母メルヘンに来て遊ぶ

松山市　丹下美津子

遠雷や今日も帰らぬ猫を恋う
いいじゃないの幸せならばワンルーム
てまり唄すっかり消えた裏通り

愛媛県　久保良子

唐津市　岩崎　實

青柿の一つ落ちたる如く逝き
すいすいと二連とんぼがきてとまり
米粒の如く白萩散りこぼれ

出雲市　中村　トク子

九十になっても老父ペダル踏む
まだ暑いしぶとく残暑つづきます
朝つゆにぬれた稲穂の重たそう

寝屋川市　北岡　波留吉

病床へ疎遠の友が千羽鶴
寝たきりの姑に見せたい遠花火
大切な妻に気兼ねの一人旅

高槻市　小林　一閑

パチンコとたこ焼き人気衰えず
ＰＫＯよそが帰ったあとへ行く
松茸と言うたべものがありました

羽曳野市　酒井　一壺

その席に座る器に遠くいる
家旅には言えぬ愚痴あり縄のれん
嫉妬する女はきっと化粧する

札幌市　三浦　強一

ポケベルが鳴ると乱れる蟻の列
影武者の意地は鎧のまま柩
年金生活シナリオ少し書き直す

香川県　田中　ふみ

時と場合　金のあるよな顔もする
愛想づかしされるの厭で文句なし
胸張って腰を伸ばせと夫は言う

羽曳野市　麻野　幽玄

酒呑まぬ男が知って居た穴場
呼び止めて五時から男追って来る
よかったと言える出逢いにして別れ

神戸市　向井　泰子

朝顔の種の袋も宝物
萩の花　女二人の立話
老いてなお働くモップに力こめ

芦別市　斎藤　房子

星の降る里で美談をひとつ買い
封切ればほんのり香る愛の彩
つぎはぎの記憶肴に酌み交わす

熊本県　高野　宵草

早起きをしようと早寝したけれど
片付ける昔の本を読みふけり
車捨てて時間がゆっくり流れ出し

（前月分）　静岡市　松下　正枝

この人もお墓参りか花を持ち
星同士話しているような空
なつかしのただメロディーとなり軍歌

唐津市　野田旭恒

六道の辻で迷わぬ詩の道（義美さんの死を悼んで）
傘寿なお欠かさぬ庭と墓掃除
笛と鐘太鼓で動く唐津曳山

岡山県　土居ひでの

中秋の名月老母をお迎えに
どんぐりのころがる方へ七五三
蛇の目にも日傘にもなる老母の傘

兵庫県　酒井靖子

内乱を秘めて女の五十年
似たような過去で余生を温め合う
母だから憎まれ口を言っておく

姫路市　福島姫女

通学路の吊橋渡るへっぴり腰（十津川谷瀬吊橋）
月光のくまなく照らす畑や家
横笛の音色に月も覗き見る

熊本市　北川一進

役職になれば鞄も貴重品
特安の一番先に走るママ
頭髪も白く停年もう間近

大阪市　一本勇太

焼酎の色なき色に気を許し
方便でタクトは振らぬ秋の虫
辛口の彩におんなの射程距離

大阪市　今西静子

数珠もって貴方の声が聞きたい夜
しみじみと亡夫を思うこの空虚
目立たないひとがトントン出世する

和歌山市　吉村さち子

褒めはやされ花はひとりで散り急ぐ
あの人に逢えずに秋の彩になる
銀杏ひらひら自分ひとりの旅に出る

静岡市　宇佐美寿美

いつまでも眺めていたい星一つ
野仏の影が動いて風と座す
躓いてひとり静かに経を読み

河内長野市　木太久正一

敬老の日シルバーコーラスさわやかに
秋風に金木犀の自己主張
栗ご飯今年も秋を食べました

唐津市　山口ふさ子

十六夜の月に不覚の涙見せ
台風も雨も降らずで秋となり
師の送葬　雨一雫欲しい頃（浜本義美先生の死に臨んで）

天理市　飯田昇

大胆な言葉の奥にある虚栄
こだわりを捨てると踊る河内弁
虎の威を借りた言葉に座が白け

仏像の膝の丸さに程遠く
すり切れたポッケで夢をふくらませ
誕生日私のために花を買う

唐津市　市丸晴子

聴かされる忘れてくれと言う話
お喋りの洪水にあうクラス会
「この指とまれ」淋しい人よ夕茜

和歌山市　山根めぐみ

母をかこめば笑い声大きくなる
ユーモアの中でチラチラ野心見る
さて何から片付けようか孫帰る

岡山県　富坂志重

米騒動すんで静かな村になる
本論と別のところにいる心
萩桔梗めっきり減って村痩せる

愛媛県　中居善信

酔客を送って険しき妻の顔
口下手で俺の真意が伝わらず
インターンの教材となる検診日

高槻市　傍島克治

毎食後　電話に齧りつく娘
せかせかと腹ペコらしいハイヒール
さりげなくあたり見回すコンパクト

堺市　桜井荘次

飄々と風に吹かれて生きて見る
秋深し季節外れの風に逢う
朝の光に刈田の稲架こがね色

泉南市　坂根流水

開発を恨み辛みの杉花粉
上役になって言えない好き嫌い
娘も二十歳　叱る言葉に綾がつく

大和郡山市　榊原彗心

つかずとも離れていない夫婦仲
古いとてやっぱりおれに義理人情
他人から見れば呑気なあひるです

青森県　諏訪明雄

来た時からかえるかえると忙しない
手探りで地図にない道歩いてる
花の土　百貨店から買うてくる

八尾市　村上ミツ子

パンとコーヒー朝刊が来てワンセット
破りすて又拾いあげ読む手紙
おしゃべりと同じく筆もすべり過ぎ

高槻市　庄野澄子

寄る年に故郷への道遠くなり
路地裏に心の通う話あり
散歩道見知らぬ人と会話する

兵庫県　安達厚

寝屋川市　瀧本　八十八

猫撫での声の甘さの持つ魔力
毎日が多忙で病そっぽ向く
貧乏で閑なしという多忙あり

大阪府　原　美恵子

頑固ねえと自分の意見押しつける
丁重にお断りするインターホン
リンゴ剝きながら受験の子にはっぱ

海南市　谷口　義男

妻の留守晩酌一本多く飲む
無茶言うて愛を探りに来る女
世襲までして立候補するうまい味

鳥取県　山内　芳江

それぞれが内緒で捨てたゴミの山
転んでも起きるダルマに睨まれる
焦点がやっと合い出す古希の坂

米子市　小塩　智加恵

親せきに医者が出来たが肛門科
ともするとおそろしい夢抱いている
ともすると口紅忘れ歩いてる

兵庫県　西井　つや子

この悩み洗うせっけん探してる
点しては消してひとりの灯を守る
トンネルの中でよい句を考える

高槻市　執行　稲子

命綱なしに宇宙遊泳する闘志
取り急ぎといつも書いてる筆不精
一灯をめざしてつかむ慈悲の顔
少しはで承知で着てる秋祭り

有田市　生馬　芙美子

いろいろとあって人生捨て難し
こん畜生嫌な奴だが役に立つ
子等遠く老母ひとりが路地住い
新婚の貌も調度もピッカピカ

広島市　中村　要

嫁の言うことは素直に聞く息子
おしめほす隣に孫の出来たらし
ゆりかごのバスのゆれにも花一つ
漬物にひと味違う老母の味

吹田市　西岡　豊

彼岸会に不幸を詫びる花手桶
ぼんやりとしているふりの思いやり
野の花をつんでゆとりの床の籠
漬物を食べさすような京茶漬

大阪市　中田　あい子

兵庫県　中野　とよ子

静岡市　増田　扶美

大阪市　川原　章久

蟹はさみはさむ執念置いて逃げ
停年も十年経てば忘れられ
岸和田市　亀井皎月

淡淡とサバの頭を落してる
生造り鯛の目玉ににらまれる
唐津市　松本圭一

演じきりピエロへ孤独つきまとい
二人なら何とか越せる橋がある
砂川市　武田正美

淋しくてそして電話をかけまくり
偏差値で母の頭は真っ白け
東京都　松本冬虻

紙と筆　楽しく遊ぶ老いの春
寄り添って濡れた翼に秋の風
出雲市　川島和歌子

京都弁一度も聞かぬ京の旅
旧住居訪えば秋風吹くばかり
鳥取市　近藤秋星

ころび出た言葉にはっと息をのむ
山ほどの恩返せぬまま姑は逝く
岡山市　山磨行子

大阪は洒落で上司をこき下ろし
匂ないけど松茸買えまへん
大阪市　平井露芳

石の角とれて流れ速くなり
丸い輪を描きたく人に負けておく
出雲市　園山かおる

どうもまた人が好すぎる利用され
人妻と二人診察室で待つ
橿原市　西本保夫

今さらに米一粒を拾うなり
余生とや我が身を漬ける色溶かす
兵庫県　倉垣恵美

市場籠持った先生主婦の顔
成績のよくない子だが元気よい
十和田市　阿部喜久江

近道をしたが途中で犬に会い
デパートで見ているだけと見てまわり
東京都　清原悦子

声おとして来る話に落ちつかぬ
茶漬さらさらと弁解などしない
大阪市　三浦千津子

孫帰省つかえた話に日が足らず
講演会少年何か掴んで来
熊本県　増田一乗

腕組みをすれば上向く癖がある
バッジ着けていれば失業者に見えぬ
熊本市　遠山夏生

池田市　木村一笛

手探りの記憶をたどるもどかしさ
後家さんに世話焼き過ぎ真っ黒焦げ

高槻市　乙倉武史

相槌も金がからむと噛み合わぬ
絵心を誘う秘境をフルムーン

寝屋川市　籠島恵子

頷いてほしくて妻をそばに置き
母の祈りがきいてるように今日も無事

藤井寺市　楠昭子

相槌を打たぬ告げ口拍子抜け
思い込み強くチョンボしてしまい

八尾市　平川幸枝

母の愛重いと思った時がある
山川と深夜帰宅の合言葉

吹田市　馬渕光子

旅帰り猫の迎えのぎこちなさ
わけもなく叱った後の面映ゆさ

羽曳野市　安芸田泰子

言いそびれた言葉を呑んだ胃が重い
天高し体重計が恐くなる

河内長野市　水谷笙子

二次会へ行くスタミナは取っておく
吊皮の一つ向うは美人らし

香川県　高橋たみ

金魚は祭りどころでないみたい
一日の終りブランコこいでいる

綾部市　藤田芳郎

ある事情あって施設の粉ミルク（娘乳児院に働く）
娘になつくこの児の母は未決囚

鳥取市　田中友子

明るさで受験の尻を押してやり
見られてはいないつもりの大あくび

岡山県　福原悦子

決心は父の歩幅に合せとく
おだやかに話を裁く老いの知恵

米子市　永井三津子

同窓会　過去が楽しく甦る
餓えている心に種を蒔いてみる

静岡市　柳沢たま

見栄っ張り寂しいおんなかも知れず
寄り道をしましたトイレ借りただけ

島根県　武島ちよえ

途中から昔話に身が入り
秋の天ベルトの穴が伸びている

松江市　佐野木みえ

アベックに少し遅れて歩いてる
佗助の人知れず咲くいじらしさ

真っ白な紙に自由と書いてみる　静岡市　松下正枝

セットした夜は眠りが浅くなる　河内長野市　妹背尽呂久

露天風呂月を掬いて遊ぶなり

見たことがある文章のラブレター　広島県　森川抜智

補聴器を買えと老妻せき立てる

子供らの空想豊かな句に負ける　河内長野市　橋本弘美

お隣へ挨拶に行くゴム風船

だんまりを押し通してる昼の月　堺市　吉本菁風

人が見ているから拾う犬の糞

ついて来た女　雲丹トロばかり食べ　出雲市　荒木恵美子

かげながら演出しよう馬の足

孫も去り無風の部屋に二人おり　出雲市　西尾和子

もぎたての秋が届いた絵の手紙

夏の海　歓声高く聞こえたよ　沖縄県　杉谷一栄

青春譜　心斎橋にある魅力

ワイシャツを出した日名前覚えられ

自販機に小銭を払う小さな手　千葉県　大川晩翠

山登る犬をおともに背負籠　出雲市　浜圭三

救急車近くで止る熱帯夜

鶏頭が一列横隊に並んでる　鳥取県　権代康女

外孫が走ったビデオ持って来る

子供等の澄んだ瞳にある平和　米子市　池尾保子

厳しくはあったが父は光ってた

秋深し隣の柿もよく実る　徳島県　安宅美代子

その事はまかせて置けと箸を割る

死火山のままではわしは浮かばれん　和歌山県　中後清史

こんないい知恵があとから湧いてくる

酔うほどに天下が俺のものになる　姫路市　小井里兆

秋の大気は心も豊かにする

暮れ早い秋の黄昏忙しない　尼崎市　松下弘

天平から奈良の大仏眠らずに

酔いざめの水に浮いてる青い顔

八尾市　井上しのぶ

上に空　下には土がない貸家
そこだけはみんな笑顔の授乳室

八尾市　生嶋ますみ

蟻のように荷物を抱いて地下を行く
さまざまな寝顔がゆれて旅のバス

大阪市　尾崎黄紅

冗談は顔だけそうかなと思い
呑んできた目ですと老妻の目が光る

富田林市　欄智久

夜もすがら越中おはら風の盆
ためらわず松茸買って行った女

大阪市　乾哲静

ボランティア夫婦の絆認め合い
通天閣見上げて戦後振り返る

豊中市　みきわきみ

塗り立ての柵を立てたが犬の奴
坪庭にふさわしきをと俺の句碑

羽曳野市　徳山みつこ

気にかけているのにノート開けない
秋の夜ぬくいお茶でもいかがです

富田林市　山原昭水

この角に駄菓子屋あった少年期
秋日和深呼吸する森の中

明石市　小川酔月

妻やんで独りぼっちの膳につく
洗濯の白さが秋の風にゆれ

和歌山県　村中悦男

願いごと多いから鈴長く振る
自分史は目次通りに進まない

岡山県　清水悠貴女

飽食の猫がほんとによく眠る
幸せな昔ばなしを持つ帽子

鳥取県　橋谷静江

剪定をたのまれ退屈しない父
血縁へ一目でわかる笑顔見る（ブラジルから来日の従姉妹に会う）

鳥取市　津村静枝

世渡りは上手じゃないが人が好き
欲得は抜きでひと肌脱いでやり

島根県　福間博利

さばさばとしたライバルが好きになり
うとうととうつろな夢を追うていた

島根県　安部美恵女

孫可愛い気配りをする旅土産
凶作の分まで取れた米の出来

出雲市　加藤スズコ

花莫蓙に次々と出る手弁当
青空に心地良く鳴るコンバイン

のんびりと予定ない日の大掃除　静岡市　片平静代

近道は舗装してない今日は雨　静岡市　浅子まつゑ

心まで老いたくはない句を作る

来客で予定を変える今日の昼　鳥取県　武田照女

騒いでる間は親も理解する

思い出が各駅停車して通る　鳥取市　田賀八千代

日陰から覗く舞台はきれいすぎ

影武者が闇で主役を演じきる　岡山県　福原辰江

乾杯の涙は呑んで娘を送る

方円に従う水でいる余生　泉佐野市　大工静子

秋彼岸日傘くるくる顔かくす

一番機かすかな音で飛び立った（関空）　兵庫県　玉田三重

魂の底まで探るコップ酒

案じてたわりに座れた帰省客　鳥取県　橋本孝原

古希過ぎて小説すこしわかりだす

想いだけ深く実らぬ恋だった　八尾市　與田明

条件が揃ってもまだ金こわい

腹痛に酷なトイレの掃除中　大阪市　中井正秀

妻が逝きやめた煙草を喫うている

妻が逝きじゃが芋の芽にまた涙　大阪市　宮本信幸

紹介にいたしかゆしの文句あり

幕切れになって議論がはずみだし　岸和田市　井齋一齋

トンネルの向こう見抜けぬ店じまい

言い訳の舌がもつれる朝帰り　島根県　岩田三和

青空市　好物交換えがおの日

お隣の集落へゆく遠まわり　鳥取県　原みさを

澄んだ目に性善説をうたがわず

おみやげに母が押し込む畑のもの　和歌山県　吉田武治

古里で友の握手にある温み

やんわりと痛いとこ突く憎い奴　寝屋川市　坂上高栄

焦ったら負けだここらで深呼吸

遠く住む故郷が招く盆の月

賞味期限確かめてから買う土産　唐津市　浜本治幸

台風を期待するのは雨量だけ　唐津市　福島紀一

句集「残されたいのち」残して君は昇天す

古本屋漫画でうまる時代相　唐津市　入江喜久亭

敬老の日にプレゼント万歩計

ジョークとは知りつ優しく褒めてやる　鳥取県　岸本宏章

ときどきはいのちを洗う旅に出る

秋風が立ってコーヒーうまくなり　出雲市　林悦子

ブランドの靴のサイズに足合わせ

足美人昔の思い今いずこ　姫路市　服部一典

渇水へ稲妻だけの空振へ

何よりも一番怖い妻無言　大阪市　大河未佐子

大原女の露の売声花ぐるま

石に問い石に問われる竜安寺　和歌山県　上岡正直

それ行けと牛歩で生んだ消費税

いやだけど群れに留まる痩我慢

朝刊を配るバイクで夜が明ける　箕面市　木村天弘

それぞれに一言居士の投書欄　大阪市　池田一男

目が合って金貸したこと思い出し

日めくりもめっきり痩せて秋深し　米子市　木村春枝

筋書きの読めぬ女の不幸せ

朝霜に犬が連れ出す散歩道　静岡市　三浦つね

一言が善意に取られてうれしいね

池の鯉人間世界同じだね　静岡市　佐藤次枝

うろ覚え近道行って遅刻する

再会に軍歌飛び出す法事の間　静岡市　中西雅

窓明かり遠花火聞く夜のしじま

よごれてる造花がゆれるいやなバス　河内長野市　印藤智子

食事してああ極楽と横になる

急な用手足に号令かけてから　寝屋川市　太田とし子

浄蓮の滝で悟った鮎を食う（伊豆の旅から）

お隣が三階建にする悩み

大阪市　澤田和重

ユーモアが分からないのも面白い
ユーモアで軽く牽制球を投げ

鳥取県　岩崎みさ江

転がっている壺だって起きたかろう
おふくろと呼ばれてみたい私の夢

鳥取県　中西智恵子

大皿へ秋の味覚が盛り沢山
七輪で焼いたサンマは秋を呼ぶ

泉佐野市　河原崎礼子

離陸する機影に旅情かきたてる
説明はわかるが手足動かない

松江市　浦辺静江

選手団笑顔の波の弾む足
日暮れ時手振で話す顔二つ

鳥取市　杉本孝男

青春は夢の構図へいのち賭け
土笛に歴史を秘めた音色冴え

羽曳野市　山本たけし

秋日和泣いて笑って娘は嫁ぐ
四十年妻の好物まだ知らず

東大阪市　松山隆

音もなく潮引き貝の背が無心
曼珠沙華　十人十色の懐古あり

交野市　坂口日出子

満月を月見団子と葡萄酒で
画きやすい村山総理を似顔絵に

鳥取市　谷口侑里

制服を脱いで真直ぐ縄のれん
くせのない男で何故か物足りぬ

和歌山県　福田和子

予期しない出来事何時か多くなる
働いた父の記録が破れない

鳥取県　藤山弘子

映画館で昔デートをした記憶
ラーメンが飯より好きでおかわりも

和歌山市　和田美寿子

雨傘も雨があがればすぐ日傘
嫁姑なじんで親娘ときめている

（前月分）久留米市　鶴久百万両

きみに逢うのは野菜ジュースを飲んでから
愛の詩を贈りつづけて挙式待つ
三角波の怖さを　魔女はまだ知らぬ
死ぬなんて言うなよ　鬼に嗤われる

このたび選者を交替することとなりました。十年余の長いお付合い有難うございました。川柳は私の命です。いつまでも変わらぬご厚情によって、老骨に鞭打って下さることをお願いしてお礼といたします。

黒川　紫香

—水煙抄

秀句鑑賞

—11月号から

福井桂香

晴ればれと結ぶ佳き日の袋帯

山本すみ

晴天に恵まれた大安吉日です。この日のために取っておきの帯をキュッと締め、えも言われぬ歓びに包まれたことでしょう

半分も聞かずに走る太郎冠者

藤井高子

単なる慌て者ではすませない何かが、この句にはあります。この太郎冠者は、きっと主体性のある行動派なのかもしれません。

花はそう思っていない花言葉

尾崎黄紅

薔薇は情熱、梅は貞節だなんて、人間が決めたこと、当の花達は知る由もないのです。

生意気な奴だ頼りになる奴だ

朝倉大柏

相手の本質を見極めながら猶かつ寛大に受け入れている句。ユーモアセンス抜群です。

消毒の手に初孫の柔らかさ

木下道子

おぼつかない手つきで新生児を抱いた時の不安と喜びの入り交じった感情が窺えます。五句共に、お幸せそうな御一家が目に浮かびます。

貯金箱　時々振って確かめる

古久保和子

誰しも経験することながら、さて、このように句にされてみると、箱を振りながら中味の確かな手応えを感じている作者のにんまりとした笑顔と音さえも伝わってきて愉快です。

旅楽し　私に帰る家がある

長浜澄子

大根の白さよ平和続いてる

流奈美子

戦争がないというだけが、平和とは言えません。真っ白な心で人権の大切さを考えたいものです。感性の勝れた句に出合いました。

独楽コトリ地球のとまる日のように

石川勝

読んでいて〝ドキッ〟といたしました。独楽の止まる瞬間を捉えて、地球環境の破壊を揶揄されたのではないでしょうか。作者自身も、きっと青くて素晴らしい地球が回り続けることを望んでいるはずです。

言い勝って大根おろしの辛いこと

倉垣恵美

大根おろしの辛さに託して自分自身を見詰め直している人柄に感服いたします。自分自身が見える人には、花の美しさも空の碧さも他人の長所も分かるように思えます。

主人主婦あるじが二人居て平和

江原秀夫

いやはや、日本も、こういう時代に変ってきました。お優しいご主人様で、さぞや奥様もお仕合せでしょう。羨ましい限りです。

玉葱の訳も聞かずに泣かされる

吉村さち子

玉葱にも、それなりの言い分はあるでしょうに、被害者意識でしか物事を見ない人間のエゴが垣間見え、お上手な表現です。

愛に飢え一日愛の項を引く

宮崎菜月

読者に様々な鑑賞をさせてくれる句です。辞書を友だちに、生涯学習したいものです。

大阪を人種が違うように言う

吉本菁風

他人さまが何と言おうと、言わせて置こう。「よっしゃ、まかしとき。負けへんで大阪！」

丁寧に夫の小言かみ砕く

杉山精子

新選者のことば

「水煙抄」のグラウンドいっぱい、大きな花・小さな花で多彩に飾って下さるようお願いします。

私なりの方針で

高杉鬼遊

「水煙抄」の選者を担当することになりました。川柳塔誌の大きな柱の一本です。大役を担う器ではありませんが、私なりの方針をもって、全力を尽す覚悟でおります。

百人の作者には百の個性、百人の選者にも百の個性があってしかるべきです。勿論、前任者の大先輩、黒川紫香氏の温厚な御選と大きく変わるやも知れませんが、よい作品を見落とさないよう選んで参ります。

これを機会に、今まで役句された方々は勿論のこと、新しい方のご参加を切望いたします。限られた頁数なので厳選になり、投句者同士の激しい戦いの場となります。

五句組も二句組も、作品によって大きく変わる可能性があります。今まで以上の意欲でぶつかって下さるよう期待いたします。

「渺湖抄」を担当

小出智子

平成七年度から「銀河系」を「渺湖抄」と改めまして担当させて頂くことになりました。「愛染帖」「銀河系」のどちらも、男性の選者であっただけに、物足りなさを感じられるのではないかと、非常に責任を感じています。気持を引き締めて、精進してまいりたいと思っています。

「渺湖抄」とは「渺々たる」という言葉がありますように、広くて果てしない思いと、満々と水を湛えて静かな湖への憧れを私の願いとして重ねました。

何分にも浅学菲才の身でございます。選をさせていただくについては、ご意見などお聞かせいただければ幸いでございます。「銀河系」より頁数が一頁少なく三頁になりますので、よりきびしいことになるかと思いますが、折々の切なる思いをご投句くださいますようお願い申し上げます。

等身大の私で選を

西出楓楽

いま、わくわくしています。二人の大先輩が見事咲かせ続け、芳香を放って来られた「茴香の花」。その選を主幹からおおせつかった時、正直言ってあまりの重さに押しつぶされそうでした。

そもそも川柳を作るのは、私が私であるためなのです。作句も選も自分と真摯に向い合うことについては、同じ次元にあると言えます。ならば、自分自身を偽ることなく、等身大の私で選をさせてもらえばいい、と考えるに至りました。すると肩の力が抜け、同時に選をする喜びがふつふつ湧いてきました。

これから、どんないい句に出会えるのでしょう。胸は期待ではち切れんばかりです。

そして、この欄をこれまで同様に盛り上げて下さいますよう、皆様の暖かいご支援を切にお願い申し上げます。

銀河系

河内天笑選

青森市　工藤甲吉

気がつけば我が身二つは無かりけり
このようにして骨壺に我も又
長生きをして一病も有難し

大阪市　藤森小雅子

毒舌を軽く躱してきくトーク
豪邸拝見何と奇麗なフライパン
地下を掘るクレーン秋の天を突く

鳥取県　新家完司

炎天のネズミトリ機にひっかかる
ガウディに負けてはいない蜘蛛の家
マツバガニおやつに食べた繰り言よ

鳥取県　谷口次男

女房の機嫌よいのも不気味なり
黒幕を暴きに行ってそれっきり
少しずつ右へ旋回四十過ぎ

西宮市　西口いわゑ

往復の効かない人の道のりだ
何となく華やかになる大ジョッキ

米子市　林瑞枝

薪割って夫はひととき少年に
屈託ない笑いで柿の実が熟す

大阪市　藤田頂留子

駅前の羊と見てか布教され
義士伝に新解釈の吉良びいき

横浜市　菱田満秋

黙祷に始まる会は歳をとり
他人の身になれとは無理なことを言う

鳥取県　鈴木公弘

友だちがいるかも知れぬ塾へ行く
毎日がたのしい嘘のくりかえし

鳥取県　乾隆風

奇麗ごと言うから鬼の面かぶる
猫の目が光っているぞつまみ食い

宿毛市　岡村千鳥

玄関で行ってらっしゃいませのキス
肩書きへゴマする人に距離を置く

鳥取県　田村きみ子

極楽と思う三度の飯を盛る
新人を叱って困る更年期

堺市　神原文

てのひらにのったふりしてのせていた
うっかりとうなずき穴にはまり込む

米子市　光井玲子

土壇場で味方についてきた他人
陰日向ないけど汽車に乗りおくれ

和歌山市　森口美羽

ひまになることが怖くてひた走る
底抜けの明るさに来る俄雨

鳥取市　小谷美ッ千

満天の夜空に伸びていく梯子
少しずつ貴方の愛を貯金する

熊本県　高野宵草

底辺で生活し減税ひびかない
計算に強く借金またつくり

大阪市　一本勇太

一長一短　新人類を敵にせず
終章を踊るいのちの彩を足す

和歌山市　青枝鉄治

いろはから仕込んだ部下に整理され
切り札を確かめ反旗振りかざす

姫路市　大原葉香

イヤリングつけて女を売りに出る
その嘘にのせられ女舞いつづけ

鳥取県　さえきやえ

百姓は捨てまい実る年もある
わたしには通らぬウソをついてゆく

大阪市　本間満津子

なんにも欲しい物がないとはつまらんな
豪快に芒を活けてものおもう

米子市　茂理高代

ご先祖の土地上がったり下がったり

岡山県　矢内寿恵子

羽曳野市　吉川寿美
嘘に嘘重ねて角が曲がれない

倉敷市　田辺炙六
民宿のなさけが生きている煮つけ

豊中市　石川勝
命がけのジャンケンだった若かった

米子市　鹿島繭
脳味噌の中にラムネ色の童話

和歌山市　木村初子
へそくりがもう少しありまだ死ねぬ

香川県　新川マサヱ
いたわりの一言うれしまた励む

福岡県　本田忠男
魚拓には昔の川が生きている

米子市　澤田千春
嬉しい日地平線までつっ走る

東大阪市　松山隆
小細工を重ね本音がはみ出した

今治市　渡邊伊津志
ユーモアが好きで振り込む調味料

東大阪市　今岡貞人
天と地と人の恵みを享けて喜寿

岡山県　江口有一朗
おいみんな出てこい月が美しい

姫路市　小井里兆
並行車見れば抜きたくなる渇き

倉吉市　野口節子
手のとどく位置にリンゴが熟れている

鳥取県　山内芳江
素人の焼いた茶碗がよく喋る

寝屋川市　平松かすみ
病院を抜け居酒屋にいるパジャマ

高槻市　傍島克治
そやけどねからの立場が逆転す

寝屋川市　坂上高栄
ばあちゃんのへそくりも出たマイホーム

今治市　矢野佳雲
逢いたいと書くと涙がこぼれそう

藤井寺市　高田美代子
繕っておこう人魚を掬う網

米子市　木村富美子
制服を着て制服の顔になり

大阪市　北勝美
良心が縄一本を越えさせず

黒石市　相馬一花
電卓を叩き赤字を呻く喪主

大阪市　板東倫子
大国や馬軍団やら魚軍団

青森市　漆戸凡々子
丸腰の派遣に千人針思う

奈良市　米田恭昌
それ以上化けるの無理と言う鏡

羽曳野市　徳山みつこ
疑わしきは罰せよ　政治家の場合

静岡市　小木久子
うっかりと容態言えば薬ふえ

大阪市　池田一男
道で会う米屋にこにこ話しかけ

鳥取市　前田一枝
わたくしの選った議員の野次っぷり

守口市　森川まさお
引退をしてから会社憎うなり

米子市　小塩智加恵
堅実な妻の財布の小銭鳴る

鹿児島県　大山舞烏影
若いぞと自慢する分老けたのさ

寝屋川市　太田とし子
群衆という鎧の中にいる弱者

米子市　金山夕子
恋人ががんばって漕ぐがんばろう

弘前市　佐治千加子
全身で泣いて怒って幼妻

八戸市　島田昭治
遺書めいた日記つけたら妻怒り

鳥取市　春木圭一郎
結婚を機会に息子つき放す

岸和田市　古野ひで
エリートのクールを誤解する世間

鳥取市　杉本孝男
金持つと他人行儀がうまくなる

神戸市　向井泰子
大正生れ持ち歌一つ酒二合

鳥取県　土橋はるお
告げ口をされて良かった事もある

鳥取県　岩佐　みさ江
雑念を遠心力で振りはらう

寝屋川市　江口　度
地ひびきをたててはじまる象の恋

尼崎市　春城　武庫坊
冬の星座にオカリナの音を届かせる

八尾市　村上　ミツ子
先頭が転んで視界広くなり

今治市　渡辺　南奉
毒のある男の方が役に立つ

東京都　清原　悦子
難聴になったふりしてくれる姑

八尾市　高橋　夕花
もめごとが野山を越えてやってきた

茨木市　藤井　正雄
午前午後ネクタイ替える予定表

綾部市　藤田　芳郎
不惑過ぎても目移りが直らない

米子市　政岡　日枝子
無農薬虫も安心して食べる

大阪市　川原　章久
賢そうで抜けた女が可愛らし

広島市　流　奈美子
今日ひとついいことがあり乾杯す

兵庫県　玉田　三重
ふところは寒いが母は太っ腹

枚方市　前　たもつ
どの薬にも毒になるとは書いてない

米子市　新　正子
口コミで行列がまたのびてきた

大阪市　津守　柳伸
ちっぽけな欲踏み台にして六十路

名古屋市　藤井　高子
手紙からポロリ哀しい嘘が落ち

川西市　松本　ただし
花の香のする想い出は残しとく

米子市　林　荒介
毒を吐いて他人さまを寄せ付けぬ

吹田市　山本　希久子
花嫁もお棺も運ぶリムジン車

和歌山市　堀畑　靖子
しゅうとめは他人と肝に銘じとく

岡山県　福原　悦子
真心に触れて少年走り出す

倉敷市　井上　富子
省略の効いた鋭いボールペン

大阪市　松尾　柳右子
百八つ鳴り止むまでの銭勘定

鳥取県　西川　和子
温室で我慢の知らぬ花が咲き

鳥取県　江原　とみお
結果どうあれうまいもの食べておく

河内長野市　植村　喜代
秋の虫より音のない帰り道

今治市　村上　久美子
娘に城を渡しカルチャー梯子する

尼崎市　春城　年代
まだ七十もう七十とせめぎ合い

寝屋川市　籠島　恵子
探しもの母がだまって出してくる

西宮市　奥田　みつ子
苦手だな相手もきっとそうだろう

大阪市　上田　柳影
新調の仏壇なぜかよそよそし

今治市　月原　宵明
母さんに手紙出したくなった月

茨木市　堀　良江
マルチーズひょいと抱かれて行く散歩

和歌山市　玉置　当代
後戻り決してしない蝸牛

鳥取県　上田　俊路
年金の範囲で調子よく生きる

川西市　氏林　洋敏
良いことがあったと顔に書いてある

島根県　岩田　三和
お食事がうまくなったら退院日

岸和田市　井齋　一齋
店員がしつこく追って客が逃げ

枚方市　海老池　洋
旅先の葉書よかったことばかり

香川県　木村　あきら
ハイテクの機器人間をこき使う

唐津市　久保　正剣
倖せな眉で総理を演じきる

鳥取県　石谷　美恵子
あのひとはきっとわたしを泣かせない

倉吉市　米田　幸子
母の顔見ると思わず出る本音

藤井寺市　中島　志洋
落葉焼き芋の匂に輪が出来る

旭川市　朝倉　大柏
ホテルよりぐっすり眠る四畳半

米子市　小西　雄々
口止めをされても女噂好き

八尾市　村上　剛治
忠告を素直に聞けるお人柄

寝屋川市　堀江　光子
しがらみの網もがくほどからみつき

大阪市　尾崎　黄紅
投稿は記念切手と決めている

鳥取県　権代　康女
おさしみとお肉の好きな孫が出来

札幌市　三浦　強一
高砂や覚えただけで謡曲やめ

砂川市　大橋　政良
窓際の椅子を見ている豆のつる

大阪府　籾山　隆
初孫に抱きぐせつけて帰る父

寝屋川市　岸野　あやめ
都市砂漠ペット屋で買う猫の砂

岸和田市　田中　文時
ツイてない宴会下戸が両隣

和歌山市　山田　高夫
残り火を大事に夫婦温め合う

唐津市　浜本　久仁於
戦争を知らぬ野営の賑やかさ

河内長野市　橋本　弘美
カタログで絹のパンティ買いました

河内長野市　水谷　笙子
どんぐりを拾い子供にふとかえる

広島市　中村　要
腹八分口も八分の健康法

弘前市　村田　善保
限りある生命明るい彩を選る

岡山県　山本　玉恵
こだわりをひとまず捨てて月を見る

兵庫県　北川　とみ子
相続に争う財もない茶漬け

池田市　岡本　吉太郎
体あたり人生うしろを振り向かず

米子市　白根　ふみ
正論がここぞと揺すっても無勢

弘前市　中山　雅城
台風が逸れて晩酌二本つく

泉佐野市　内田　倫子
虫の声夜毎上達して月夜

鳥取県　宇波屋　太郎
がん検で一年間を保証され

笠岡市　松本　忠三
婆さんをまだ奥さんと呼ばせてる

静岡市　沢田　きん
飲まないと安心出来ぬ薬づけ

安来市　木村　政子
順番に肩車した父の愛

和歌山市　吉村　さち子
あの歌はわたしが恋を知った頃

岡山県　池田　半仙
赤旗で土手を占領曼珠沙華

兵庫県　遠山　可住
円高を喜ぶ店と閉める店

広島市　田村　新造
不況風　河豚も冴えない袋ぜり

岸和田市　三輪　通彦
不況風吹いても気っ風よい援助

本稿で五年間に亘る「銀河系」の欄にひとまず区切りをつけ小出智子先生の「渺湖抄」にバトンタッチをさせていただくことになりました。「銀河系」へのご投稿を有難く感謝し、多くを教えていただいた事にも厚く御礼を申し上げます。リズムがよく、日常語で表わされ個性的見地で味わい深い句を選句の基本概念とさせていただきました。そして誤字やてにをはや送り仮名の間違い、中八等々に関しましてはその句の内容が良ければそれぞれを訂正して入選句とさせていただいた事を付記いたします。ひとりの作家の作品群にその人の「いろ」を生み出す事は「名句」を一句残すことより大切であると信じています。

女性コーナー

尚香の世

八木千代選

遺言の仮説などして　天井よ

東京都　山口　新子

その昔たいていの家の天井はそれは節穴の多い空間でしたが、若人の多くはその天井をキャンバスとして、明日の設計図を描きながら眠りにつきました。いわば平等にある夢の空間であったのです。私の場合は交互に二つの未来図を素描して、二者択一のなかで揺れながら迷い、諦めながら眠った記憶もあります。ところがこうして歳を寄せれば、いつしか自分の死後のことなど、財産の多少に拘らず、ああでもないこうでもないと愚かといえば愚か、とにかく言い残したいという気になります。面倒なことにこれがころころ変わるというのが人間の弱さでしょう。そこで仮説。天井は優しくてどのような絵でも好きなだけ描かせてくれます。「仮説」がひときわ生きて新子さんの心のゆれざまが伝わります。

俎の上で次の手考える

和歌山市　桜井　千秀

どうでしょう。このしたたかさは。俎上の鯉は観念して諦め切って煮るなり焼くなりという覚悟の程を見せていると思われていますが、それとて包丁の冴えしだいで、不本意な捌きにされては仮死のままでも、威圧するように尾を打たせます。人間なら手術台に乗せられた状態でしょうか。もっともこの場合は、麻酔をかけられ知覚を失うのですが。絶体絶命の状況にあっても念をこめて判断して、じたばたしないで次の手を考える。句の意味は誰にでも解るのですが、読み返すほどに迫力が増してきて、その先の手のどんでん返しのみごとさも窺えるというもの。そう思わせる明るさも感じられて、人間のいちばん大切な課題の生きるということの本質を考えさせてもらいました。となるとこの俎上の鯉、覚悟どころか必死でしょうね。そうなんですね。千秀さん。

母さんが重たい時は言いなさい　　和歌山市　古久保和子

何も変わらずいつもの橋を渡っている　　堺市　横田マリ子

生きてきた言葉の泥がこびりつく　　寝屋川市　宮崎　菜月

なに色の灰になるかはわからない　　藤井寺市　高田美代子

日々の景色に施しておくわが苦楽　　和歌山市　田中　輝子

気にかかる足跡いつも拭いている　　出雲市　園山多賀子

こけないように歩く右足左足　　神戸市　船津とみ子

気負わずに続けるものが効いてくる　　米子市　白根　ふみ

妻の見る夢は女の夢でなし　　寝屋川市　岸野あやめ

泣きながら巣籠りの薬身に合わす　　大阪市　北川　弘子

踏んでも踏んでも弱虫が棲みつく　　米子市　政岡日枝子

八十の夢見ごこちは霧のなか　　吹田市　栗谷　春子

ゆったりと激しく茶筅は作法通りに　　島根県　松本　文子

水のある風景人を落ち着かす　　西宮市　西口いわゑ

渡るには流石に深い河でした　　米子市　茂理　高代

草は紅葉に　いとしき人の忌を抜けて　　名古屋市　藤井　高子

春夏秋冬　順番どおり冬になる　　米子市　新　正子

どこにでも葉っぱが落ちている秋だ　　和歌山市　木本　朱夏

私を消せばわたしが生きてくる　　羽曳野市　芦田　絢子

森陰へ私も息をつきに行く　　米子市　足立由美子

アンテナ低く平凡に生きている　　岡山県　清水悠貴女

あるがままにあるがままにと言い聞かす　　西宮市　奥田みつ子

それなりにガンバッテルと自己批評　　和歌山市　堀畑　靖子

哀しみをユーモレスクの輪で包む　　和歌山市　福井　桂香

この旅を終えたら句読点を打つ　　米子市　青戸　田鶴

冬陽射す画廊のハシゴでもするか　　大阪市　西出　楓楽

玄関の花去る人を見つめてる　　堺市　山本　半銭

軽すぎて足跡さえも残せない　　米子市　金山　夕子

種の無い果物ばかり秋を盛る　和歌山市　福本　英子
掌に帰ってくれる鳥を飼う　鳥取市　西原　艶子
風景が後へあとへと飛んでゆく　尼崎市　春城　年代
手ぶらだもん何でもすぐに摑めそう　大阪市　本間満津子
蜻蛉ひとつ他界の声を聞く如く　弘前市　佐治千加子
帳面が私になにか告げている　米子市　鹿島　繭
朝夕の挨拶　湖を涸らさない　鳥取市　小谷美ッ千
尾の先も未だ見せられぬ車間距離　和歌山県　小倉　アサ
人並の自負が重たい日もあって　和歌山市　榎原　公子
秋の水バイオリズムを取り戻す　西宮市　牧渕富喜子
たましいのやり場を探す本の虫　岡山県　山本　玉恵
一切を母は大きな壺に埋め　米子市　木村富美子
はきなれた靴が幸せ忘れがち　羽曳野市　吉川　寿美
亡母の匂くらしの匂　蕎麦の花　米子市　光井　玲子
節五つ柱としてはがた落ちだ　松江市　安食　友子
三角点めざしていまも自我の靴　和歌山県　岩本美智子
谷川をつたい迷路から抜けた　米子市　寺沢みど里
嘘言うに冬の花屋に知恵もらう　大阪市　渡部さと美
いつかは沈むちちの島みておこう　和歌山市　野々　圭子
パズルの目ひとつ解けずに出かけたり　寝屋川市　森　茜
清と濁分けてすっきりしたけれど　和歌山市　宮口　克子
古傷を笑って話すまでになり　米子市　石垣　花子
明け方に夢の一こま継いでいる　米子市　木村　春枝
釣り上げた魚が空へ翔びたがる　愛媛県　久保　良子
道草の道ぐさをして豊かなり　豊中市　辻川　慶子
慣れてない遊びに疲れ草むしり　西宮市　秋元　てる
肉眼で鬼の見分けがむずかしい　米子市　野坂　なみ
人差し指の指輪をはめる訳がある　和歌山市　吉村さち子
母の歴史が棚いっぱいに広がって　米子市　田中　亜弥
ふところへ嬉しい言葉眠らせる　鳥取県　石谷美恵子
台風一過三日月一つ忘れてく　青森県　福士　トキ
走っても消えぬ困った影法師　今治市　野村　京子
水盤の宇宙であそぶ花ことば　米子市　林　瑞枝
残り火のさっぱり燃えてこない鬱　鳥取市　植田　一京
顔を見てお話するという覚悟　寝屋川市　堀江　光子
陰干しの面が身の上語り出す　米子市　澤田　千春
火が欲しい心が死んでしまいます　大阪市　大河未佐子
道草の刹那せつなも灯が点る　弘前市　一戸　ツネ
枯れ葉踏む思いのたけを言いたくて　松江市　佐野木みえ
泥酔の父には父の訳があり　和歌山県　杉山　精子
意にそわぬ事のみ多く顔洗う　堺　市　高橋千万子
小休止ばかりわたしは兎年　鳥取県　羽津川公乃
自分史へ子らへの詫びを書いておこ　高槻市　小林紀美子
向き合えば当たり障りのないはなし　大阪市　津守　柳伸
霧深い朝に神々降りませり　出雲市　石倉芙佐子
掌を合わすこころ飯つぶ残さない　八尾市　宮西　弥生
成り行きにまかせておこう靴の泥　柏　市　上鈴木春枝
朝一杯の緑茶わたしを若くする　鳥取県　田村きみ子
たのしんで秘密を守る目が笑う　唐津市　浜本　ちよ

一年間みなさまの熱いご声援のお陰で、責を果たすことができました。有り難うございました。次号から西出楓楽さんの選になります。どうぞ変わらぬご支援をお願いします。

鐘

佐々木鳳笙選

山寺の留守はテープの鐘が鳴る　旋風
スピーチの順早鐘が鳴っている　南奉
鐘のない村でカラスと夕焼ける　公子
素人も百点つけた鐘三つ　タミ
除夜の鐘撞いて五体が引き締まる　みね
やり残すことかく多き除夜の鐘　強一
鐘の余韻大和の春を眠くする　勝美
名刹の鐘たっぷりと無人駅　四郎
鐘振った小使さんがいた母校　とし子
晩鐘の平和で地球包みたし　宵草
瞑目す鐘の余韻の消えるまで　有一朗
鐘の音がやさしく包む東山　愛論
鐘ついて欲な願いをあきらめる　蕗児
観光の寺は鐘にも稼がせる　晋
警鐘が地球の底から聞こえ出す　たもつ
再会に胸の早鐘抱きながら　たず子
鐘の音少うし萩がゆれたよう　杜的
せかせかと急いだりせぬ寺の鐘　英子
鐘一つ上司へ鳴らす度胸持つ　圭一郎
極楽に行けそう寺の鐘を撞く　凡々子
晩鐘に今日一日の鎖解く　良知
旅にきく鐘の由来のみな哀し　あずき

俳聖の八景を読む三井の鐘　高栄
晩鐘は五山にひびく京の街　忠雄
菩提寺の鐘で告白してしまう　シマ子
大砲にされず梵鐘生き延びる　鉄治
ノド自慢凝った衣裳で鐘一つ　喬水
鐘を打つ余韻仏の声を聞く　かおる
入相の鐘で打ち切る野良仕事　通彦
鐘の鳴る丘からあの娘嫁に来る　哲静
晩鐘の僧一幅の絵に溶ける　時弘
鐘の鳴る方へ傾く平和像　久仁於
恙なし亡母に聴かせる鐘ひとつ　芳郎
煩悩をまた書き換える除夜の鐘　花匠
善人のままでいたいと鐘を撞く　圭一
幸せを演出してるドアの鐘　晴子
佳
除夜の鐘ようようエプロン外す頃　あやめ
百八つ数えるうちに寝てしまい　洋
団体が着いたか鐘の鳴りやまず　あずき
寺のあと継ぐ子が朝の鐘をつく　佳雲
片付いた事にして聞く除夜の鐘　遊峰
人
三井の鐘水位が戻りほっとする　正雄
地
御所の屋根都の鐘を聞き分ける　芳郎
天
すれ違い夫婦に寺の鐘が鳴る　土橋螢
軸
撞く人の個性をもろに除夜の鐘

派手

桜井千秀選

人生の最良の日は派手で良い　権悟
サバ読んで派手に笑っている目尻　勇太
失敗を派手なジョークで煙にまく　彩子
臨時収入今夜は派手に使っちゃお　みね
Tシャツは派手目がよろし市場籠　杜的
美女独り派手な深海魚と暮らす　あずま
いくら派手着ても鏡は嘘言わぬ　喬水
居直って派手は承知の古希を行く　たず子
潮時と読んだか派手に泣いて見せ　芳郎
カニ料理わが家に少し派手すぎる　次男
先頭に立てば派手だと思われる　艶子
雨傘は少し派手目な方が良い　清美
一瞥をされネクタイを派手にする　螢
過疎の村派手に飾った蔦紅葉　佳雲
プレゼント義母には少し派手を選る　正子
派手な娘の所作がふんいき和らげる　一閑
四捨五入派手にふられたなと思う　美代子
派手な友笑い声にもある自信　みつこ
ペアルック派手に着こなす倦怠期　たもつ
派手なのがいて雰囲気をこわしそう　志重
派手でっせなんて言うたらおこられる　蕗児
佗しさを囲うおんなの派手作り　寿恵子

派手に旗振ればみんながついて来る　かおる
戎橋　派手なネオンにある気質　あずき
派手な子に育ち休まるときがない　旋風
役付きの名刺を派手に撒きちらす　よし津
派手を着て心の憂さを捨てに行く　玉恵
年下の男に合わす柄を選る　重人
派手というだけで悪女にされている　保州
水引きの派手さ程ではない中身　洋
女盛り派手もするさも心得る　たつみ
派手な主役でいつも毒矢の的になる　日枝子
金蔓をつかんだらしい派手に翔ぶ　鉄治
派手な場所外れポツンと辻易者　愛論
栄転の内示が派手にかけめぐる　雄々
年金の枠いっぱいに派手な彩　英子
派手な顔喜怒哀楽に忙しい　公子

佳

やじ馬が増えて喧嘩が派手になり　新造
派手に広げて孔雀よ君も淋しいか　富喜子
派手すぎて団地雀の餌になる　良子
身も心も寒くて派手な紅を選る　希久子
派手だった父の葬儀を派手にする　明水

人

派手好きの客をもてなす蒔絵皿　二南

地

夫婦して派手を競って二度童子　ただし

天

風は多弁で派手に噂をまきちらす　吉川寿美

軸

声色が派手で秘密が洩れやすい

つかむ

木村あきら選

つかみどりした手がやはり小さすぎ　悦子
荒波を越えてチッチャな夢掴む　くに子
恥捨てていっぱい掴むつかみどり　よしみ
金運をつかむ木彫の像を買う　英壬子
「グー」の音もだせぬ現場を掴まれる　義男
だまされた滓つかんだと仲がよい　芳郎
うまいこと心をつかむ贈り物　狸村
つかんだら二度とはなさぬ豆のつる　佳雲
つかむのに骨が折れます池の月　虹汀
軽口は叩くが尻尾つかませず　良知
夢をつかんだままで女は逝くだろう　公子
カブト町虹をつかみに来た男　新造
花房をつかんで蜂は蜜に酔う　晴子
つかむだけならロボットも上手です　南奉
つかんだらハッキリ指紋つけて置く　しげお
屈伸の指がつかんだ昼の月　宵明
主義曲げても掴んだ椅子は離さない　正剣
サイコロを掴むそれから組むプラン　四郎
雇ったが掴みどころのない男　白光子
幸せをつかみたいから掌を洗う　芳水
火傷した日は忘れない鍋ツカミ　たず子
スキャンダル掴んだペンが弾みだす　清史
ジョーカーを掴んでからの不眠症　強一
表札を貧乏神がつかんでる　寿恵子
つかむものなくて浄土にまだ逝けぬ　高代
夢つかみたくて三つ四つ義理を捨て　マツエ
最後にはキット貴方の手を掴む　ひかり
あれこれと選って縁談カス掴む　よし津
釣銭を驚ヅカミする発車ベル　二南
上役の尻尾掴んで左遷され　凡々子
掴む気はないのに転げ込んだ運　晋
つかむのが下手な男の一本気　重人
つかんでたはずへ秋風忍びよる　英子
幸運を掴んでほしい流し雛　雄々
真相は掴めずコーヒー冷えてくる　杜的
倖せを掴む十指が奇麗すぎ　里兆
威張らせて手綱はしかと掴んどく　あやめ

佳

煩悩が欲を掴んで離さない　螢
空の旅大和心をつかまえる　正子
人脈を掴み損ねた堅い椅子　鉄治
札束を掴むと狂う羅針盤　あずま
ハート掴まれ身動きできない私　希久子

人

ケーキカット虚像掴んだかも知れぬ　日枝子

地

生き抜いて掴んでたのはこれっぽち　あずき

天

汗をする掌に幸運がつかめそう　菱田満秋

軸

雲つかむような話に乗せられる

初歩教室

題 ― 山

吉岡美房

本欄では添削の説明を加えていませんが、これは、投句者全員の句を取り上げたいためです。添削の場合も出来るだけ句意を尊重しながら明解な句にしたり、無駄な表現の多い冗長な句を簡潔にしたり、句のリズムを整えたりしているものですので、意のある所を推察して勉強の一助にして頂けたら幸いです。それでは添削句から発表します。

富士の山きれいに見えて自慢する　ミツ子
（富士山の見えるところに住む自慢）

日本のどこにでもある富士の山　あずま
（富士のつく山が一杯ある日本）

お国自慢大山いちに指を折る　(中)弘　子
（お国自慢一に指折る伯耆富士）

夢でした富士登山にも行かず逝き　(古)正　子
（約束を果たさず逝った富士登山）

白山は光り輝やき神の山　文　子
（白山は神の山とや光満つ）

白馬山孫の大事な記念石　(大)静　子
（白馬から記念の石と孫帰る）

恐山地蔵の袖に風ぐるま　ツ　ネ
（恐山地蔵に持たす風ぐるま）

雲海の香具山神話に誘い込み　克　治
（香具山に霧立ち万葉人に会う）

信州で見る山なぜか違ってる　辰　男
（見渡して信濃の山に魅せられる）

山気澄む一夜の枕爽やかに　姫　女
（山気澄み旅の一夜は爽やかに）

山黒く夕日茜の空に映え　タ　ミ
（大空を茜に染めて山暮れる）

山の峰下界小さく視野開き　隆
（頂上で下界の暮し低く見る）

山見れば何故か「ヤッホー」呼んでいる　三重子
（頂上で思わず叫んでいた歓喜）

山歩き森林浴で命のび　トミエ
（歳忘れ命をのばす山歩き）

大自然とっておきだよブナの山　幸　夫
（裏山にやっと残ったブナの山）

月さやか山黒々と横たわる　旭
（月が出て山黒々と浮き上がる）

山無言四季折りおりの衣更え　一　乗
（山無言四季折り折りの貌を持つ）

美しい山を登れば汗をかく　一　典
（頂上の汗はきらきら光持つ）

柿を見てバスゆっくりと山の道　瑠美子
（柿を干す家すれすれに山のバス）

山家では近所隣が見る家族　侑　里
（助け合い寄り添い山の村は過疎）

一人旅うき世を余所に山の宿　武　春
（山の宿憂き世のうさを忘れさせ）

ポチ連れて松茸山へ行くとする　(藤)弘　子
（心配な松茸山を一つ持つ）

祖父の山古墳五基あり斧入れず　半　畳
（古墳あり山に祖父から斧入れず）

父母が歩いた後に山が見え　宅
（三代で育てた山が捨てられぬ）

文字リンゴ愛という字に眠る山　幸　枝
（人間の愛がほしいと山眠る）

骨埋めるつもりで山を越えてゆく　八重子
（骨埋める覚悟で父祖の山守る）

山の唄歌えば山の顔になる　笑
（山の唄山で歌えば山の顔）

立山で雷鳥そばによいシーン　(坂)静　子
（アングルは雷鳥入れた山に佇つ）

花の山浮かれて一日蝶になる　志　重
（花の山わたしを蝶にしてくれる）

ハイウエー山あい削り幾何模様　ますみ
（ハイウエー山を削った幾何模様）

句碑静か句友眠れる山は秋　志華子
（友の句碑紅葉の山に包まれる）

人生の最後の山は川柳か　冬　虻
（川柳を最後の山にする余生）
七転び八起きして人生の山をこす　孝　原
（七転び八起き人生山を越え）
人生に山あり谷も這いあがる　孝　男
（人生に山があるから谷がある）
山一つ越えた家族に有る絆　三津子
（子等巣立ち夫婦の山を一つ越え）
山よりもでかい気持ちでいる私　美　羽
（山よりも大きな心人許す）
人生の山幾度も越えたやら　よしみ
（人生の節目節目の山を越え）
七合目まで来て靴紐しめなおす　忠　男
（登山靴紐締め直す七合目）
ふる里の山に向って疎遠詫び　宏　章
（ふるさとの山が思い出手繰り寄せ）
山は山故里の山なつかしい　美寿子
（故郷の山昔話をしてくれる）
傷心をいやせと里の山が待つ　彩　子
（傷心の私を癒す故郷の山）
山越せば急転直下秋となる　ふさ子
（頂上で最初の秋と会う紅葉）
山を見る古老の天気はよく当り　勝　巳
（山を見て母の天気はよく当り）
山彦と遊んだ思い出星の家　高　栄
（山彦と遊んだ故郷遠く住み）
山はずれしどろもどろの答案紙　㊤幸　子
（山はずれし答案用紙睨むのみ）
山男に惚れたばかりに寡婦である　ふゆ子
（惚れるなと言うがあこがれ山男）
山が誘うほぞかんだのにまた出かけ　義　子
（挑戦の二文字に生きる山男）
年金で人それぞれの山がある　黎之助
（年金の暮しで山も谷もあり）
捨て切れず不用の山が老いかこむ　美恵子
（捨て切れずもったいないの山が増え）
山ほどに恩をうけたが借りたまま　太　郎
（母の恩山ほどあって借りたまま）
山よりも高い恩など知らぬ　義　男
（山よりも高い恩など習てない）
ゴミの山やがて列島ゴミの下　一　壺
（列島をいつか呑み込むごみの山）
容赦なく削りとられて山暮れる　フク子
（容赦なく削った山にある謀反）
山盛りに三杯孫の食欲感　ミツオ
（山盛りで三杯孫がたのもしい）
つぎつぎと山切り刻み人が病む　しのぶ
（次々と山切り刻み地球病む）
灰皿を山盛りにして切り出せず　章　子
（灰皿を山にして無心切り出せず）

着想・表現ともに立派な句

引き返す勇気もあって山男　強　一
ロープウエー山は霧海に包まれる㊤静　子
Uターン故郷の山は温かい　絢　子
山を越す男を試す向い風　芳　水
絵のような山背景に母の墓　瑠美子
桂林の山にょっぽりとにょっぽりと　郁　子
里がえり山と昔の話する　君　江
交わし合う声温かい山男　友　子
山ほどの恩を返せず姑が逝く　行　子
山の神我が家で鎮座五十年　俊　一
木を切った山の怒りの水飢饉　君　枝
ポケットに遺品となった山の地図　さち子
六十路来て未踏の山に挑むもの　めぐみ
山頂に立って何だか偉くなり　三　重
ひと山いくら今日も得した気で帰り　勝　巳
慎重な妻の歩幅で山登る　半　畳
山彦の返らずなって二度の秋　淳　子
山越えて命羽搏く千羽鶴　碧
山小屋で秋刀魚のように詰め込まれ　りつえ
抱かれて山の高さに気がつかず　キヨエ

私の句

父母を恋い妻を偲べば山が哭く
潔い男に山はあたたかい

◇

題「**喜ぶ**」12月15日締切（2月号発表）

宛先　〒583　藤井寺市道明寺2丁目11―4
吉岡美房

毎月25日締切・30句以内厳守　編集部

川柳たけはら　時広　一路報

ワンちゃんと走って私風になる　中3 史子
あと一歩秋がそこまで来ています　中1 千枝
虹が消えて男と女歩き出す　蘭幸
紆余曲折耐えて忍んだ共白髪　静佳
裏方でよしコオロギの声を聞く　比呂子
洗い髪真白き風とたわむれる　喜久恵
地蔵さんてんから干しで暑かろう　ヤスエ
雲を追う髪型変えてみたくなる　栄恵
手抜きした髪で恋歌は唄わない　正宏
かごめかごめトンボの群に迷い込む　淑子
食たしか部分的には故障持つ　清水
五十年髪を残して行ったまま　勲
髪が生命手入れも楽し女です　夏喜
宮参り兼ねて両家の祝い膳　喜美子
夏バテもなくて熟女の日々多忙　汎美
こだわりは忘れて明日の風に会う　麻代
カード嫌いで四角四面に生きている　臣子
負けて勝つことも知ってる孫娘　寿枝
みとれてる若さみなぎる孫の顔　千年枝
打ち寄せる荒波孫は動かない　規代
古希越えて喜寿へ架けよう虹の橋　蝸牛
シルバーグレーよく似ているの過去の人　千里
寝たきりの視野にうつった虹の彩　一枝
故里の虹にまっすぐ逢いに行く　笑子
天国へ通じる虹を渡りたい　節夫
転んでも転んでも追う父の虹　静風
夢でいい裸足で渡る虹の橋　一路

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

陰口は止めよう雀話し合い　寿々子
お陰様今日も手足が動きます　てい子
炎天に大樹の陰はオアシスだ　恵子
陰ながら応援という公示前　天雀
陰日向ない父で汽車に乗りおくれ　玲子
あなたには陰に日なたに尽したい　紫布
なるべくなら陰気な素振りやめようね　のり子
老木の陰ですすく山椒の子　朗子
何はともあれ大樹の陰をすみかとす　富美子
陰武者の指図どおりに歩こうか　春枝
生きてゆく私の陰になった亡母　晶子
緑陰であそぶ樹の音水の音　瑞枝
ゆったりと大樹の陰でねむくなる　ゆき
我が身の陰を陽にさらすのも今だ　亜弥
陰にいては開いてくれぬ自動ドア　花子
陰干しの面が身の上語りだす　千春
長いこと物陰に息つめていた　繭
肩のあたりを目立たぬように押してやる　日枝子
物陰が明るくなって落ちつかぬ　夕子
ひまわりの陰には何も埋められぬ　荒介
山かげの向こう側では陽がいっぱい　保子
露草の陰から蟬が這い出した　千代

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

迷うてるうちに本命逃げて行き　欣史子
迷わずに卍字の道を秋日和　暁子
迷うだけ迷い選んだのが運命　あずき
結論を迫られ迷いあわてます　能子
サーブ権持ったとたんに迷い出す　シマ子
夏休み遊び上手な孫が来る　千枝子
焼香に遺族の知らぬ顔が来る　清芳
長男が甲子園に出て近所から　留吉
来客の目につく位置にある賞状　田実子
褒美など無視して子供我を通す　弘直
ご褒美の辞典立派でサボられず　光子

川柳東大阪　森下　愛論報

幸薄く淡い影だが灯をともし　隆
叱られた恩師の影がでかく見え　東雲
借景の塔が水面に影落とす　庸佑
美しい心で炭を焼いている　湖風
すったもんだの心の傷は消しました　章久
あじさいの心変わりを笑えるか　孤舟
鬼老いて背すじ心もまるくなる　恭昌
顔色を伺う心貧しき日　白洋
まゆに唾つけて聞いておく話題　恒明
水の話題今日も続いている残暑　信治
肩書が取れて話題の外にいる　柳宏子

思惑が外れ話題を変えました　真柳
探訪記読んで歩いて見たくなり　項留子
決心へ訪ねるしきい高すぎる　愛論
訪ね当てたら表札が変わってた　度
半世紀過ぎても恨むきのこ雲　太一
雲流る果てまで鬱を捨てに行き　文秋
富士山の雲は下から湧いてくる　晋吾

南大阪川柳会　金井文秋報

胸底に直接響かないお世辞　楓楽
靴紐をしっかりしめている意欲　重人
規定通りやれば他人に遅れとり　文秋
握らせて自己満足の袖の下　柳伸
規定破らず背かず生きて小市民　寿美
冗談を杓子定規が許さない　勝美
何故と聞く孫に冗談通じない　淳子
冗談が通じぬ母の座りダコ　萬的
不器用な恋は黙って手を握る　千里
耳くそにならぬ冗談心がけ　度
嫁がきてわが家の規定揺れている　凡子
褒め言葉効いたか意欲出はじめる　秋子
意欲さえ持てば伸びると言うてくれ　庸佑
守れない規定は棚に上げて置く　二南
親の手に汗握らせる参観日　悟郎
直接にぶつかり誤解だとわかり　頂留子
意欲などお金次第で出るもんや　東雲
それなりの幸を握って子は育つ　章久
直接に会えば気楽な社長です　志華子
ご不審は直接会うて話します　三男
意欲ある選手の言葉歯切れよい　シメ子
酒一本提げて直接談判に　トミ子
塾疲れ意欲の見えぬ通信簿　文江
人生の競争規定などはない　公一
冗談で痛いとこつく若い嫁　信博
怠け者遊ぶ意欲は旺盛で　智久
冗談にしては棘ある笑い顔　真砂
直接に逢うて話がはずみ出し　千梢
面会規定守ると病人淋しがり　久子
クーラーは規定でダメという福祉　直子

岩美川柳会　羽津川公乃報

エリートで来た俺　器不足する　孝原
両親の野望器に大き過ぎ　照女
こだわりの器タイ米盛って食べ　嘉津江
満ち足りて構図に花の種を蒔く　きみ子
イルカに聞いて水族館の構図練る　喜与志
人生の構図を風に破られる　隆風
資金には触れずでっかい構図描く　公乃
決まらない構図にヒント出してやる　芳江
人生にマンガの構図取り入れる　単車
謀略の構図へ鬼が手を伸ばす　孝男
ワイングラスに甘い構図が組んである　忠良
根まわしの済んだ構図を渡される　一京
母という構図に入る隙がない　睦子
つまずいた構図をそっとして置こう　はるお
義理と言う構図の中で動けない　美恵子
生きてゆく構図に保険料がいる　螢
親分が死んで構図が崩れだす　大漁

三幸川柳教室　三宅保州報

父の一生泥靴だけで生きてきた　かなめ
人生はこんなものです泥田這う　芙美子
泥水をすすったこともあるルージュ　靖子
山里に朱鷺を帰そう有機農　圭子
桃をむく私の泥をはぐように　親跪
地下足袋の泥が知ってる父の汗　三千子
赤裸々に生きた証の泥の靴　さち子
裏方の一生泥絵描きつづけ　高夫
骨っぽい上司にもある消去法　初子
三猿を守り上司を立てている　武春
見ていないはずの上司が知って居た　義男
虎の威をかりた上司の回り椅子　美智子

佳句地十選（11月号から）

亀岡哲子

鬼にでも出逢いたくなる長い道　ゆき
出逢っても神だと言わぬから困る　富美子
野次馬の中に我が子が交じってる　昌子
わんぱくが描くと美人のお母さん　重人
息切れがわかっているから走らない　川童
お隣もいつしか音のない夫婦　聡
意気込んだ日もあったなあ万歩計　吐来
善人を支えて影法師が疲れ　森子
あるがままの自分をさらし秋に佇つ　みつ子
思い切り怒ったらしい柘榴の実　和子

血統書付きの上司に逆らわず　和子
税金を飲んだ上司のかくし芸　鉄治
エスコートうまい上司で慕われる　当代
上司より土地は沢山持っている　桂香
片仮名に弱い上司のナタデココ　町子
両親へはがきを出せと説く上司　茜
皿まわし続けてやっと管理職　保州
懐の辞表は部下のために持つ　百合子
少なくも童話に核のない平和　みね
抑揚をつけた童話の祖父の声　信子
少し餌撒いて葛籠を待っている　章子
北きつねお前も狡い仲間かい　正雄
メルヘンを抱いて少女に長い雨期　朱夏
観光地童話の主が町おこし　美子
いい名前なのに改名された謎　美羽
人想う謎解けぬまま夏が逝く　公子
謎はらむ樹海から聞く霊の声　千秀
母は魔女謎の小槌を持っている　めぐみ

岬川柳会　八十田洞庵報

別れぎわいつも一言似たせりふ　みつこ
孫帰る別れの仕ぐさあどけない　安孝
別居して老いの夫婦も自立する　悦子
別れぎわやっと名前を思い出し　年子
ささやきも別れも見てる花時計　晶子
ふところが豊かに見える下ぶくれ　よし子
乳呑子のふところまさぐるあいらしさ　庄六
考えるスリふところを謀りかね　ヤエ
二三日やってみたいよ懐手　俶子

引越して表札がわりに名刺はる　末吉
表札を汚さぬ心孫に説き　いと
表札の達筆読めず通り過ぎ　とみ
表札とイメージちがう人が出る　良平
独り居の女表札男の名　文雄
男名の表札女ばかり住み　和重
表札が褪せて夫婦も五十年　慶之
表札で守ってくれる亡き主　よし子
親は子に恥じぬ表札刻み込み　正美
横文字の表札バラの花が見え　洞庵

川柳塔まつえ吟社　恒松町紅報

逆転もある人生の回り椅子　静恵
逆転を狙う鴉の目が光る　すみこ
逆転を考えているまっくらがり　螢
逆転へ男まっさき酒を飲み　早苗
逆転もあろう明日を信じよう　きみえ
逆転に祝いの膳が間に合わず　清志
骨太い男で花の名を知らず　妻子
娘も二十歳骨が痒くて落着かぬ　義良
酷使した骨の芯から冬になる　たつみ
骨のある男が敬遠されている　鶴丸
入れ揚げて骨抜きになる脛かじり　友子
秋風が立って分骨など話す　畔
素顔では聞けぬ話も出る酒席　長三
バイトする素顔の母が若やいで　茂美
ジーパンが似合う素顔のハネムーン　多賀子
素顔では遠くへ翔べぬ鶴となる　雄々
百歳の素顔を囲むインタビュー　房子

遠い日の素顔に会える秋の風　邦代
いい話もって何度も足運ぶ　桂子
運ばれて白寿めでたく座らされ　鳳笙
運ばれた宅急便に里の味　みえ
承諾の喜び乗せて筆運び　佳江
お日柄もよくて幸せ運ぶ道　登志子
書類箱運んでいるのは税務署だ　午朗
七五三太鼓の音に泣きだす子　静江
銭太鼓ぼんやり聞いている失意　太泡
消灯はうちわ太鼓が過ぎてから　草丘
無法松の太鼓が好きで片思い　与根一
淋しくなると亡父の太鼓を打ち鳴らす　文子
受け継がす太鼓の撥がよく響く　叮紅

岸和田川柳会　田中文時報

納得はしないが税金払ろてます　冨志子
納得のいく句が出来ず夜が白み　ひで
納得をしても軌みの出る同居　通彦
納得の出来ぬ息子の金遣い　月子
けったいな顔して納得でけまへん　勝晴
納得をさすに屋台の梯子酒　白光子
伝統の鈍い光の備前焼　昭二
カンニングすぐにバレてる鈍い奴　東雲
石段を敬遠してる鈍い足　浪速子
妻の目があなた鈍いと言っている　狸村
子の塗絵テレビ漫画のスターです　京
連立の塗絵の色がまた変る　洋
少年期思い出してる子の塗絵　朝一
塗絵には孫がじいちゃん指南役　鹿太郎

入れ知恵で子供らしさのない塗絵　瓢人
寝てまでも何かぶつぶつ二度の職　文時
寝言まで弱音を吐いて鬼も老い　錬太
興奮へ声も大きく出る寝言　信博
聞きとれぬ寝言に助けられている　甚一
心配の重さ寝言になって出る　さよ子
倖せにつながる寝言ならばよい　真柳
雑草の痛み寝言が多くなる　萬的
マイホーム乗り気になれば転勤だ　倫子
前口上長くて乗り気冷めて来る　一齋
乗り気だな眼鏡ふく手が踊ってる　ダン吉
すぐ乗り気になる王様で困りもの　一弥

川柳塔わかやま吟社　宮口　克子報

どん底できくユーモアに救われる　輝子
信念を通し切ってるはぐれ雲　めぐみ
優先の序列信じている平和　綾子
裕福に見える隣の赤い花　晶子
歴史から消してはならぬきのこ雲　保州
雲行きが怪しくなって妥協する　武春
おーい雲よルワンダのこと見て来たか　愿
雲と話し雲とたわむる闘病記　白光子
入道雲に亡父の面影だぶらせる　三男
すっきりと言ってしまったちぎれ雲　まき子
ユーモアを交じえて祝詞締めくくる　信子
ユーモアにわさび効かして時の人　千寿子
ユーモアで見事に回る夫婦独楽　公子
ユーモアも皮肉も添えてある祝辞　稚代
ひと握りのユーモアポケットに入れて行く　紀美女
裕福になっても放さない野良着　正博
マイホーム満足感と湯に浸り　柳宏子
裕福な心一皿膳に盛る　高夫
裕福な街でひっそり鰯焼く　呑天
幸せすぎて何を優先させようか　豊太
優先をしないと済まぬええしの子　紫香
適齢期優先順位ない悩み　和重
優先の二字でくすぶる虚栄心　鉄治
泥舟に乗る問題を先んじる　寿子
家事多忙泣く児に乳房含ませる　さち子
優先権反故にしてから慕われる　光代
終電の優先席に厚化粧　年子
優先座席座り心地を確かめる　英子
雲流れながれ踏ん切りまだつかず　克子

川柳岩出　小倉　アサ報

支え合う事も一つの夫婦愛　千鶴子
夫唱婦随支えて光る床柱　昌子
秋風が読書の腹を肥らせる　春子
眼が肥えて来たのかいぶし銀が好き　アサ
同じ物食べても肥える身のつらさ　紳一郎
妻一人食ってるような肥えっぷり　愛子
大げさな話近所に種をまく　保子
肥えた土稲穂が深くお辞儀する　ふみえ
いい事は大げさに言う人の知恵　英子
電柱の影にはまるかこのからだ　正直
肥えるのをいやがる嫁は良く動く　重徳
目が肥えてますねとうまく買わされる　正義
姿見にお腹うつして怖くなる　智恵子
大げさに驚いてやる孫の守り　悦男
家の中いつも支えは亡母だった　幸子
ふり向けば支えてくれる夫の笑み　精子
大げさに票を読んでる黒い金　忠雄
大げさな人の噂にまどわされ　与呂志

川柳クラブわたの花　片上　英一報

白壁が旧家の盛りものがたる　シマ子
あの人が壁だな事が運ばない　美津留
美しい壁を塗るまで積む下地　隆
この壁の向うの何かを知りたくて　春子
壁伝いはらはらさせる初歩き　ますみ
そこだけはみんな笑顔の授乳室　しのぶ
まのあたり闇の深さをしみじみと　弘直
満月をかくすいたずらのっぽビル　雅恵
一寸先闇で暮して七十年　明子
君送る星のふる夜の遠まわり　暁子
星まつり孫も秘密の願い事　道子
流れ星一瞬われに返るとき　幸枝
反抗の孫も時には星に見え　君江
散り急ぐこんなきれいな星の夜に　初子
星月夜速達便の明日を待つ　トシエ
星あかりロマンの出逢いときめきぬ　実希子
流れ星願い唱える間が欲しい　剛治
夫婦とや星の数ほどあるなかで　英一
産声に生きるあかしの初名乗り　龍
赤トンボ息をころしてにらめっこ　朝子
子の寝息母の小指を握りしめ　一風
火葬場の煙突があり星を見る　鬼遊

いずも川柳会　園山多賀子報

明日嫁く娘に今宵名残り酒　きみえ
移り香の名残りかすかに母の帯　芙佐子
三面鏡嫁ぐ名残りの目がうるむ　流石
哀悼の名残りを菊の香でつつむ　勝子
夏の花名残りを惜しむ虫の声　義良
定退日名残りを惜しむ机拭く　幸一
名月が名残りの涙光らせる　蘭水
銅鑼の音に名残りは尽きぬ紙テープ　茂美
旅立ちの子の足跡よ名残り雪　秀子
猿真似をして人間を見失う　れいじ
真似をして中途で切れた縄梯子　満江
孝行の真似をさせてとプレゼント　裕
鵜の真似のカラスをあなた嗤えるか　久栄
策尽きてテレビ料理を真似て見る　清子
発展の駅でとまどう老いの足　正朗
四季の花咲かせる駅の名を覚え　佐吉
無人駅善意の花が出迎える　ひろし
駆け込んで顔が揃った始発駅　まこと
プライバシー壁のカーテン守られる　おしえ
やっと壁越えて手にした青リンゴ　多賀子
人はみな善なり師の句壁に掛け　芳子
まだ夢があるから壁と妥協せず　ちかし
お隣の内緒話は壁に聞く　明子
壁のない森で手足が伸ばしたい　久代
桐箱に女心をたたみ込む　房子
称賛を入れる大きな箱を買う　祥庵
人生の狭間にびっくり箱がある　鳳笙
文箱に青春があるセピア色　篤子
箱の中パントマイムがまだ続く　寿美
トロ箱で仲よく育つ葱パセリ　草丘

はびきの市民川柳会　榎本吐来報

姑の出番となった秋なすび　夏秋
花活けて女は四季をかみしめる　聡
打ち水の乾いた頃に客が来る　泰子
食堂の裏へ回れば味が落ち　さとみ
欠席の理由法事が多過ぎる　和風
秋の蚊の執念少し負けてやり　ダン吉
シーズンオフの海と私は軽く病む　元紀
老人をいじめるヤサシイ国造り　敏
娘の見合いまず占うてからにする　たけし
雨降るか降らぬかコイン投げてみる　美代子
トンネルの中で本音を語り合う　敦子
股下を通過ピエロになるボール　悦子
トンネルに入ればご免と言うつもり　扶美代
トンネルの企画歴史の里を変え　辰子
こつこつ努力人生八十ごゆっくり　伴子
こつこつと築いた城が焼け落ちる　利武
嘴で虫の居場所を探ってる　一壺
こつこつと愛を編み込む毛糸針　りつえ
こつこつと貯め楢山が近くなる　吐来
告げ口は天に唾と知らぬ人　ぎいち
隅っこに隅におけない告げ口屋　キミ子
告げ口をしたその日から不眠症　六点
告げ口を言う子に母はたしなめる　シマ子
告げ口をたっぷり聞いた縄のれん　一屯
告げ口でいい子していた幼い日　かつみ
告げ口の上をスイスイ赤とんぼ　みつこ
カタコトで告げ口がくる保育園　絢子
馴れてきて嫁も一言言い返す　晋
仲人が正装で来るいい返事　志洋
返り咲き願って今日も靴磨く　岩信

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

台風の雨だけ欲しいと人のエゴ　柳宏子
水飢饉へ台風サマと招かれる　たもつ
意地悪の台風絵馬をふきとばす　一風
台風に方向指示器ついた夢　美津留
台風の警報待って子等は寝ず　祥一
どう見ても内気に見えぬサングラス　とみを
影でさえじっと見られぬ好きな人　たか子
手紙では情熱的になる内気　夕花
しゃべるだけしゃべってわたし内気です　和子
内気そうに見える女にしてやられ　春子
内気よそおう砂糖はいつも控え目に　泰
一族を抱いた親父の太い指　欣之
大志抱く男の歩幅確かなり　三男
苦しみを抱いて笑いを絶やさない　美幸
酒飲みと承知で妻となりました　春堂
酒で泣かされたお墓へ酒をついでくる　かつみ
ほろ酔いの女の爪が紅く冴え　朝子
夜の蝶終電車から母の顔　信博
終電車人生いろいろ人模様　宏子
終電車来たのに恋が終らない　元紀
終電車もう他人ではない仕草　隆

闇を切りやみへと消える終電車　ますみ
終電車ずらり酔いどれ見本市　頂留子
きっちりと発車しすぎる終電車　度

川柳高知　川竹　松風報

展望台上がって息を呑む夜景　竹萌
南国の夜景に椰子のシルエット　子龍
夜景見に行こうとうまく誘われる　圭風
列島の猛暑が円高忘れさせ　朱坊
送り出すまでは笑顔でいたい朝　春枝
ふる里に続く線路がさびている　菊野
故里はただ一本の白い道　幸泉
御土産に洋酒婿殿むりしたな　幸功
爺ちゃんにちょっとなじめぬ洋酒バー　快風
カクテルが女に効いてくる期待　孝雄
ジョニ黒の栄光消えた洋酒棚　佳風
お話の種に頂くナポレオン　千鳥
空ボトル夢の名残りの頭文字　京子
二次会のカクテル昔語りだす　松風
ナポレオン空瓶もあるホームバー

西宮北口川柳会　亀岡　哲子報

花束にされてなくした自己主張　よし津
束ねると仏の花になってゆく　富喜子
海峡で花束投げた過去は過去　泰子
札束で鬼を味方につけておく　諷云児
札束の魔力理性が蕩け出す　武庫坊
そうめんの束をくずしてまだ残暑　絹子
若い娘の束ねたくなる長い髪　江美

一区切り第二の青春と旅に立つ　てる
すっきりと区切って親子同居する　いわゑ
柔らかい瞳に傷口をさらす　みつ子
柔らかい風に種火がゆれている　たず子
一からの出直し柔らかくなろう　能子
修羅を経た女の腰が柔らかい　香子
柔らかくさとして母の便り来る　涼子
柔らかい方が賞とるのど自慢　ひろ子
柔らかい言葉に落目だまされる　白渓子
調理士が切ると柔らかそうに見え　曙蝶
柔らかいムードで心開かせる　佐江子
目線のなか家族そろった箸の数　義子
目を閉じて亡母の笑顔に会う夢路　トミエ
壁の蜘蛛目で追いながら長電話　春蘭
痛い目に遭っても懲りぬ男たち　正坊
人事課で目を伏せられた日の予感　紫香
捨て猫のすがりつく目が振り切れず　ふじ子
目を凝らし枯野のあなた追っかける　文
輸入松茸にみんなが一寸立ち止まる　哲夫
流れ星心にかかることがある　夜船
新米がふっくらと炊き上がる匂　道胤
置き薬紙風船ときた昔　房子
雑学の耳に楽しい秋日和　澄子
風は秋男になんの策もない　佳秋

城北川柳会　吐田　公一報

迷うてます観音さまの答え待つ　行子
ちびっ子は漫画とサッカーハンバーグ　秀夫
出稼ぎの瞼に残る子の笑顔　久留美

勝気ほど情けにもろい涙つぼ　頂留子
渇水に考古学者と湖底物　佐津乃
迷わずに産んで良かった子の寝顔　澄子
満員のまだ鳴りやまぬアンコール　史風
この辺で外せぬものか鬼の面　達子
人ごとと思った老いがしのびよる　トヨ子
漫画本時の流れを忘れさす　八重
すぐに乗る癖を知ってる誘う人　あい子
戦後処理手ぶらで行けぬ国ばかり　ただし
名水にポリの容器が徹夜する　政子
約束が多くて小指迷いだす　白峰
止ったらこけると独楽は信じてる　昭子
じっくりと読むとチクリと刺す漫画　一枝
迷わずに孫は大きい方をとる　典子
苦い顔しても流れに逆らえず　満津子
お手ぶらでを信じて行った軽はずみ　倫子
朝夕の挨拶変る秋の風　登美子
泣きやんでから笑うのを待ってやり　静子
手ぶらではないよ母さんよい話　柳影
子を救う母の心は迷わない　公一

川柳ねやがわ　江口　度報

かりそめのちぎり乳房は知っている　弘直
乳房もう井戸端族は気にしない　博泉
透明になっておもろうない夫婦　藍子
半透明な記憶を通す老いのエゴ　吉之助
浸す手のシワまで見える谷の水　シマ子
透明なこころになって読む聖書　たもつ
透明なダイヤ転々する運命　あやめ

紹を着れば下着に神経かよわせる　冬葉
端正な姿勢が透けて寄せつけず　小路
グロッキーへ叱咤激励とんでくる　恵子
酔ってない酔うてない舌縺れてる　一途
べっぴんの方へよろけるグロッキー　頂留子
あんたの薬は薬を止めること　亜成
母の涙薬になって立ち直る　ルイ子
睡眠薬の代りにされた哲学書　洋
薬にも毒にもならぬ部下がいる　一閑
薬屋の主人薬が大嫌い　庸佑
一筋に信じた薬謀反する　静江
漢方薬飲んで短気がまず治り　一鬼
試供薬だけで癒った夏の風邪　時弘
嫁はんが怖い薬を持っている　欣史子
敬老の集い欠伸も居眠りも　黎之助
干柿の甘みそろそろ懐かしい　英壬子
受け答え母子と分かる電話口　光子
社名カタカナ盆栽いじっている社長　度
ふくろうが鳴く里の夢みた朝に　かすみ
許してる妻の顔見て朝を出る　一風
退職後趣味のリズムになってくる　文秋
ネクタイを直してあげる好きだから　礫
思うつぼに嵌った女は美しい　波留吉

川柳後楽吟社　従野　健一報

君すこし過激だすぐに怒りだす　草風
謎を解く少年の瞳に汚れなどはない　拓治
老いらくの恋残り火を確かめる　哲郎
いい人と頼りないのをほめておく　柳五郎
出窓から覗くと深い母の森　正秀
軽いジョークでじょうずにかわす歳の功　健一
背信を許す女の性哀し　美智子
人生のステージ誰もがヒロインで　桃風
二度とない人生だから今日の月　玉水
柄に無い齢で舞台に立つ励み　たけ志
秋が来た住所録を再製す　博友
折角の善意野心とみてとられ　佐加恵
生きざまに胡椒をすこしかけてみる　道博
相談をしてバレかけた下心　邦季
口笛を吹いているのは私の影　吉則
コップ酒無口のおとこ喋りだす　金吾
息災を祈る護摩の炎ご縁日　吟平
勘ちがいこのまま最後のページまで　幸子
赤トンボ誰にもろうた美しさ　洋一
闘争の顔に変った竹トンボ　鮫虎狼
寂しくて仰げば月も独りぼち　秋月

川柳大阪　川端　一歩報

露天風呂星と乾杯よきこころ　太元
古希近いでも黄昏の詩は詠まぬ　美津留
稲苅りの前を雀が群れ騒ぎ　与呂志
澄んだ目で話すこの子に嘘はない　雅巣
真夜中にきっちり返す昼寝分　我勝
頭下げ稲穂が聞いた祭り唄　洛酔
煌々の月にノルマが重すぎる　重人
台風のおかげ儲けたとも言えず　鉄心
台風よ無謀運転やめてくれ　保夫
台風一過繁盛している焼芋屋　一介
なぜだろう水がめ避けて行く台風　末坊
台風がふる里便りつれてくる　和子
台風がチャンス飛びだすカメラマン　比呂志
龍と鯉台風の目になりそうだ　柳弘
松茸が話題になって秋間近　河南子
親になる喜び間近祈る日々　柳昌
舞台そで順番間近胸おどる　良花
雷雲が間近に来ても降らぬ雨　司
母の背で間近に聞いた子守唄　信酔
秋間近さんま松茸くり御飯　酔照
岸壁の間近こだわり捨てて佇つ　希久志
万歩計間近な古希へ歩を刻む　しげお
結婚を間近の二人光る顔　青道
人並みじゃ安心できないママがいる　川童
夫婦とも同じレベルで旅行好き　美花
祝金標準並みがむつかしい　かよこ
目標のレベルへ汗はおしまない　まつお
生き抜こうレベルは高く置いてある　金太
おでん屋へ同じレベルの顔が来る　笑風
炎天のバス停を掃く老婆まぶし　一歩

翠洋会　渡部さと美報

松茸が威儀を正して宿の膳　宣司
松茸の吸物母の食進み　光子
松茸で夕餉の無口すくわれる　登志子
松茸の味覚に遠く子と生きる　真砂
スーパーの松茸香り嗅ぎ取られ　綾子
アジア大会企業が走る舞台裏　ひろ子
スポーツ紙電車の中の盗み読み　志華子

いってらっしゃい後はテニスに集う主婦　みずき
スポーツの過信が祟る大手術　照子
ループタイ朝から京へゴマ豆腐　絹子
黒豆の豆腐京まで足運ぶ　東雲
ゆれながら口説き聞いてる鍋どうふ　さと美
湯豆腐の湯気の向うへ伸ばす酌　正雄
湯豆腐が好きと入歯が言うてはる　恭昌
愛憎をはるか彼方に冷奴　蛙
通夜の席白和えの味ほめられる　叡子
豆腐こんにゃく昔の意地は捨てました　希久子
ひとときは乙女に戻る花の道　正坊
ストレスを花野に捨ててきたひと日　みつ子
松茸を穴のあくほど見て帰り　鬼遊

川柳藤井寺　高田美代子報

一票を欲しさに頭下げてます　利武
欲ばって大きな土産背負います　三郎
二歳の子ちゃっかり大の方を取り　初枝
欲望の捨て場を探す泥の舟　美房
欲得を抜いて一肌脱いでやり　史郎
金溜める欲は孫でも持っている　智久
やっと欲出たのか汗を流し出し　昭子
欲に目がくらんだらしい急ぎ足　二南
見えぬ目にやりたいことが多すぎる　六点
秋日和いつまで続く無駄話　トミ子
無駄だとは思わぬ投句全没も　みのる
就職も無駄足踏ます不況風　恒雄
無駄だとは思うが夢を買いました　悦子
無駄足になったが一つ貸しができ　晋
無駄一つ四角四面を丸くする　和樹
燃えつきて菊号空に無駄花か　愛子
一盛りを半値で買って半分捨て　敬一
無駄話　言わぬ上司で肩がこり　志洋
四五本は無駄だとおもう蛸の足　一屯
無駄話そこから知恵をひとつ借り　吸江
家計簿に諦めだけが残ってる　宗一
以下余白そこでコントが生まれそう　公輔
水没のここらあたりにあった墓　与呂志
定年の手始めにする水仕事　三夫
念のためこっそり水を買ってある　扶美代
湧き水にうなずく夏ののど仏　敦子
一滴の水も大河となる野心　治子
わたくしを探しに水脈を辿る　美代子
約束は水が澄んでるうちにする　修六
考え直さないかと水たまりがあった　和子

倉吉打吹川柳会　奥谷弘朗報

小心が嘘をついたら顔にでた　松盛
責任の重い分だけ威張らせる　幸子
責めること知らぬ阿弥陀の大きな手　節子
責めるのをやめて描撫で声をする　よしえ
責めるなら褒める言葉も用意する　玲子
ほのぼのとしてます愛を知ってから　きみ子
ほのぼのと喜劇上手な心電図　雄々
憧れに似てほのぼのと好きなひと　螢
ほのぼのと胸あたたまる文を読む　喜与志
釣り落しでっかいやつとくやしがる　季芳
他事ながら夫婦喧嘩に立ち止る　獏沓
四捨五入すれば嘘とも言い切れぬ　柳風
朝刊の黒枠嘘と信じたい　喬水
いっときの嘘後悔の日がつづく　早苗
病床へほのぼの見舞勇気づけ　小生
人情にほのぼの触れる投書欄　ひさ子
嘘ばかり聞こえる春の糸電話　仙岳
嘘の混じる手柄話がおもしろい　善政
お許しがないと越せない丘がある　とみお
意気のいい男大きなホラを吹き　弘朗

川柳塔とっとり　武田帆雀報

出る月を借景にして庭園を褒め　孝男
花泥棒月には嘘はつけまいぞ　輪多朗
椰子の木に初秋の月がよく似合い　明美
別れにはあまりに月が美しい　一枝
女になった時から月を信じない　揚芝
寝たきりへもう満月は訪れぬ　日枝子
戦いは終った月に酒を注ぐ　帆雀
半月に心あずけて動けない　螢
抱くことをあきらめているいい月だ　しげる
旅先の人の情けは身に沁みる　崇
旅なれて旅行かばんも小さくなる　一京
片道の切符鋏をまだ入れず　行男
再会の絆をたどる孤児の旅　喬水
旅先で拾った恋を持て余す　圭一郎
温もりをみやげに語る老いの旅　享
息抜きの旅にファックス追ってくる　俊路
放浪の旅です絵筆など持たぬ　静生
罪ほろぼしの遍路の旅にけつまずく　大漁

英語みたいなカタカナ語の氾濫　千秋
注意した孫が英語で口答え　銀嶺
子や孫に英語教わるパスポート　黙光
英語とは無縁に生きる国訛り　山人
英語だけ出来て国際的になる　孝原
老化した頭脳英語が振りまわす　粗粒
アイラブユー英語で言うと味気ない　侑里
英単語硬い頭へうまらない　艶子
宿題の英語家中なやませる　由多香

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

風船に空の高さを教えない　正坊
言い負けて空を仰げば流れ星　〆女
暮れなずむ空を見上げている詩人　昌子
腕時計斜めの雨を待ち切れず　伊三郎
雨だれはきそく正しくリズム取り　智栄子
雨模様デートの傘を吟味する　渉
許す気へ雨は激しく戸をたたく　諷云児
雨脚の速さを睨む鬼瓦　二南
忠告が聞けなくなって本を読む　行隆
今日聞いた訓辞電車に置き忘れ　天弘
いい話聞く耳栓を懐に　澄子
巨人が勝ってるプツンと切るラジオ　杜的
肩書が聞えぬ耳にしてしまう　石舟
聞き返す言葉に不満持っている　白渓子
ヤング減り祭太鼓をトラックで　正子
ライバルの鼻は自信に満ちている　すみ
月見草無人駅にて人を待つ　栄
賞罰なしただ平凡に揺れている　正治

洗濯機まわる今日は楽しそうに　キク子
いずれ男と女の河の幅ならん　年代
海溝を横切る魚をみていたり　(河)芳子
蜘蛛の糸ポツンと切れて秋深まる　薫
臆病な風で病葉を散らせない　ハツヱ
お願いの声と一緒にボール来る　ミサ子
ペテン師が乗る泥舟が沈まない　武庫坊
躓きし石に呟くのもひとり　千恵
三輪車あれは幼い日の私　真柳
八方美人豊かに生きた過去がある　(松)芳子
空港ビルで高い コーヒー飲んで来た　萬的
五十回忌亡妻を忘れたことはない　紫香

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

淋しさがつのる夕べの川とんぼ　鈴江
空回りしてからとても強くなり　かつ子
鬼灯が色付く頃の初恋よ　聖子
鬼灯の提灯片手に盆が来た　好栄
川とんぼ誰に逢うやら水鏡　ちよえ
こんこんといで湯溢れて何処へゆく　英子
ひとの命と鬼灯の赤昏れのこる　はるみ
好きな風受けてわたしは空回り　博利
数合わせ政治地球の空回り　清泉
レーダーの死角をたどる川とんぼ　白汀

川柳ささやま社　酒井　靖子報

お手本と歩いた道をふり返る　とよ子
別れ来し手袋の白鮮明に　純子
千羽目の鶴はお寺で折ることに　恵美

台風の進路に故郷の田が稔る　芳郎
きび団子ぐらいで今は従いて来ず　素水
化粧して男を試す二枚舌　とみ子
代表になって見直す我が母校　市三
台風に何度も耐えた富有柿　つや子
代表の名で寄附金をせめられる　八重子
代表はみんな手の内読んでいる　和子
代表に恵まれ雑魚の住み心地　ヒサ子
台風を見直す水のありがたさ　可住
代表の指が震えている弔辞　靖子

京都塔の会　松川　杜的報

軒下に恋を語らう俄雨　波留吉
藁葺きの軒につまっている民話　〆女
あかとんぼ軒をかすめて秋告げる　百合子
廃線の駅の軒にも燕の巣　萬的
障子紙貼り替え鬱を蹴っ飛ばす　圭坊
引越しの当座名刺を貼っておく　白渓子
切貼りの嘘で急場を切り抜ける　諷云児
サロンパス匂う女の苦労性　栄
振出しに戻る保証をさがす僕　真柳
冗談で聞けば保証すると言う　求芽
愛の保証が欲しくて皿を割ってみる　年代
何の保証もないけど好きと言うのなら　礫
二三日靴を穿かない日がつづく　杜的
グーチョキパー十指にまさるものは無し　芳子
熱帯夜軒の風鈴揺れもせず　庸佑
吊し柿平和な村の軒にする　飛鳥
軒下に自転車置いて話し込む　紫香

アルバムに昔の秘密貼ってある　倫子
夢を貼る場所が少ない余命表　武庫坊
祈っても呆けぬ保証はない余生　正坊
不本意な義理の絡んだ保証印　英一
振り向けばビルの空にも虹の端　てる
大潮が引いた都会の夏休み　笑女
公園の風が河内音頭で吹いている　達子
重箱の隅をせせって掏話喧嘩　ただし
台風のいじわるつぎつぎ西の方へ向く　水客

尼崎小園川柳会　立谷勇次郎報

肩寄せる船溜りのある港　定人
鮪追う船にちらつく母港の灯　弘治
出た港一旗なくて戻れない　幸代
母の居る港は今日も風いでいる　鹿太
嗚呼奇麗　風いだ港に陽が落ちる　向西
盃に黒い話が沈んでる　夢之助
黒髪も今は素敵な銀髪に　ミサ子
七光サラリーマンには結構ね　美々
夜あそびに妻が連れ添い困ってる　十四郎
三歳児通す頑固に困り果て　末貞一
あちこちで困る困ると声がする　尚利
黒帯に青春かけた青畳　勇次郎

川柳塔唐津支部　久保正剣報

段々と腹の底まで響く鐘　旭恒
日々楽趣味吟行旅続　朴竜
座禅組む我も仏の膝に似る　久仁於
一滴の水洪水を予測せず　虹汀
冬仕度急げと夜風せき立てる　タミ
名月にのぞかれ窓に墨を入れ　圭一
てのひらを見て仲人の咳払い　四郎
深い皺母のドラマがかくれてる　晴子
相知りて今宵出かける観月会　實
敬遠の苦肉の策で墓穴掘り　幸夫
君送り雨の駅裏屋台酒　喜久亭
煮豆炊く供えて母に褒められる　ふさ子
聞く耳を持って友との輪が円い　治幸
厚い壁それでも内緒すぐばれる　ちよ
硬骨漢拾った骨も硬かった　紀一
遮断機が心理描写をして困る　正剣

尼崎尾浜川柳会　前田いわお報

欲惚けて占い信じくじを買う　末貞一
暑さ呆け診察待ちの列にいる　修水
もぎたての無花果届く朝涼し　まさ
横文字に弱く漢字は苦手です　勇次郎
食欲の秋ダイエットには無理ですね　すみ
欲ばって買ったが払う金がない　六浦
欲が出て部長の椅子を狙ってる　夢之助
再燃の欲トンネルを今抜ける　歌子
米寿祝い蒔絵の椀で舌つづみ　向西
夫婦茶碗可愛い柄を選っている　昌子
椀一つ飄ひょう行脚山頭火　弘治
言い過ぎて夫婦夕餉の欠け茶碗　十四郎
泣き虫がいる笑わせてやろうか　澄子
先様の気持は知らぬ自動ドア　正治
尻尾ふることしか知らぬ弱い犬　紫香
農地法に尻たたかれてビルが建つ　いわお

高槻川柳サークル卯の花　川島諷云児報

でたらめに見えるピカソの絵の前で　スミ子
でたらめに生きて今頃つけがくる　瀧小
運命を変えたあの日のあの出会い　ひかり
保険屋に余命の話聞かされる　東雲
運命はどうあれ恋の灯を点す　波留吉
辞令一枚運命の糸操って　(長)澄子
逆縁の八十路の団子盛っている　静江
運命を素直にとれぬ曼珠沙華　武庫坊
対岸の火災お水はありますか　あきら
主婦業に飽いて跳びたい向う岸　よ志子
たたら踏む岸は近くてまだ遠い　大輔
目の前の岸に鉄条網がある　恵美子
登校の自転車が待つ向う岸　白渓子
向う岸巡査と走る奴がいる　紫香
うわべだけなごりを惜しむ送別会　克治
何もないわたしは愛を送るだけ　艶子
為替くみ故郷に送る生活費　彰一
お互いに送ってもらう気で夫婦　ひでお
最高の気分で送る投げキッス　道胤
お別れに送る言葉に風匂う　萬的
送られる少し冷たい風の中　年代
自転車で爽やか風と対話する　獏沓
水色のワルツ歌うと泣けてくる　かおり
手控えのいらぬ楽しいクラブ振る　庸佑
果てしない水掛論に座を外す　二南
夏ばてへ秋はいかがと萩の風　伸子

故郷の夕日は心まで染まる　〆女
盆栽を買えば過去の人にされ　太茂津
ひかえめの嘘で縄電車から降りる　求芽
一枚のはがきに秋が降りてくる　薫

サークル檸檬　小林一夫報

橋の向うにぽつんと立っている昨日　千代
迷う間にすしもチャンスも回りゆく　雅子
仏一体　数知れぬ露の奥　薫風
気づかないうちに歩幅が小さくなり　智恵子
吠えようか耐え切れなくて十三夜　たか子
語りべの話に正座する児童　房子
西部劇　アメリカ神話だと思う　正坊
夢さそう話欲しくて佇つ花野　みつ子
軍人の話をぼくは信じない　一夫
寓話転げてどこまで続く曼珠沙華　薫
化粧品買うて仏の花も買う　いわゑ
人生のいま午後七時すぎた頃　楓楽
仏さまとこっそり話しています　智子
口止めをされた話が歩いてる　喜美子
秋の木とゆっくり対話しています　希久子
青空へ投げた帽子も秋を吸う　あずき

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

あの夜の涙覚えている枕　ひかり
助手席に内助の妻がいてくれる　あきら
一瞬の仏心を狙われる　かおり
生きざまを見ても黙って居る枕　吟笑
こぼす愚痴母の背中は聞いてくれ　放任
新米のうまさを作る古女房　正雪
母性愛くすぐる愛でジレッタイ　くに子
枕木になって耐えてる人も居る　よしみ
人間は表があれば裏もある　治延
煮っころがし上手な嫁で丸く住む　マツエ
お若いと言われて鏡そっと見る　いさむ
勿体ないと口に運んだ肥満体　マサエ
雨降れば花壇涼しい虫の声　文仙
お節介焼いたが基で恥をかき　迷貫
練り上げた得意の技が身を守る　チカエ
アニメ漫画子供の世界に夢降らす　中1なみ子
大波小波越えて夫婦の和む幸　ふみ

川柳塔鹿野みか月　土橋螢報

失言の波紋繕うすべがない　八重子
言い過ぎて言葉繕う負け戦　富恵
繕うてまた明日あると女生き　武子
物あまる時代繕う針も錆び　かつ乃
繕えば繕うほどに軋む針　実満
指切りで繕えました愛ひとつ　きみ子
繕って今日を楽しい一日に　はるお
子の嘘を繕う母は冬になる　忠良
人生の午後は月夜を待っている　房子
ささやきにとっても弱い果実酒　節子
腹痛も風邪も果実酒直ぐに消す　汲香
我武者羅に谷をつたいて喜寿も過ぎ　信江
男だろう谷の深さにたじろがぬ　三千代
どんぐりも谷ふところが性に合い　智恵子
接点の合わぬ谷間で苦労する　睦子
赤い血が谷を流れるから燃える　和子
谷底で出遇った百合と添い遂げる　美恵子
顔色に気圧の谷が出てしまう　隆風
騒がしい軒先雨がまだ止まぬ　孝男
軒にきて雀が同じ話する　久枝
軒に並べている同胞の花つぼみ　諷人
頭上注意軒へ玉葱ぶらさがる　くに子
嫁きなさい軒はいつでも開けておく　孔美子
軒並みに聖書かかえて売り歩く　みさ子
末吉を信じて孫に夢賭ける　野草
荒波を漕いだ人生振り向かぬ　幸枝
良き日吉日父の涙は美しい　明美
かくれんぼ透かして見てるもみじの手　弘子
ごみ捨てる場所に困っている地球　喜与志
夕焼けを見ている父に似たおとこ　螢

富柳会　池森子報

鉛筆をころころ少女まだ迷い　紅紫朗
お土産は鉛筆だったいい時代　扶美代
朝市は鉛筆耳に品ならべ　恒雄
一途さが鉛筆芯を尖らせる　喬之
出稼ぎの与作がカード大好きで　敦子
用件にかかると切れたテレカード　晋
一滴の涙男を切り刻む　和樹
夏休み時計が昼の陽を返す　方子
伊達メガネかけてもやっぱり地の女　登子
昼までに行かねばならぬのし袋　昭子
青い星　君で終りだ裸足のゲン　鐘造
トランク一つ寅さんが行く旅の涯　一二子

火渡りに挑む裸足の正念場　智久
切り札を使うチャンスを見失い　(伊)勇
畑仕事裸足に地球温かい　トシエ
眼科医の処方めがね屋まで指定　(田)勇
鉛筆の芯の心を考える　宗一
おふくろの味に血圧から文句　絹子
クラス会昔の味の店で呑む　昭水
涙を拭いてからの女がたくましい　美代子
日が暮れたのに引取りにこぬ荷物　文次
秋刀魚焼く少しレモンの香を添える　透太
鬼女今宵陰でこっそり涙ぐみ　柳太
昼どきの波と戦をするめし屋　欣之
風が吹き抜ける専業主婦の昼　美千子
句三昧のれんを守る赤いばら　維久子
ふり出しに戻る裸足がもえている　花梢
王様の荷物の中にあるマンガ　岳人
消しゴムで消されてしまうのがつらい　森子

堺川柳会（前月分）　河内　月子報

しっかり食べて歳を忘れて生きている　みつ子
網の目を抜けたところが菩薩界　とみお
元気です朝から麦酒飲んでます　正坊
恥を知って谷へ身投げをするりんご　朱夏
胃が痛むほど上役が元気です　一揆
巡り来る風に死ねないなと思う　美ッ千
すっきりしました爆弾投げて来た　鶴丸
私が死ねばすっきりする筈だ　公弘
群の中で大きな欠伸してしまう　輝子
美しいたてがみとなり群を出る　正子
人並みに月夜の晩は飲んでます　天笑
敗戦忌いま人並みに生きている　美智子
仁王さんの目よ雷が鳴っている　蘭幸
水不足忘れてたものをとりもどす　いわゑ
夏草の匂を忘れかけている　完司
きっと淋しいだろうわたしのお葬式　和子
波乱万丈米不足から水不足　二南
末っ子に時々波乱起こされる　紀美女
いっぷくが二服二服が三ぷくに　勝晴
花群れて仏の顔は人形に　森子
波乱万丈何時までわたくしを試す　美代子
鬼になり仏になって子を育て　春蘭
いっぷくしてくれぬ痛みと病んでます　頂留子
背がながくながく野仏暮れなずむ　一二三
盆過ぎて墓場も寺も息を付く　春香
精一杯生きて仏の詩に逢う　半銭
野仏に鞄あずけて鬼ごっこ　摩耶
いっぷくの毒かも知れぬ口づけよ　楓
二次会に波乱の種もついてくる　菜々
言い勝って吸ういっぷくの味気なし　文

堺川柳会　河内　天笑報

土に触れる時小さな虫になる　美子
火縄銃私に反き湿気ている　途子
寝ころんで土の温みを抱きしめる　春香
油断した父の積木が傾斜する　紀美女
甘い水信じ切ってた蛍の死　寿美
約束を破ると縄を木にかける　岳人
誤解ではないのに水に流される　森子
日曜も母のリズムは狂わない　花梢
野良に出て土の叫びを聴いている　彰
人間に疲れのんびり土をこね　摩耶
雨予報蛇口をすこし緩めよう　美代子
おおきにと芯から言えた日の夕陽　勇太
別れ際日傘が二つおじぎする　春蘭
夫逝って水の深さが身に沁みる　泰子
父の日に甥姪の荷が山と着き　一二三
丸い月母に電話がしたくなり　星子
お互いが程よく見える月明り　かりん
逃げ水を追いかけたまま戻れない　半銭
宝物どれもお金になりません　楓
決心をなぜにゆるがす丸木橋　頂留子
使途不明そんな裏金欲しいです　文時
名工の金にはとかくうとい人　萬的
土のない街には育たない情け　鬼遊
三尺掘ればゆっくり眠れそうな土　天笑
金の要るはなし息子に聞かせとく　月子

倉吉川柳会　谷口　次男報

一個でよろし悲しみを入れる壺　とみお
人間を一匹と言う一個とも言う　菩句
個性の強い馬で明日を期待する　喜美子
個性尊重など守らぬのがぬかす　柳風
胡桃二個片手ですったもんだする　和枝
一個でももらったものは味がよい　智子
窓際に個性を捨てた椅子がある　よしえ
個性だと言って頑固に生きている　秀峰
灰皿の中に答えは既にある　日枝子

子育ての答えを親に投げてくる　ゆり子
午後三時有閑マダム持て余す　幸子
午後六時おはようさんと言う人種　石花菜
夢をみる個室を一つ持っている　美ッ千
選手等が答えを出してくれますよ　サカエ
おこぼれを貰い財産ぎすいたよ　(山)康子
メロドラマ見てるひとりの昼下がり　秋女
女子大生個性を生かす職さがし　小生
答えにはならぬ答えで逃げておく　天雀
飢えと言う事は知らない午後三時　雄々
答えます行政不信白紙出す　碧水
天地のみおやに謝して今日も生き　寿満湖
個室にはふたりが入るもんじゃない　螢
負うた傷午後に入ると疼きだす　秋人
知事なんぞ飾りでよいと黒幕が　次男
空財布午後の話はもう止そう　康志
雨の午後極楽行きの写真選る　かつみ

ほたる川柳同好会　井上　直次報

頭から怒鳴った父へ花手桶　ただし
奥さまに頭上がらぬ社長さん　博史
子のために下げた頭は忘れない　吉太郎
お付き合い切れる頭に距離をおく　直次
七歳を頭に五人子沢山　一笛
我が頭リフォームをするすべもなし　祥司
頭(かしら)の首据わらず揺れる永田町　清史
郵便で頭痛の種が着きました　英子
頭かく仕草で今日もかわしてる　昭水
社会党　角出し槍出し頭出し　紫水
臑かじり頭の上で物を言う　しずえ
十字砲火潜ったスリルまた夢に　馬洗
ブランコでスリル楽しむ幼い子　正安
F1のスリルが好きな老青年　恭子
疑いは疑いだけにしておこう　薫風
疑いが解けて女の負け惜しみ　明光
占いを疑いながら信じてる　竹二
生涯を島に日焼けて疑わぬ　喜美子
一筋の髪で疑惑の目がひかる　保子
疑いがとけて明日の靴磨く　瀧小
愛のむち叩いたあとの手の痛さ　純次
幸せは痛みをわかつ友がいる　桂子

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

冷静に聞けば何でもない話　つた子
首振って何を憂うか秋桜　すみれ
もう秋の風とみの虫ゆれている　〆女
十三夜高吟楽し吟仲間　秀香
口下手が口が固いと信じられ　のぶ子
何んぼでも食え食え米をとりに来い　甫正
古寺の平和の鐘が今日も鳴る　光水
久しぶり妹に会い亡母に見え　ただし
しのび寄る小さな庭にも秋の彩　伊久栄
退院を待ってくれるは庭の草　志重
庭なんて夢のまた夢うさぎ小屋　禅心
庭木つみ気分すっきり一人笑む　久子
自画自賛素人造りの庭をほめ　楽山
本物が迷いを見せるニセの出来　種子
庭付きの新築並ぶ好景気　千代女
陶工の誉れを挙げた柿の色　旭泉
本物とわかる握手の手が温い　吟平

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

新聞と無縁の母は世に遅れ　計
選手宣誓　手話のニュースが誇らしい　真柳
待ち呆け駅に出口が四つある　勝
口紅に母は女を失わず　〆女
口下手な父そろばんで生き残り　瀧小
口紅は一家支えている濃ゆさ　福一
親いない古里　無口にしてしまう　悟郎
こころ澄ますと心経が口ついて出る　楓楽
修羅を見た日から無口になった父　正坊
さようならテレホンカードそっと抜く　つえ子
顔見たらとても言えないから電話　英子
長電話うっかり終電乗りそこね　一笛
肝心を言わずに切った長電話　慶子
コードレス危ない話聞かされる　杜的
海峡トンネル男無口になる左遷　きく子
トンネルに入ると祖父は缶ビール　博史
寅さんに逢えそうトンネル越えて旅　万之助
トンネルの奥でも虫が秋を鳴く　明光
花鋏研いで母さんまだ元気　芳子
やわらかな甘さは母の塩加減　ただし
義理でする拍手もまじるフィナーレ　萬的

第十二回川柳Z賞　大賞は同点2名のため吉田浪（岡山市）・荻原久美子（東京都）の2氏、第2回風炎賞は佐藤岳俊氏（岩手県）

エッセー

恩師

牛尾緑良

昭和二十二年、満開の桜と二宮尊徳像に迎えられた入学式で、最初に出合ったのが担任のS先生でした。終戦直後とはいえ、島根県の山間の小学校は鎮守の森と澄んだ空気の中、まさにうさぎを追ったり小ブナを釣ったりの平和で心豊かな時代だったと思います。

S先生は当時二十代、青春のすべてを私たちに注ぎ込んでおられた熱心な先生でした。時間にゆとりのある時代でもあったのでしょうが、一人ひとりとじっくり話し合い、家庭を訪ね、その持ち味を引き出していただいたようです。もっとも、家庭の方が暮らしに追われていて、教育はすべて先生にお願いしていたのかも知れません。

二年生の学芸会では「かぐや姫」をしました。かぐや姫は、ちょっと好きだった写真館のKさん、天女は呉服店のKさん、おばあさんがIさんで、私がおじいさんの役でした。石見神楽の土地柄、客席から「待った待った幕引き待った…」のお声がかり、一番喜ばれたのはS先生だったと覚えています。

中学一年の担当A先生は、実験薬品の事故で右眼と右手が義眼・義手でした。伯父が戦傷者で義足をつけていましたので、違和感はなかったのですが、眠る時に義眼を外して寝るとの話には驚いたものでした。

国語の先生で、得意な源氏物語をはじめ、徒然草、方丈記、平家物語と古文を楽しく解説していただいたおかげで、文章は勿論、和歌に親しみ、能や狂言にまで興味を持つことが出来ました。人との出合いといいますが、生徒にとって先生の存在は大きいだけでなく、絶対だったことを改めて考えさせられます。

H先生の月曜日の第一声は、きまって前日の釣果でした。高校一年の多感な頃、新聞部に入っていっぱしの理屈を並べていた私を、先生はご自身が顧問をされていた弓道部へ誘って下さいました。熱しやすく冷めやすい一方、何かにのめり込むと見境もなく深入りする私を心配していただいたからでした。

先生が「俳句」に投稿されているのを知ってそっと投句、先生より良い成績の時はひとりで喜んでいました。勿論、ペンネームを使って最後まで内緒でしたが。

大学のゼミのO先生も俳句がお好きでした。退官近くでものやわらかなことばにひかれ、俳句の方も勝手に弟子になってしまいました。先生のお名前は吾郎、俳句では悟朗と号されていましたので、以来、私は一歩下がってロクロウ（緑良）と名乗ることにしたのです。

こうして振りかえると、今もそれぞれの師のかげを引きずって歩いているようです。作文・和歌・俳句と分野は異なりますが、一貫して「国語」を教わってきました。伝統のことばの美しさ、表現の自由、作句の楽しみ等々。その世代に応じた教育を受けられたのは本当に幸いでした。

そして今も、S先生との文通が続いています。長いブランクの後でしたが、同窓会の案内が元で連絡が取れました。同級生の消息を通じて空白は一気に埋まってしまいました。町議会の議員、坊主、社長、農業など、さまざまな人生ですが、みんな先生の懐で育った雛鳥でした。「原山霞む鎮めの森…」と、小学校の校歌も少しですが思い出しました。

今月も句報が届きましたとのお便り。「川柳はわかりませんが、うなずける句に出会うのを楽しみにしています」と。「お身体大切に」のひとことに、いつまでたってもかわらぬ先生と生徒の関係を感じています。

本社　十一月句会

十一月七日(月)午後五時半
メンズファッションセンター

十月に上梓された工藤甲吉氏の句集『甲吉川柳』が紹介され、本社句会の新しい司会に西口いわゑさんがデビューした十一月句会は九十一名の参加で開会された。

「おはなし」は新副理事長の板尾岳人氏。若い頃、結核療養経験のある氏の健康法は、約一時間の早朝散歩とのこと。自宅から近い堺市大仙公園の四季の移ろいを楽しみ、句碑を眺め、時には花を失敬して帰宅。そのあとの朝食がとても美味しく、たくさん食べるが体重は一定のままという。不健康なダイエットをしている人には、ぜひ勧めたいと思う。どんな健康法にしても、自分のペースに合わせて続けるのが大切と、大変参考になる「おはなし」を結んだ。

月間賞は宮西弥生さん（八尾市）に輝く。

（司会―いわゑ）（記名―ダン吉・月子）
（清記―楓楽）（受付―たず子・房子）

席題「もらう」　吉川寿美選

秋のあわれ貰うてのぼる枯れ葉道　洋
たくさんの心をもらい立ち直る　みつ子
長生きの自信をもらう万歩計　諷云児
肩書きをもらった木偶の転び癖　勇太
湯をはじく神にもらった乳房ですもらわれて喜劇に替える人生譜　路児
逆縁にもらい泣きした通夜の席　寿子
笑い袋をもらう楽しい仲間たち　親踏
柿の種ならばうれしくもらいます　たず子
賄賂にはならぬ程度と見て貰う　公子
手のひらを合わせやすらぎもらう朝　文秋
ぬくもりを貰う故郷の国訛り　いわゑ
修羅の絵の中でもらった弥陀の慈悲　稚代
名をもろうて野良犬だったこと忘れ　武庫坊
貰うもの貰うて足が遠くなり　希久子
母さんの知恵をもらいに来た手紙　稚代
逆らわずにもらうあなたの愛ならば　希久子
風邪三日　神にもらった休暇かも　公子
向いからあくびをもらう終電車　楓楽
いただけるならほんの少しの幸せを　〆女
イチローの笑顔にもらう爽やかさ　美代子
つまずいた小石に今日の幸もらう　正坊
一瞬のときめきもらう電話ベル　悟郎
残り福を貰うつもりで待っている　みつ子
愛もらう飯まっ白に炊き上がる　美代子
ライバルに塩をもらって生かされる　たず子
喝采をもらうと明日がこわくなる　森子
にぎりめしもらって一つ善を積む　楓楽
きびだんごもらってからの長い旅　人
聖マリアの笑み穏やかな目を貰う　地
四コマから貰うささやかなペーソス　天
一本の藁をもらった恩がある　軸
師の一喝もらって人生観変り　弥生
　　正坊
　　澄子
　　澄子
　　いわゑ
　　寿美

兼題「マニア」　奥田みつ子選

趣味の欄　諭吉マニアと書いてある　公一
蝶々を追って少年脱皮せず　朱夏
カーマニア鈴鹿に若さ確かめる　久峰
本職よりマニアに凝って出世せず　昭子
碧い目がマニアになった津軽三味　英壬子
石一つずつ拭いて碁敵待つマニア　シマ子
口コミと言う連絡があるマニア　三男
無欲とおすこれも一つのマニアかも　義子
ガラクタを今日も磨いているマニア　昭子
骨董屋をマニア旅先でも覗き　萬的
マニア心理マニアでないとわからない　三男
オルゴール集めてひとり悦にいる　親踏
渡り鳥追ってカメラが離されず　文子
寅さんの映画は全部観ています　保州
真似て振るゴルフマニアのこわい傘　狸村
マンションの一部屋に住むガンマニア　鬼遊
松竹座　映画少年だった頃　正坊

エジソンのような顔しているマニア　しげお
情報マニア話し上手の聞き上手　満津子
食事にも降りず二階で好きなこと　文時
点と線つなぎマニアの旅続く　朱夏
推理マニアでひとのこころを読みすぎる　楓楽
熱くなることがマニアの資格です　保州
近松のマニアで恋に縁がない　鹿太
怖いこと静かなブームガンマニア　文時
下さいな古いお金のマニアです　鬼遊
コインの整理「ごはんですよ」が聞えない　度
釣りマニア無念無想で時を止め　勇太
花マニア小さき庭に四季の花　公一
アンチークな人形並べまだ独り　たず子
開通へ寝袋持って行くマニア　正雄
世界地図ひろげ楽しむ旅マニア　諷云児
佳
駅弁の包み集める老母の旅　佳秋
マニアになってから視野せまくなる　弥生
夢さめてマニアに遠い波の音　花梢
鉄道マニアの頭に詰まる時刻表　茜
魚屋で大物釣ってくるマニア　勇太
人
釣りマニア釣った魚は口にせず　武庫坊
地
変な虫追うてマニアは出たっきり　紫香
天
宝石マニアきっと寂しいひとだろう　千秀
軸
マニアとは程遠くいる主婦の午後　みつ子

兼題「しつこい」　宮崎　シマ子　選

毎日の電話で母は言い足らず　柳伸
山ひとつ越すとしつこくなるうどん　正子
しつこさに負けた女にある打算　柳影
しつっこいようだが老母に火の用心　文子
しつこいが友の言葉が温かい　狸村
しつこく泣けば男ほんとうかと思い　洋
しつこさは親ゆずりだと木守柿　弘直
あわだち草くしゃみしつこく誘いだす　茜
したたかでしつこい島が四つ浮く　隆
豪遊にしつこすぎたか山を売る　豊太
しつこいほど念を押されたのに忘れ　天笑
回り道したのにしつこい人に逢う　〆女
小兵はしつこく下へ潜り込み　菁風
握手の手　離してくれぬおばあちゃん　天笑
コロンボがじわじわホシを追いつめる　正坊
しつこさが嫌いと女ついてくる　千秀
夫婦の事情しつこい外野口が過ぎ　勇太
しつこさが仕事の鬼でちびる靴　昭子
試着室おんなしつこく目が光る　良知
原爆のことはしつこく伝えねば　義子
妻にまだしつこくエール送られる　公子
三味の糸しつこいまでに音を選る　美津留
外食三日そろそろ茶漬け欲しくなる　朱夏
しつこいのは秋のわたしの物忘れ　森子
言い訳のしつこさ嫌う花時計　諷云児
しつこいが筋の通った父の酒　一風
歩が金になってしつこい駒さばき　正雄
追伸にしつこい愛が盛ってある　緑良
清姫になってあなたを離さない　㈹美智子
居留守する顔にしつこい蠅が飛ぶ　紫香
万一のときと保険屋言いすぎる　保州
無理するなばかり母さんくり返す　ダン吉
しつこさが消えて近いと噂され　三男
あれ以来妻は無口で根が深い　恭昌
しつこさはボクの身上棒グラフ　寿美
写経千枚しても癒えない胸の傷　楓楽
しつこくてごめんやっぱり君が好き　ダン吉
人
言い勝った悔いがしつこく身を責める　楓楽
地
一策へしつこい言葉伏せておく　寿子
天
幸せを目指すしつこい汗がある　緑良
軸
母の手のようにしつこくのびる蔦　シマ子

兼題「掃く」　田中正坊　選

落葉掃く今日一日の悔いを掃く　さち子
掃く身にもなって欲しいと叱る母　庸佑
お隣も掃いて豊かな朝にする　弥生
休肝日　気分転換庭を掃く　武庫坊
掃き捨てるほどの中から君拾う　昭子
悟りには遠く参道掃いている　寿美
母方のしつけ通りに持つ箒　しげお
竹箒からかうように散る落葉　文秋
掃きよせて落葉も過去も焼いている　柳影

残菊の香を惜しみつつ掃き捨てる　朱夏
しがらみも枯葉と共に掃きすてる　一風　鹿太
女工哀史　野麦峠を掃いた雲　みつ子
子供部屋掃けばどんぐり転げ出る　鬼遊
求職難　掃き捨てるほど人を選り　稚代
四面楚歌　掃いて捨てたいことばかり　いわゑ
一掃きの雲よ天女の筆の跡　親踏
姑が来て何も言わずに掃いている　かすみ
手箒が好きで姑さんサッサッサ　ダン吉
護憲派を一掃させてなるものか　悟郎
俗塵を掃きに街行く僧の列　諷云児
床下を掃くと昔の絵に出会う　公子
庭を掃く冬の囁き聞きながら　重人
嫁もろて息子掃除もするらしい　栞
落葉掃くもう人間にあきました　萬的
忘れたい過去あり尼僧掃く落葉　重人
落葉掃く尼僧に秋が深くなる　三男
落葉掃く尼の足から冬になる　公子
一つ掃き一つ汚して僕の庭　希久子
掃除機に追われる僕と新聞と　みつ子
掃海艇　永田町にも欲しくなる　月子
玄関も夫が掃いてくれている　朱夏
佳
こぼれ萩　恋の余韻を掃き寄せる　吐来
打ち水と箒うれしい人を待つ　花梢
ひとり言隣の落葉掃いている　太茂津
ペン持ったまま老妻に掃き出され　柳影
好きな人通る時間を掃いている
人
エリートと言われ社長の髭も掃く　紫香
地
忠魂碑　掃いてる人も歳をとり　英子
天
転勤の朝念入りに掃く社宅　久峰
軸
シルバーが階段を掃く冬帽子　正坊

兼題「世紀末」　高杉鬼遊選

世紀末語れば鬼の高笑い　文時
カウントダウン始まっている世紀末　朱夏
キリストが一番見たい世紀末　公一
世紀末渡る橋桁たしかめる　稚代
世紀末やわな男の耳飾り　寿美
ありがとうを沢山言おう世紀末　美代子
世紀末もジャンジャン町で飲んでいる　天笑
円高がいつまで続く世紀末　笛生
あいつらに次の世紀はまかされぬ　寿美子
世紀末あなたが怖くなってきた　房子
寅さんの恋まだ続く世紀末　一風
世紀末やはり親子で語り合う　さち子
青リンゴのいびつに並ぶ世紀末　たず子
世紀末に核全廃を祝いたい　ダン吉
ひと仕事まだできそうだ世紀末　良知
世紀末どこまで重い塾かばん　たず子
食べ過ぎて脳も動かぬ世紀末　太茂津
世紀末　皆鷹の目になってくる　正雄
ピストルが不気味にふえる世紀末　美津留
世紀末騒がす恋をしてやろう　義子
女たちばっかり残る世紀末　弥生
世紀末　天の岩戸に隠れたい　稚代
恐竜が息吹き返す世紀末　佳秋
大予言当たり西成湧き返り　天笑
世紀末までに満期になる保険　螢
もう何も欲しい物無い世紀末　太茂津
世紀末なにも構える事はない　澄子
鍵穴を覗くと見える世紀末　諷云児
世紀末煙も見えずサンマ焼く　義子
公僕が私欲に走る世紀末　正子
世紀末燃えないゴミが多すぎる　保州
佳
どの星へ貴方と行こう世紀末　かすみ
方舟の予約がしきり世紀末　正坊
ノストラダムスの窓から見たい世紀末　洋
スリッパが浮いてる運河世紀末　蕗児
世紀末つかみどころもなく群れる　茜
人
花火屋がきっと儲ける世紀末　哲子
地
信号が皆赤になる世紀末　英壬子
天
椅子ひとつ用意しておく世紀末　寿子
軸
方舟に乗って下さる人を待つ　鬼遊

兼題「畳」　西尾栞選

栄枯盛衰　飽かず見て来た石畳　三男
古畳　正座をすれば亡父の声　寿美子

来年をよい年にする畳替え　たず子
山小屋に三畳があり智恵子抄　正坊
畳の上で死にたいとピストルをみがく　重人
故郷の母泊める畳の部屋ひとつ　哲子
天下太平　畳の上で泳いでる　射月芳
ふる里や畳の上にあるおひつ　岳人
黙秘権崩す刑事のたたみかけ　一閑
スタートは三畳だった妻と僕　正子
四畳半あれが二人の始まりや　ダン吉
青畳　今日は嬉しいはなし聞く　義子
脱ぎ捨ててほんとの僕がいる畳　希久子
畳一帖プライバシーを護りきる　太茂津
畳がえ大脳までも活性化　隆
長患いの畳が吸っている涙　茜
四畳半一間の頃の温い妻　良知
畳の上で死ぬと決めてた母だった　絹子
挙措動作　畳の縁にある躾　重人
青畳の匂に遠く柔道着　洋
どっこいしょと言わぬと畳から立てぬ　保州
再婚の足になじまぬ青畳　たず子
畳替え当分たばこ吸わないで　月子
男世帯の畳は酒の味も知る　緑良
青畳　猫がほほずりしています　良知
酒旨し雪見障子の四畳半　柳弘
料亭の畳は政治の裏を知り　吸江
青春をうめた下宿の古畳　稚代
安住の地である畳が破れてる　弥生
畳替え夫にやにや笑ってる　美房
青畳匂う親子の腕角力　弘直

終章は畳の部屋に決めている　花梢
老い二人　歴史が重い古畳　悟郎
佳
喪が明けて壁も畳も深呼吸　雅文
畳数から女性史が変り出す　澄子
明太子　畳の上に落ちて秋　岳人
聞き捨てにならぬ話を聞く畳　諷云児
ユトリロにばったりと逢う石畳　正坊
人
畳替えするととんでもない噂　かすみ
地
仏さんと母に畳の部屋がある　花梢
天　弥生

独房の畳で神と対話する

軸

家元の足袋は畳のへりをふまぬこと　栞

お願い

本誌の定期発行と早期発送を期するため、新年（1月号）から投句・原稿の締切日を厳守いたします。「川柳塔」等の投句欄は毎月**15日**、その他は毎月**25日**です。よりよき柳誌をつくるためにご協力くださいますよう、よろしくお願いいたします。

（**編集部**）

本社句会全出席者（11月現在）　西田柳宏子・野村太茂津・黒川紫香・籾山隆宮口笛生・海老池洋・藤井正雄・川原章久・金井文秋・宮園射月芳・門谷たず子木本朱夏・米田恭昌・松原寿子・河井庸佑・辻白溪子・浅野房子・吉川寿美・榎本吐来・田中正坊・西出楓楽・福本英子池森子・堀端三男・藤田頂留子・西口いわる・小池しげお・吉村一風・坊農柳弘濱田良知・福浦勝晴・高須賀金太・板尾岳人・玉置重人・奥田みつ子・河内月子前たもつ　（37名）

喪中につき年賀のご挨拶は
遠慮させていただきます

天　正　千　梢

奈良市南永井町三八三―七

夫義美が死亡しましたので
年賀欠礼いたします

浜　本　ち　よ

唐津市佐志町八八六

川柳とリズム

川柳こぼれ話

田中正坊

9月号の「川柳と音韻」は、北川春巣論考にとらわれすぎて十分に意をつくせなかったので、音韻もふくめてもう少し広い観点から川柳とリズムについて述べてみたい。句会における入選作品の発表（披講）を聞いていていつも感じることだが、その調べが耳に快い句とそうでない句とがある。「文学で最も大切なのはリズム感覚だ」と北杜夫が何かで述べていたが、散文においてもそうであれば、まして詩ではということになろう。

日本語は子音と母音で構成されており、一句の中に同じ母音が含まれておれば韻を踏むことは前回に述べたが、子音についても同じことが言える。例えば次の短歌―

新しきサラドの皿の酢のかおり
こころに沁みてかなしき夕

には、子音（s）が六つも入っており、口誦すれば何ともすがすがしい。俳人の坪内稔典も俳句における「音楽性」を強調しており、

一月の川一月の谷の中　飯田竜太

を例句として示しているが、大堂哲子の

パラソルをパンと開けば夏弾む

もなかなかリズミカルではないか。

音韻（音素）には、子音・母音の「分節音素」とアクセント（強弱）・イントネーション（抑揚）の「韻律音素」とがある。中国語には四声（平・上・去・入）があり、本格的に漢詩をつくるには、その習得が必要とされており、ヨーロッパ系の言語にも、独特のアクセント・イントネーションがあるのは周知のとおりである。

日本語ももちろん、韻律があるわけで、外人が話す未熟な日本語は奇異に聞こえるし、日本人の場合も方言（国訛り）によって韻律が異なる。しかし、学校教育やラジオ・テレビの普及によって、標準語とともにある程度の標準音韻も一般化しているので、入選句を発表する際、正しいアクセントとイントネーションを用いなければ、せっかくのリズム感が生かされないことになる。

ところで、日本語の音は五〇音と言われているが、これに濁音・半濁音、さらに促音・拗音・長音・撥音を加えるとざっと一〇〇音となる。そこまで触れると話がややこしくなるので略すが、基本的な五〇音について見ても、それぞれ違う音感を持っている。

荒海や佐渡によこたふ天の河　芭蕉

有名なこの句は、母音（a）を九つも含んでおり、音感上も雄大な印象を与えている。楠本憲吉『俳句入門』では、特に「音感」について一節を設けているので紹介したい。

まず、母音では、ア（a）は雄大、イ（i）は軽快・繊細、ウ（u）は沈うつ、エ（e）は温雅、オ（o）は荘重のニュアンスを持つとしている。さらに、五〇音の行の区別から見ると、ア行音はやわらかく、明るくて丸みを持ち、カ行音は堅く、鋭く、高くひびき、サ行音は清く、さわやかで細い感じ、タ行音は厚く、豊かであり、ナ行音は鈍く、おだやかに弱く、ハ行音は軽く、明るく、マ行音は高く沈み、ヤ行音はア行音より濁って幅があり、ラ行音は流動・旋回し、ワ行音はア行音よりも重みがあって強くひびくとしている。

古来、名歌・名句と言われるものは、すべてリズム感がすぐれているが、音韻や音感を意識して作句することは実際には少ないと思う。やはり作品を自ら〝舌頭千転〟して検討し、推敲を重ねることがたいせつだろう。例によって舌足らずとなり、肝心の川柳作品を例示するスペースがなくなってしまった。

甲吉川柳記念句会参加みちのくの旅

瀬戸　まさよ

雨の伊丹空港を出発した飛行機はたちまち雲海を突き抜け、コバルト色の空を飛んで行く。「只今、新潟の上空でございます」とのアナウンス。停止しているような静けさの中機首を下げたと思うと、もう青森空港。時刻は十六時三十分、一時間半の旅だ。

十月二十一日、橘高薫風主幹と朝日カルチャー八人、ローズカレッジ二人、計十一人は川柳塔みちのく顧問である工藤甲吉氏の句集『甲吉川柳』発刊記念句会に参加するため、青森へ旅立った。同夜は浅虫温泉の雪花荘で宿泊し、ウニやホタテの刺身に舌鼓を打ち、相撲吟などに興じる。

翌二十二日は曇天、バスで十和田湖へ。途中で雨になるが、紅葉はより美しく映え、十和田湖では晴れ間に恵まれて観光船で一周、夜は川柳塔みちのくの招待で弘前市内の料亭で交歓会が行われた。

そして二十三日は、波多野五楽庵氏ら四人の方がマイカーで津軽藩主菩提寺の長勝寺や岩木山神社を案内してくださり、りんご園を経て岩木山南麓の嶽温泉へ。山のホテルで乳白色の湯につかり、名物マタギの釜飯と土瓶蒸しのご馳走にああ、満足！　正午過ぎ、句会場の弘前プリンスホテルへ向かった。

茨木　修

句会当日は、前日までのぐずついた天気もどこへやら、雲一つない晴天となった。会場は新しい瀟洒な和風建築のプリンスさくら亭二階の大広間。はじめに工藤甲吉・波多野五楽庵両氏の歓迎と紹介のあいさつ、橘高薫風主幹の祝辞があり、お三方相互や諸先輩との交遊と研鑽の様子をお伺いし、一同、うらやましく感じた。

いよいよ午後二時から入選句が発表され、総合得点の上位十氏に賞品が贈られたが、この時点で早や三時、帰阪第一陣五人が中座して空港へ向かった。

次いで祝宴に入り、おいしい地酒で乾杯、歓談に時間の経つのも忘れたが、四時には第二陣六人が宴半ばで皆さんに見送られて退席したのが心残りであった。

〈参加者一人一句〉

原色を頑固に嫌う草木染　中野　欅子
鬼やんま持たせてくれた遠い夏　瀬戸まさよ
ブローチか案山子の胸にいるトンボ　田中由紀子
みちのくのとんぼ返りにある旅情　籾山　隆
群トンボ浪速を発ってリンゴ村　山下美津留
赤トンボ林檎のエキス吸った赤　茨木　修
すべて許して女は月に還りゆく　奥田みつ子
どこででも鏡に女顔を振り　郡　慶三
四季ありて城は紅ひく眉をひく　山本　義子
城が崩れる単身赴任まだ続く　谷平　昭子

〈各題天位句〉

紙おむつされても自説曲げぬ父　加藤彩人
澄み切った空をトンボに明け渡す　対馬一閃
累々と蜘蛛の巣を張り母になる　千島鉄男

■NHK川柳教室

富山吟行の旅

黒田能子

十月二十日、快晴の大阪を薫風先生はじめゲスト参加の鬼遊先生ほか数名を含むNHK川柳教室吟行会の一行二十一名で富山県北東にある小川温泉へ出発した。ビールやお菓子を配られ、すっかり旅気分で、普段より短縮の授業も頭に入ったやら入らなかったやら。早速、後部のサロンでは酒宴にカラオケと賑やかな中を一路、富山へとバスはひた走る。

砺波平野の散居村の立派な防風林を眺めているうちに、本願寺第五世綽如上人開創の瑞泉寺に着く。その頃には予報どおり雨が降り出した。寺では本堂の広さ、山門の立派な木彫に見とれてしまう。欄間の井波彫刻は、今も若い人たちに受け継がれているそうだ。「お寺にはしっとり雨が似合うわね」と言いつつまた車中へ。

今回は夜の句会に備えて、これまでとはうってかわって一同しんとして作句する。小川温泉に着き、ひと風呂浴びて寛いだ浴衣姿の句会は、賞品も沢山出てとても楽しかった。宴会は例年通りざっくばらんで、時間切れがとても残念に思われた。

翌朝はやはり雨。楓楽さん、希久子さんと私は傘をさして天然洞窟露天風呂を見に行った。混浴だったが誰もいないのを幸い、勇気を出して入った。雨に煙る山並を眺めて入る温泉は最高にいい気分で、帰りはまたビショビショになったが、楽しい思い出が出来た。

富山県民俗民芸村、加賀の漆蔵を回り、一泊二日の吟行を恙なく終えた。

瑞泉寺石垣一揆の悲話を秘め　楓楽
木彫の町へ若さをぶっつける　一風
瑞泉寺　如来にちょっぴり甘えて来　千梢
若い背をすべり落ちてく小川の湯　未佐子
彫刻の粋を集めて瑞泉寺　千枝子
防風林にも家柄の散居村　洋
彫りもので主人のエトがすぐわかる　東雲
散居村　家宝代々杉が継ぐ　能子
み仏を守る欄間の怒る龍　正雄
散居村　嫁にやりたい杉木立　恭昌
お賽銭二の次にして龍眺め　宣司
冠雪のように立山　雲の中　会美
街に住む雀が知っているパン屋　鬼遊
はぐれ鳥　所詮ひとりの世を生きる　希久子
水鳥は悲しい時も胸を張り　喜美子
挨拶が客よりうまい九官鳥　佳秋
居心地がよいのか小鳥巣立たない　たもつ
蟬止んで団地雀はかしましい　武
カラス啼く坂道靴の重いこと　幸雄
鳥籠やなんて嫌です羽根がある　香住

国民文化祭川柳大会に参加して

西浦小鹿

十月二十三日、三重県津市で開催された第9回国民文化祭の川柳大会に参加させていただきました。「紙とエンピツさえあれば川柳ができる」と言われてもう八年近くなってしまいました。しかし、全国大会に出席するのは初めてのことで、どんな人に逢えるのか、大会がどのように進行されるのか、興味がありました。

当日の会場である津市センターパレスの出席者は三百五十二名と、全国レベルの大会としては少し物足りない気がしました。大会は午前十時に開会され、仲川たけし全日本川柳協会会長から、昨年、沖縄県にも川柳協会がつくられ、四十七都道府県すべてに組織ができ、ますます川柳が盛んになっていることが報告されました。

今回は初めてパネルディスカッションが行われ、川柳についての意見交換がなされました。北海道の斎藤大雄さんから、人間として完成し合うために、理性と感性の両面から川柳を作り出すこと。愛知県の渡辺和尾さんから、自分自らの老いを知って、若い人に川柳を力強く、優しくアピールしてゆくこと。熊本県の田口麦彦さんからは、サラリーマン川柳も一つの川柳として考え、マスコミを通じて川柳の和と質を深めてゆくことが発言されました。また、会場からの質問で選者の勉強会の必要性、川柳も詩や俳句と同じように批評される基盤をつくってゆくことなどが熱心に討議されました。

午後からは、メインである入選句の発表です。宿題「鈴」「真珠」「灯台」「太鼓」「山」「鬼」、席題「スピード」「神」の八題からそれぞれ秀句七句と特選三句が披露され、そして特選二十四句の中から文部大臣奨励賞が選ばれるわけです。鳥取県からは、新家完司・政岡日枝子・野坂なみ・松本よしえの四名の方が特選句に入り、文部大臣奨励賞の栄冠は東京の高井美恵さんの次の句に輝きました。

神の手に返すいのちを白くする

会場の皆さんは、盛大な拍手で高井さんの句を賞賛しました。川柳作家一人一人が自分の喜びのように拍手し、いい句を聞かせてもらってありがとうという気持が会場いっぱいに広がりました。私は「川柳の絆はこれだな」と思いました。

川柳は個人的な創作活動ですが、大会の準備や会場までの移動のお世話など、一人でできることではありません。多くの皆さんの協力と努力があってはじめて大会が成功し、いい句ができるのだと改めて川柳の深さを教えていただいた大会でした。

なお、文部大臣奨励賞を除く各賞受賞句は次のとおりです。

○

どの山も交響曲を持っている　福光　二郎

ゆっくりと動いて母に無駄がない　井原みつ子

弥陀の眼に鬼より怖い笑みがある　藤沢　誠

鈴の音が聴こえる枯野から抜ける　中井　昭子

山をへだてて響きあうのは対の鈴　柏原幻四郎

哀しみをしっかり抱けば真珠になる　新家　完司

菩薩です鬼です母の火を燃やす　斉藤由紀子

灯台の空は明るい色で画く　鷹取　淳風

子を照らす灯台たらん麦を踏む　大脇　一荘

柳界展望

山田良行氏に勲五等旭日章

社団法人全日本川柳協会理事長山田良行氏は長年、川柳の普及に尽した功労により11月3日、勲五等旭日双光章を授与された。

★ふあうすと川柳社会長の去来川巨城氏は文化の日に神戸市文化賞を受賞した。

★前川柳サークル卯の花会長で本社参与の辻白渓子氏は11月3日、短詩文芸川柳を通じ文化の向上に貢献した功績により高槻市教委から文化功労賞を受賞した。

★日川協の全日本川柳誌上大会に対し、文化庁が後援することとなり、このほど通知があった。また、協会は誌上大会の特別選者（第2次選者）として次の7氏を委嘱した。

礒野いさむ・去来川巨城・神田仙之助・橘高薫風・斎藤大雄・時実新子・渡邊蓮夫

さらに日川協加盟の全柳社・句会がそれぞれ2句を推薦し、誌上大会入選作品集とともに『平成柳多留』第2集に掲載することとなった。

★堺まつり協賛・堺市民川柳大会は**10月8日**、サンスケア堺で開かれ、次の同人2氏が秀句に選ばれた。

金の要るはなし息子に聞かせとく　河内　月子

千枚田むかしのままに土を鋤く　岩本美智子

★平成6年度大阪市民健康フェスティバル・第8回健康づくり川柳展が**10月15日**開かれたが、本社同人の西田柳宏子、誌友の中田あい子・浜田良知・川原章久の各氏が入選した。

★岸和田市文化祭参加・市民川柳大会は**10月16日**、市民会館で開かれた。文化祭賞・同奨励賞次のとおり。

〈文化祭賞〉

喝采を頼む死んだと聞いたなら　飯尾　健児

〈同奨励賞〉

合せ鏡の中で揺らいでいる自信　田中　輝子

★文化祭協賛・枚方市民川柳大会は**10月30日**、枚方公園青少年センターで開かれ同人の町田達子さんが市議会議長賞を獲得した。

夢も希望も新空港を発つ二人

★吹田市民川柳大会は**10月23日**、125人が参加して同市文化会館で開かれた。同日の各題秀句次のとおり

大粒の汗が明日を保証する　久保　仁秋

内堀の水位を主婦として見せぬ　柿木　英一

来年の命を信じ舞う落葉　藤村　〆女

気まぐれな旅してみたいブーメラン　大野百合子

今年もうわずか聞こえる山鹿流　岩内　外吉

私へ下げる頭が低過ぎる　山本希久子

あかんとこええとこみんな好きになり　鮒子田嘉子

★川柳塔唐津支部12周年大会は**11月2日**、唐津シティーホテルで開かれた。当日の各題天位句次のとおり。

走り続けた父の背中が吊ってある　林　荒介

無口に過す気怠い雨の午後　林　荒介

祭りからかえると妻のメモに風　酒谷　愛郷

街中が沸立つ山車の大太鼓　松崎弥太郎

声のする方へは行かぬ鬼ごっこ　井崎ミサ子

いつの日かアダムは青いいつの日か実を挽る　鶴久百万両

忠孝の額を支えている布団　田口　虹汀

★川柳ねやがわ20周年記念寝屋川市民川柳大会は**11月3日**、113人が集まって同市立総合センターで開かれた。各題秀句次のとおり。

父が愛した美人画ぼくも愛してる　波部　白洋

国と親選べず生まれ飢餓に泣く　酒井勇太郎

庭に芝植えよう今度買うお家　岸野あやめ

真心はいつか届くとそばの花　足立　淑子

善人で円空仏の目が好きで　青木　勇三

すさまじい愛のかたちのきりぎりす　川見　絹子

★川柳ねやがわ20周年記念合同句集『愛生住』―寝屋川市川柳協会編集発行―（B6判・170頁・橘高薫風序文）会員70人の各20句を収録。

★富田林市民文化祭川柳大会は**11月6日**、富田林中央公民館で開かれた。各題天位句は次のとおり。

約束の出来ぬ男も飼うて置く　田中　好啓

女人高野に喜劇がひとつ落ちている　田中　好啓

遮断機が母のかたちで降りている　池　森子

嫁がせて地酒届ける娘に育ち　田中　好啓

味方にはさとうを少しずつへらす　河内　月子

火の如きある日の愛が水になる　中川　楓

いまに見てろその声聞いてから久し　後藤　正一

★兵庫のまつり・ふれあいの祭典'94川柳祭発表大会は**11月19日**、明石市民会館で開かれ、文部大臣奨励賞以下の各賞が表彰された。本社同人では三宅保州氏が明石市教育委員会賞、奥田みつ子さんが兵庫県川柳協会賞、安平次弘道・鈴木公弘林荒介・青枝鉄治・岸桂子門谷たず子の6氏が佳作に入選した。

〈文部大臣奨励賞〉

娘の羽化よなんと明るい反抗期　南斗　七星

★川柳噴煙吟社は次の要領で第23回涛明賞作品募集を行っている。作品は雑詠3句1組（未発表作品）、資格不問・無料、**12月31日**締切。葉書の表に「涛明賞」と朱書、郵便番号・住所・氏名を明記、裏面に作品3句を連記して〒860　熊本市南熊本4―2―5・川柳噴煙吟社へ。上位3名に噴煙賞、平成7年5月27日、噴煙川柳大会席上で表彰。

★鵜かご川柳社はこのほど平成6年度鵜かご大賞を決定、表彰した。銅賞・銀賞金賞の順。

けんかする度にお鍋がピッカピカ　金子美千代

あきないの裏を見てきたアルバイト　林　あつみ

金婚を芋で育てた子が祝い　森　正

★優れた作品・評論・結社活動によって川柳界に貢献した作家を顕彰する「川柳大雄賞」が設置された。決定は斎藤大雄氏と大雄賞運営委員会が行い、平成7年4月29日予定の札幌川柳社年次大会で顕彰、賞状と副賞十万円が授与される。

▽ご芳志△

■大橋満子さん（京都市・小林英子さんご遺族）から供養として金一封、拝受いたしました。

■安藤寿美子さん（参与・豊中市）から亡夫供養として金一封、拝受しました。

■西宮北口川柳会から創立20周年・黒川紫香会長米寿内祝として金一封、拝受いたしました。

▽川柳塔碑基金△

■亀岡哲子・山本義子・小倉藍の3氏から拠出いただきました。

▼訂　報▲

■浜本義美氏（同人・唐津市）脳梗塞により入院中であったが、10月4日死去、74歳。

■山添眉水氏（本名宇三郎大阪川柳界の長老）10月31日、老衰のため死去、95歳。

▽訂　正△

■**11月号**―P86（大空のこころ）下段15・16行目の信濃路にての初めの2句は、「日車」で、3句目からが「路郎」の作品でした▼裏表紙内側の頁の本社十一月句会の「とき」が11月2日（日）となっていたのは、**11月7日（月）**の誤りでした。謹んで訂正します。

各賞選考について

川柳塔社では平成7年度から路郎賞・川柳塔賞の選考委員を次のとおり交替いたします。

路郎賞　板尾岳人・河内天笑・小池しげお・小島蘭幸・吉岡美房

川柳塔賞　榎本吐来・川島諷云児・小林由多香・福本英子・宮口笛生

平成6年度の**各地柳壇賞・一路賞**は、**銀河系賞**・**苟香の花賞**と同じく平成7年1月に授賞します。

従って平成7年度からは、六つの賞をまとめて同人総会が開かれる10月の川柳大会で表彰することとなります。

浜本義美さんを悼む

仁部四郎

平成六年十月四日、浜本義美さんが亡き人となりました。

大正八年十一月四日のお生まれですから七十四歳ということになります。

昭和六十三年に喉頭癌が発病し、一時は声を失うほどであったのが克服して周囲を安心させ感嘆させていたのに、脳梗塞に襲われて遂に帰らぬ旅路の人となったのは、唐津の柳友にとって痛恨の大事でした。

義美さんはF商社に四十年近く勤務していましたが、既に昭和二十二年頃から川柳作句に志があり、新聞柳壇では常連になりつつありました。昭和五十三年頃、川柳塔同人であった故新岡回天子が唐津で主宰していた「虹川柳クラブ」のメンバーになりました。

私の句がはじめて川柳塔の誌面に出たのは昭和五十五年の五月号ですが、その頃、義美さんは毎月の例会で大活躍でした。句評その他の発言に活発なものがありました。

定年で会社を退いてからは、まさに川柳ひとすじで、唐津から一挙に七名が川柳塔の同人に推挙していただいたのは、昭和五十七年二月でしたが、義美さんの句は川柳塔誌上のみならず、新聞柳壇、佐賀県文学賞川柳部門で光彩を増すようになりました。

絵が好きでよくスケッチに出かけていたことは知る人ぞ知るですが、自宅には遺影にしてくれと本人が願っていた自画像があります。身体こそ小柄であったが、絵心、詩心とでも言うべきでしょうか、奥深く対象を見つめるまなざしを感じさせる絵です。安易に他に妥協しない面魂を感じさせる絵でもあり、一すじの哀愁も漂わせる絵です。

平成二年八月に句集『残されいのち』を発表されたのですが、題字は、川柳塔社同人でもある奥様ちよさんの筆です。

闘病生活は前後七年にわたりましたが、その間の奥様の御苦労が今更ながらしのばれます。まさに麗筆で題字は書かれています。うらやましいともいえる事です。

義美さんは熱心な仏教徒でもありました。日連宗昌善寺の壇徒総代を三十年以上にわたって務めています。

F社在職中の昭和五十三年に、当時の川柳塔社副理事長大坂形水さんの句集に接したのが義美川柳の開眼であったようですが、代表作とも言える句を紹介します。

吉相の印鑑にしてから用がなし
アルコール抜いたゴロ寝の日が寂し
出ぬ声でしかと唱えたお題目
退院の日から頑固に又戻り
来年は誠かもしれぬ案山子たち
いのちある句も残せずに旅立てず

昌山院法義日美居士さん、さようなら。

鳥取県川柳大会　平成7年の鳥取県川柳大会は3月26日（日）、鳥取県気高郡鹿野町の鹿野町営国民宿舎「山紫苑」で開かれることに決まりました。次号で詳細を掲載します。

12月各地句会案内

	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	2日(金)午後1時から 冬・おわり・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5－25－17　春城年代
堺川柳会	3日(土)午後1時から 親しい・風景(共に共選)	〒593 堺市堀上緑町2－16－3　河内天笑宅 JR津久野駅前午後零時半集合
川柳塔 まつえ	10日(土)午後1時半から 歳月・珍味・走る	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
八尾市民 川柳会	10日(土)午後6時から 切る・すき焼・雑・プラン	八尾文化会館　近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1－15　宮崎シマ子
川柳塔 わかやま	11日(日)午後1時から 来春・ラッキー・楽	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111－2　牛尾緑良
西宮北口 川柳会	12日(月)午後1時から グラフ・詰める・そろそろ・自由吟	西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9－4　西口いわゑ
ほたる 川柳 同好会	13日(火)午後1時から シナリオ・探す・財布	豊中市立螢池公民館　阪急螢池駅西へ150米 〒560 豊中市螢池中町3－10－28　井上直次
高槻川柳 サークル 卯の花	15日(木)　正午から 歳月・恥・追う・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3－8－8　川島瓢云児
南大阪 川柳会	16日(金)午後6時から 複雑・無力・ゆとり・類似	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1－5－2　金井文秋
川柳 ねやがわ	18日(日)　正午から 地獄・蹴る・ルール・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
もくせい 川柳会	19日(月)午後1時から 足・電車・拒む・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801　田中正坊
京都 塔の会	20日(火)午後1時から 板・違う・割引	京都府南労働セツルメント　近鉄東寺駅西徒歩3分 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル　都倉求芽
富柳会	22日(木)午後1時から 値引き・捨てる・せかせか・自由吟	富田林中央公民館　近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4－1　池　森子
東大阪市 川柳 同好会	24日(土)午後6時から 酔う・しっかり・別れ・無	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3－21　片岡湖風
はびきの 市民 川柳会	25日(日)午後1時から ノック・空(から)・飽きる・甲斐性	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満　敏
岸和田 川柳会	25日(日)午後1時半から 逃げる・抜足・年末・能力	市立福祉総合センター　南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610－85　芳地狸村

★日時・会場などが変更になる場合は、田中正坊(06－336－3395)へご連絡ください。

編集後記

★2年前のこの欄で、会議のあり方について触れたことがある。どのような組織においても、会議が正しく運営されてはじめて、組織が円滑に機能する。大は国連から小は自治会に至るまで、原則は同じである。それについて二、三気の付いたことを述べてみたい。

★まず、いかなる会議も、法令や規約に基づいて招集し、運営されなければならない。それに準拠しない会議の決定は、原則として有効性を持たない。議事の運営は、その組織の規約などで定められたものを除いては、一般的な会議のルールに従うべきであろう。

★例えば、出席者の過半数の賛成によって議決するという多数決の原理がよく知られているが、その他のルールについては、議事通則と呼ばれる不文律がある。会議の秩序を維持し、議事を整理する議長権限、ひとたび議決した案件については、再びこれを審議しないという一事不再議の原則などがこれにあたる。

★また、会議の構成員は、予定された議案以外に一定の事項を議題とすることを求める動議を提出でき、特に議事進行に関する動議は優先して審議しなければならない。討論・採決にあたっては、反対意見を優先し常に少数意見が尊重されるべきことなど、いずれも民主主義の精神を貫徹することが基本である。

★いよいよ今年も12月。本誌の1月号から本号に至る総頁数は一、四七六頁。5年前の平成元年は一、二〇六頁であった。（正）

ひとこと

五七五と音韻

私は子どものころから五・七・五に興味を持っておりまして、昭和四年ごろに『鉄道青年』というのがあり、剣花坊選にも投句しておりました。そこで川柳とは五七五でありさえすればよいと思っていました。

『川柳塔』九月号の「川柳こぼれ話」ではじめて音韻のことを知り、こんなことも知らずに当地の川柳クラブの世話をしていたのかと恥ずかしく思っております。

只今、人さまの特によい句の韻ばかり調べています。やはりリズムがよくなり、一度、見ただけで覚えるような句に出合い、寝食を忘れるくらい調べております。

私も年が寄りましたが、後世に残すような句が作れません。でも命ある限り川柳一点張りで作句する覚悟でおります。　二宗　吟平

☆十月号に津軽富士のことを書いたが、思いがけず、その津軽富士・岩木山を間近に初めて仰ぐことができた。十月二十三日、工藤甲吉さんの句集発刊記念句会に参加したのである。

☆山の美しさもさることながら『川柳塔みちのく』の人々の温かさに感激した。地方の句会に参加して感じるのは、川柳に対する熱意そして、人々の絆の素晴らしさである。誌上で名前や句を拝見して、想像していたとおりの方だったり、また、思いがけない発見をするのも楽しいことである。

☆何分にも平凡な主婦の身なかなか思うように旅をすることができない。留守中の家族の食事の用意などを考えると、折角の旅心も半減する。しかし、地方句会の帰りにはいつもまた参加したいなと思う。家族旅行とは違う楽しみ、川柳仲間ならではの旅をもっと気軽に皆と楽しめたらと願う。

☆歳をとるに従って、視野も考え方も狭く頑なになるように思う。せめて、旅先のいろいろな人々や風土に触れて、詩嚢を肥やすことができれば嬉しいのだが。

☆岩木山神社のおみくじに〝一つの考え方にこだわることは心の自由を捨てることである〟とあった。（み）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（**2月号**）　地名　　雅号

◎8句を楷書で正確にお書きください。

きりとりせん

同人　・　**誌友**　マルで囲んでください。

作品募集

2月号発表（12月15日締切）

川柳塔（8句）橘高薫風選
水煙抄（8句）高杉鬼遊選
渺湖抄（3句）小出智子選
茴香の花（3句）西出楓楽選

課題吟（3句）
「鈍い」島崎冨志子選
「テープ」藤解静風選
「てれる」江原とみお選

初歩教室「喜ぶ」（3句）吉岡美房担当

川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄は誌友（誌代半年分前納者）茴香の花欄は女性に限ります。

3月号
課題吟「鳩」「匂う」「柔らかい」
初歩教室「雪」

本社12月句会

とき　12月7日（水）午後5時半
ところ　メンズファッションセンター3F
中央区内本町1－1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（3番出口）交差点南西角

兼題
「ステージ」安藤寿美子選
「めど」吉岡美房選
「すっかり」板尾岳人選
「まばたく」阿萬萬的選
「構える」橘高薫風選

席題　1題　当日発表　各題2句以内
会費　500円
投句　句箋（19cm×4cm）1葉に1句を書き、投句料400円（80円切手5枚）同封のこと

本社1月句会　7日（土）

兼題　「スタート」「しみじみ」「おいしい」「旗」「笑う」

夜市川柳募集

第7回「サラダ」　河瀬　芳子選
ハガキに3句　12月末締切
投句先　〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

12月の常任理事会は12月1日㈭

ＮＨＫ川柳作品募集

課題「嘘」　森中恵美子選
ハガキに3句　12月10日締切
投句先
〒540-01 ＮＨＫ大阪放送局
「文芸部」川柳係
発表　11月24日（土）午前11時5分から
ラジオ第1放送

西日本文字放送作品募集

課題「祈り」　森中恵美子選
ハガキに3句　12月15日締切
投句先
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2－20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

定価　六百円（送料84円）
半年分　四千円（送料共）
一年分　七千九百円（同）
平成六年十二月一日発行
編集兼発行人　西尾巌
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二－一〇－一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六九一六九一四番
振替　〇〇九八〇－五－三三三六八番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可

●川柳・俳句・短歌集　●画集・写真集・絵本
●社史・小説・エッセー　●故人を偲ぶ追悼誌
●創業・喜寿を祝う記念誌　●郷土史

各種本（製作専門）

■少部数の本も
取り扱っています。
■ご相談ください。

ミヤケ プランニング
MIYAKE
planning
〒557 大阪市西成区千本南1-12-8
電話 06-659-5514(代)
FAX 06-652-2928
ジェイ出版
電話 06-658-8741(代)

全日本川柳誌上大会

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」を昨年につづいて開催します。十八回の歴史を持つ全日本川柳大会、九回を数える国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大年間行事ですので、こぞってご参加ください。

課題と選者（各題2句・連記）

「快　調」　江口　東白　　吉岡　龍城　共選
「少　年」　野口　初枝　　片倉　沢心　共選
「ときめき」　佐伯みどり　　西田柳宏子　共選
「　城　」　石井　有人　　広瀬　反省　共選
「五　十」　佐藤　良子　　山田　良行　共選

参加費　2000円（投句料・「平成柳多留」第2集代）

賞　全日本川柳協会会長賞ほか各賞

締切　平成6年12月31日(土)（当日消印有効）

発表　平成7年6月・第19回全日本川柳長野大会

参加方法　所定用紙に各題2句と雑詠1句を書き、参加費と共に左記へ（用紙は請求下されば送ります）。

〒530　大阪市北区天神橋2丁目北1－11－702
社団法人　全日本川柳協会
電話・FAX（06）352－2210